九州大学箱崎キャンパスにおける 近代建築物の評価報告書

平成 24 年 12 月

九州大学箱崎キャンパスにおける 近代建築物の調査ワーキンググループ

目 次

| はじめに | • | • | • | • | • | • | • | | 1 |
|---------------------------------|----------|------------|-----|----|---|---|---|---|---|
| I. 評価の前提 1. 目 的 | | • | | | • | | • | | 2 |
| 2. 近代建築物等の評価対象 | | | | | | | • | | 2 |
| 3. 評価対象建築物等 | | | | | | , | • | | 3 |
| 4. 歴史的背景 | • | • | • | • | • | | • | | 8 |
| Ⅱ. 評価方法 | | | | | | | | | |
| 1. 評価項目・基準・方法、参照情報 | • | • | • | • | • | | • | 1 | 1 |
| 2. 評価のフロー図 | • | • | • | • | • | | • | 1 | 6 |
| Ⅲ. 評価の結果 | | | | | | | | | |
| 1. 箱崎キャンパス近代建築物評点の順位 | • | • | • | • | • | | • | 1 | 8 |
| 2. 対象建物評価結果配置図 | • | • | • | • | • | | • | 2 | 0 |
| 3. まとめ | • | • | • | • | • | | • | 2 | 2 |
| 4. 箱崎キャンパス近代建築物の評価シート | • | • | • | • | • | | • | 2 | 4 |
| <資料編> | | | | | | | | | |
| 「対象建物評価結果配置図」 | | | | | | | | 8 | 0 |
| 「九州大学(箱崎)近代建築物コンクリート強度試験調査業務報告書 | (抜 | 粋) |)] | | | | | 8 | 2 |
| 「九州大学箱崎キャンパスの建物群と同時代の主要建築物との比較」 | | | | | | | 1 | 0 | 3 |
| 「福岡市都市景観賞」 | | | | | | | | | 1 |
| 『「近代化産業遺産群 続33」の選定(平成21年2月6日:経済 | 全 | 美 全 | 旨) | _] | | | 1 | 1 | 2 |
| 「建物の活用事例パターンについて」 | | | | • | | | 1 | 1 | 3 |
| 「九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査 | | | | | | | | | |
| ワーキンググループ議事要旨 | | | | | | | 1 | 2 | 1 |
| 「九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査 | | | | | | | | | |
| ワーキンググループの設置について」 | | | | | | | 1 | 3 | 5 |
| 「九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査 | | | | | | | | | |
| ワーキンググループ名簿」 | | | | | | | 1 | 3 | 6 |

はじめに

九州大学では、現在、箱崎キャンパス、六本松キャンパス及び原町農場を伊 都キャンパスへの統合移転事業を行っている。

その中において、九州大学の百年の歴史と共に歩んできた箱崎キャンパスに は、数多くの近代建築物が存在している。

しかしながら、これまで、九州大学箱崎キャンパスの近代建築物に対しては、 客観的評価は行われてこなかった。

このため、「九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキング グループ」(以下「ワーキンググループ」という。)を設置し、九州大学の統 合移転事業に伴う九州大学箱崎キャンパス跡地の計画的なまちづくりと円滑な 跡地処分のため、近代建築物の客観的評価を行った。

平成24年4月から箱崎キャンパス内に点在する近代建築物について、調査に取りかかり、建築物の外観・内装等の現地調査、参考文献等の資料を専門的視点から検証、7回におよぶワーキンググループによる審議を重ね、歴史的、建築学的、文化的および再活用という多様な観点から客観的評価の結果をまとめたものである。

平成24年12月

I. 評価の前提

1. 目 的

箱崎キャンパスは、九州大学が活動してきた百年間の資産としての近代建築物が数多く残されている。

箱崎キャンパス内に点在する近代建築物について、歴史的、建築学的、文化的および再活用という多様な観点から近代建築物の価値を検証し客観的評価を行うことを目的とする。

2. 近代建築物等の評価対象

学内外の学識者を中心とした構成員からなるワーキンググループでは、箱崎キャンパスの建築物等について、現存する大正末期,昭和初期から戦前までの建築物を近代建築物の対象とし、『「平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現況調査」成果報告書』などの参考文献を基に30カ所の近代建築物を現地調査対象物件として、委員による建築物等の外観・内装等の調査を実施し、創立五十周年記念講堂等の戦後の建築物を加えたうえで、評価に値する対象建築物を24棟に絞り込み、さらに、正門、農学部庭園、地蔵の森(工学部創立75周年記念庭園)の3つの工作物を加え、専門的立場から評価を実施した。

2

3. 評価対象建築物等

| 3. | 評価对象建築物等 | | | | | | | |
|-----|--|-------------------------|-----------------------------------|-----------|---------------------|---------------------------------|-----------------------------|------------------------------|
| | | 建筑石 | 規模(階数・地下、面和 ㎡、平面(正面m×側面 m)) | | | | | |
| No. | 棟名称(建設当初の名称) | 建築年 西暦 (元号) | 階数、 地下 | 面積 (㎡) | 正面m× 側面m | 構造 | 増築の時期(記録に基づく) | 大規模改 修の時期 (記録に 基づく) |
| 1 | 正門門衛所 | 1914 (大正3) | 1 | 34 | 6×6 | 煉瓦造 | - | - |
| 2 | 船舶海洋工学実験室 (造船学実験室) | 1921 (大正10) | 1 | 662 | 65×19 | 煉瓦造 | - | - |
| 3 | 農学部実験室 (汽罐室) | 1921 (大正10) | 1 | 202 | 15×14 | 煉瓦造 | - | - |
| 4 | 道路工学実験室 (河海工学実験室) | 1925 (大正14) | 2 | 205 | 10×12 | 鉄筋コンクリート造 | - | - |
| 5 | 保存図書館 (法文学部図書館及び書庫) | 1925 (大正14) | 4 | 3, 068 | 38×56 | 鉄筋コンクリート造 | 大正15年 | 昭和62年 |
| 6 | 本部第一庁舎 (仮実験室研究室) | 1925 (大正14) | 2 | 2, 881 | 70×30 | 煉瓦造 | 昭和38年、昭和49年、 昭和57年、平成5年 | 平成15年 |
| 7 | 本部第三庁舎 | 1925 (大正14) | 2 | 788 | 20×14 | 煉瓦造 | 昭和48年 | - |
| 8 | 旧応力研生産研本館 (法文学部本館) | 1925 (大正14) | 4 | 9, 570 | 60×69 | 鉄筋コンクリート 造、一部鉄骨鉄筋コ ンクリート造 | - | - |
| 9 | 応用物質化学機能教室 (応用化学教室) | 1927 (昭和2) | 4 | 2, 782 | 49×22 | 鉄筋コンクリート造 | - | - |
| 10 | 旧文学部心理学教室 | 1927 (昭和2) | 2 | 628 | 24×17 | 鉄筋コンクリート造 | _ | 平成2年 |
| 11 | 松浜厚生施設 (学生食堂) | 1928 (昭和3) | 2 | 397 | 19×18 | 木造 | - | _ |
| 12 | 留学生センター分室 (発電所) | 1929 (昭和4) | 2 | 269 | 10×22 | 鉄筋コンクリート造 | 昭和6年 | _ |
| 13 | 工学部本館 | 1930 (昭和5) | 5 B1 | 10, 324 | 107×60 | 鉄筋コンクリート 造、一部鉄骨鉄筋コ ンクリート造 | 昭和63年 | 昭和63年 |
| 14 | 超伝導システム科学研究セン ター (高周波電気及び電子工 学実験室) | 1931 (昭和6) | 2 | 578 | 23×11 | 鉄筋コンクリート造 | - | - |
| 15 | 熱帯農学研究センター (演習林本部) | 1931 (昭和6) | 1 | 452 | 17×33 | 木造 | 昭和12年 | - |
| 16 | 工学部高温化学実験室 | 1932 (昭和7) | 1 | 278 | 21×15 | 鉄筋コンクリート造 | - | - |
| 17 | 砂防工学実験室 | 1934 (昭和9) | 1 | 499 | 10×50 | 木造 | - | - |
| 18 | 第三学生集会所(三畏閣) | 1937 (昭和12) | 2 | 453 | 22×33 | 木造 | - | - |
| 19 | 記録資料館(法文学部演習室) | 1937 (昭和12) | 2 | 649 | 19×22 | 鉄筋コンクリート造 | 昭和15年 | _ |
| 20 | 農学部 6 号館 (農芸化学教室) | 1938 (昭和13) | 3 B1 | 3, 375 | 69×27 | 鉄筋コンクリート造 | 昭和30年、昭和53年 | _ |
| 21 | 航空工学教室 (航空学教室) | 1939 (昭和14) | 6 | 1, 845 | 38×38 | 鉄筋コンクリート造 | - | - |
| 22 | 原子核実験室(理学部実験室) | 1944 (昭和19) | 3 | 2, 157 | 53×52 | 鉄筋コンクリート造 | 昭和34年、昭和40年、 昭和48年、昭和55年 | - |
| 23 | 建築学教室 | 1960 (昭和35) 1970 | 3 | 2, 858 | 64×59 | 鉄筋コンクリート造 | _ | - |
| | | (昭和45) 1967 | 4 | 2, 078 | F4 · · · = · | Nil. fefe | | - |
| 24 | 創立五十周年記念講堂 | (昭和42) | В1 | 6, 157 | 51×73 | 鉄筋コンクリート造 | 平成6年、平成11年 | - |
| 25 | 正門 | 不明ながら 戦前である ことは確実 | - | _ | _ | - | - | - |
| 26 | 農学部庭園 | 1932 (昭和7) | | | | | | |
| 27 | 地蔵の森(工学部創立 7 5 周 年記念庭園) | 1967 (昭和42) | - | | - | | 平成13年 | |
| _ | | _ | | | | | | |



1.正門門衛所



2.船舶海洋工学実験室(造船学実験室)



3.農学部実験室 (汽罐室)



4.道路工学実験室 (河海工学実験室)



5.保存図書館 (法文学部図書館及び書庫)



6.本部第一庁舎 (仮実験室研究室)



7.本部第三庁舎



8.旧応力研生産研本館 (法文学部本館)



9.応用物質科学化学機能教室 (応用化学教室)



10.旧文学部心理学教室



11.松浜厚生施設 (学生食堂)



12.留学生センター分室 (発電所)



13.工学部本館



14.超伝導システム科学研究センター(高周波電気及び電子工学実験室)

4



15.熱帯農学研究センター (演習林本部)



16.工学部高温度化学実験室



17.砂防工学実験室



18.第三学生集会所 (三畏閣)



19.記録資料館 (法文学部演習室)



20.農学部6号館 (農芸化学教室)



21.航空工学教室 (航空学教室)



22.原子核実験室(理学部実験室)



23.建築学教室



24.創立五十周年記念講堂



25.正門

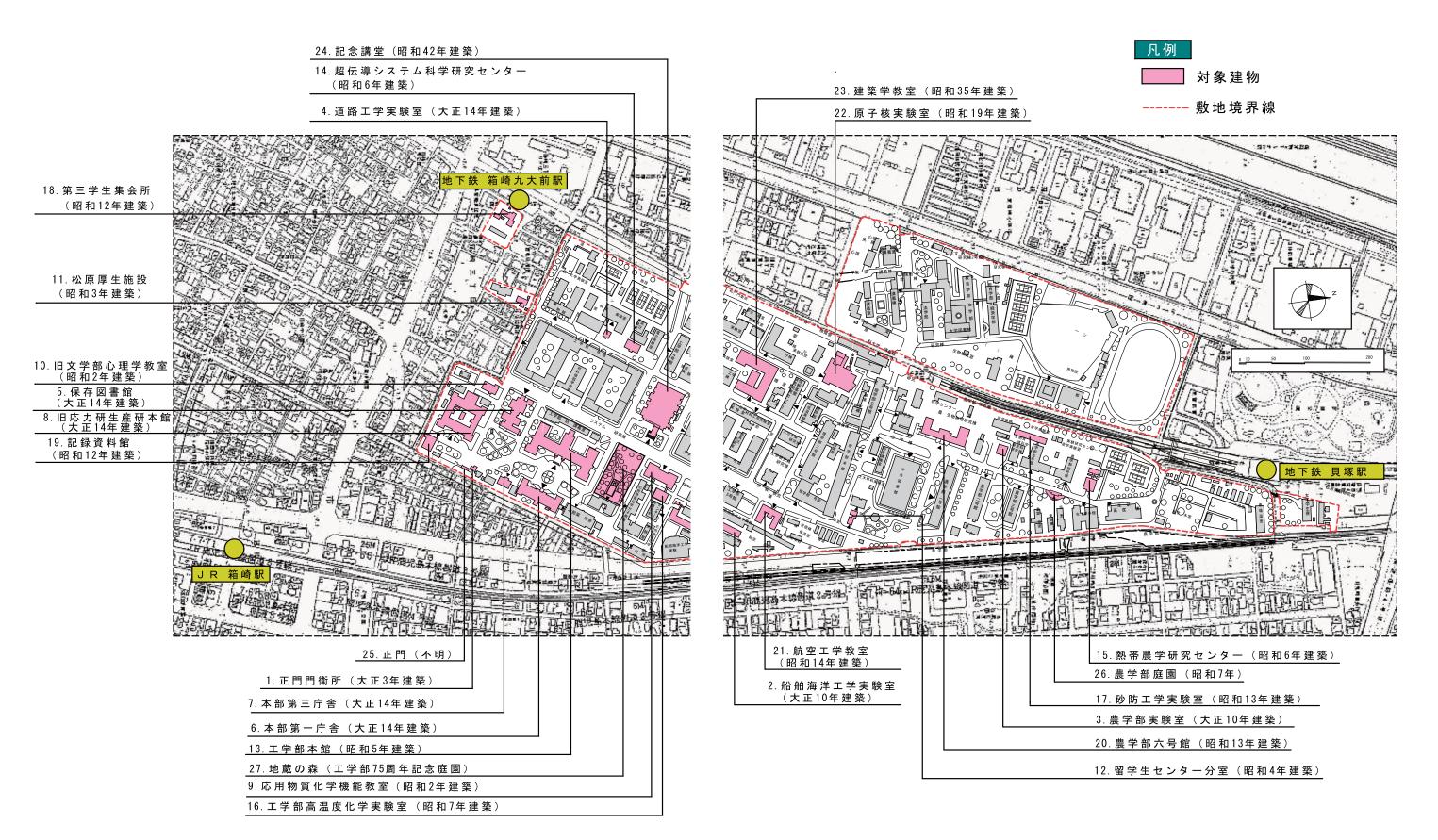


26.地蔵の森 (工学部創立75周年記念庭園)



27.農学部庭園

対象建物評価配置図



4. 歴史的背景

1911 (明治 44) 年に創設された九州帝国大学の工科大学として整備されたのが箱崎キャンパスである。大学設立の背景には日露戦争以降、産業的な重要性が高まってきたこと、及び義務教育の年限延長と併せて高等教育機関の増設が必要不可欠であったことなどがあげられる。

文部省が1907 (明治40) 年度予算に計上した工科大学の創立費用と古河家、福岡県及び福岡市による寄付によって、箱崎町字地蔵松原の現位置に建物群が建てられることとなり、これが現在の箱崎キャンパスの敷地に相当する。

今回取り上げる歴史的建造物には、工学部・農学部・旧法文学部・理学部の建物群が含まれる。工学部七番目の学科として設置された造船学科の実験室、1923 (大正12)年末の火災で全焼した工学部本館の煉瓦材などを一部使用していると言われる大学本部煉瓦建物二棟、新築された工学部本館及び応用化学教室、戦前最後期の竣工物件である航空学教室は比較的近接して建てられている。キャンパス内西側に建てられた旧河海工学実験室及び旧高周波電気及電子工学実験室も関東大震災以降に作られた鉄筋コンクリート造建物である。

大正時代に入り教育熱が高まるにつれて、旧制高等学校の増設が相次いだ。 それに伴って旧制高等学校の、とりわけ文科の卒業生が急速に増加してきた。 これに対応する形で政府は東北、九州の両帝国大学に新しい知識層の確立を目 指すべく「法文学部」を新設することとした。

このことを受けて、大学側としては急遽用地を確保するため、現在の正門から南側の敷地を買収し法文学部の用地に充て、法文学部本館が建てられ、附属図書館及び心理学教室が建設された。法文学部の新設に伴って門衛所を移築し、また学生食堂(現在の松浜厚生施設)が新築、学生集会所もキャンパス敷地外に「三畏閣」として建てられた。後に石炭研究資料センターとなる共同演習室も1937(昭和12)年に造られた。

キャンパス北側の農学部は我が国における暖地農業の研究等を目的として、1920 (大正 9)年に設立。当初期に造られた煉瓦造平屋建の実験棟や昭和に入り建設された鉄筋コンクリート造の農学部六号館、旧発電所(留学生センター分室)、農林生物物理研究棟等が現存するが、特に1931 (昭和 6)年に竣工した熱帯農学研究センターは洋風木造平屋建で演習林本部として造られた。

理学部は日中戦争時代の1939 (昭和14) 年に開設された。設立に際しては筑 豊の麻生家から創設資金が寄付されたが、開設後すぐに戦時体制が本格化して 耐久建築物が殆んど造られなかった。現在、理学部内に遺る戦前の建物は「原 子核の研究設備」として造られた実験室のみとなっている。 これら大学内の建造物群の設計に携わったのが、九州帝国大学(九州大学)の建築課である。文部省の大学営繕組織の成立は九州帝国大学の設立とほぼ前後しており、1920年代に入ると建物の更新時期とともに各大学で個性的な建築が造られるようになった。九州帝国大学では1925年になると当時の建築課長である建築家倉田謙の手によって正門周辺の大型建築物群を完成させ、キャンパスの景観を決定づけている。

戦前期から要望のあった建築学科の設置が1949(昭和24)年に行われた。ここで創初期の建築学科教授であった光吉健次は、建築学教室、創立五十周年記念講堂の設計に携わり、戦後のキャンパス形成に大きく貢献した。

このような歴史的背景を踏まえ、ワーキンググループは、現在キャンパス内に遺る建造物群を個別に採りあげ、多角的な価値評価を行った。



工科大学



注文学部



本部第一庁舎



正門



法文学部、図書館



航空学教室



工学部本館



工学部本館



地蔵の森

10



創立五十周年記念講堂

Ⅱ. 評価方法

- 1. 評価項目・基準・方法、参照情報
- (1) 評価項目の選定

評価の大きな枠組みとして歴史的視点・文化的視点を出発点とし、九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の客観的評価にふさわしい評価項目の絞り込みをワーキンググループで実施し、建築学的視点と再活用度評価の視点を評価項目に加え大項目を4項目とした。さらに、中項目を7項目設定した。

(2) 評価項目

| 大項目 | 中 項 目 |
|---------|---|
| 展 由 的 萩 | 大学の歴史的経過と結びついた価値評価 |
| 歴史的評価 | 社会、時代の歴史的経過と結びついた価値評価、産業遺産など |
| 建築学的評価 | 建築の意匠史的側面からの価値評価。様式、近代建築、モダニズム建築、インテリアデザイン、営繕の制度的評価など |
| | 建築の技術史的側面からの評価、構法、素材、建築設備、 環境配慮など |
| 文化的評価 | 社会全般に対する文化的資産、芸術性、社会性、シンボル性 |
| | 地域の文化資産、地域景観資産としての評価、地域への貢献 |
| 再活用度評価 | 街づくりとしてのランドマークなどの利用価値評価、敷地、 建物としての再利用のしやすさ |

※安全度評価については、重要な評価項目であり、本来は評価の対象とすべきであるが、コンクリートコアを用いた強度試験調査の結果のみで建物老朽度の評価は出来ないこと、評価する全ての建物の耐震診断のデータがないこと、老朽度・耐震性・耐火性を同じ評価項目で評価すること

は、現状の情報だけで判断することは適当でないことから、今回の評価 には、建物の安全に関する評価を実施しないこととした。 ※1

(3) 参照情報を活用するにあたってのガイドライン

各委員は、大学文書館所蔵の資料群、各委員の専門分野の文献等を活用するにあたり、参照情報を活用するにあたってのガイドラインに基づき客観的に評価する。

①歷史的視点

- ・箱崎キャンパスの歴史的背景と重なる建築物 ※2
- ・企業等の寄付により建設された建築物
- ・全国に類似例が少ない建築物
- ・特別な由来及び由緒がある建築物
- その他歴史的に重要な建築物

②建築学的視点

- ・ 建築意匠史的に優れている建築物
- デザインの優位性がある建築物
- ・大学の学問分野、社会的評価も考慮した建築物
- ・現在では珍しい技術や技能、材料が使用されている建築物
- ・その他建築学的に重要な建築物

③文化的視点

- ・ 重要文化財、登録有形文化財に匹敵する建築物
- ・福岡市都市景観賞などを受賞した建築物 ※3
- ・近代化産業遺産群の認定(経済産業省認定)を受けた建築物 ※4
- ・学内外の広報誌、映画撮影に活用した建築物。
- ・周辺地域(都市)と大学が連携して活用している建築物
- ・その他文化的に重要な建築物

④再活用度の視点

- ・大学等のシンボル、ランドマークとなる建築物
- ・周辺地域(都市)の資源として、再活用できる建築物 ※5
- ・その他再活用がしやすい建築物

(4) 評価基準・評価方法

- ①各委員は、大学文書館所蔵の資料群、各委員の専門分野の文献等を活用するにあたり、参照情報を活用するにあたってのガイドラインに基づいた視点に基づき客観的に評価する。
- ②評価は、S、A、B、Cの基準で中項目7項目毎に各委員が評価を実施する。

12

- ③評価の基準は、次のとおりとする。
 - ・S評価は、特に評価が高いもの
 - ・A評価は、評価が高いもの
 - ・B評価は、評価に値するもの
 - ・C評価は、評価が高くないもの
- ④各委員の評価は、評価の後に $S=3 \cdot A=2 \cdot B=1 \cdot C=0$ に置き換えて、中項目ごとの平均点を算出する。
- ⑤各委員で評価ができない場合は空白、推定で評価する場合は()書きで評点をつける。
- ⑥項目の平均点を合計のうえ、建物ごとに評価の際に21点満点を100 点に換算し、順位付けする。
- (7)建築物等の再活用に必要な情報を一覧表に記載する。

○ 資料編を参照

- ※1 九州大学(箱崎)近代建築物コンクリート強度試験調査業務報告書(抜粋)
- ※2 九州大学箱崎キャンパスの建物群と同時代の主要建築物との比較
- ※3 福岡市都市景観賞
- ※4 『「近代化産業遺産群 続33」の選定(平成21年2月6日:経済産業省)』
- ※5 建物活用事例のパターンについて

○基礎資料

「工学部造船学教室設計図」綴、1921年

「九州帝国大学農学部汽罐室新築設計図」綴、1921年

「農学部附属農場畜舎新築設計図」綴、1923年

「農学部附属農場豚舎山羊舎新築設計図」綴、1923年

「工学部仮実験室研究室及仝第一附属家新築設計図」綴、1924年

「工学部河海工学実験室新築設計図」綴、1924年

「法文学部本館新築設計図」綴、1925年

「法文学部図書館及書庫新築設計図」綴、1925年

「工学部応用化学教室新築設計図」綴、1926年

「医学部附属医院第一外科教室病室新築設計図」綴、1926年

「法文学部心理学教室新築設計図」綴、1926年

「農学部農芸化学実験室外二廉新築設計図」綴、1926年

「医学部附属病院第一第二第三教室及病室新築工事設計図」綴、1927年

「工学部本館新築設計図」綴、1928年

「農学部発電所新築設計図」綴、1929年

「工学部高周波電気及電子工学実験室新築設計図」綴、1930年

「農学部附属演習林本部事務室新築設計図」綴、1930年

「医学部附属病院温泉治療学研究所設計図」綴、1931年

「医学部附属医院整形外科歯科口腔外科教室病室新築第一期工事設計図」綴、1932年

「医学部法医衛生細菌学教室新築工事設計図」綴、1933年

「工学部航空学教室新築設計図」綴、1938年

「農学部農芸化学教室新築設計図」綴、1938年

「理学部実験室設計図」綴、1940年

「九大風雪記」西日本新聞社 1948 復刊 (九州大学大学史料室編) 2003

「工学部建築学教室新営工事設計図」綴、1958年

「九州大学 50 周年記念講堂設計図」、1967 年

「九州の近代-建築家不在の土壌-」『建築雑誌』1981年8月号、日本建築学会

『日本の大学キャンパス成立史』九州大学出版会 1989

『九州大学理学部 創立五十周年記念誌 平成元年四月』理学部創立 50 周年記念事業実行委員会編 1989

『或る明治外科医のメモランダムー九大医学部揺籃期一』、1998年、日本文教出版

「九州大学の現状」『第18回タンデム加速器及びその周辺技術の研究会報告集』 2005

14

『九州帝国大学職員録』

『九州大学職員録』

『文部省職員録』

『九州帝国大学一覧』

○客観的評価に活用した資料

日本建築学会編集『日本の建築 第9巻 九州・沖縄』株式会社新建築社 1988 九州大学75年史編集委員会『九州大学七十五年史』九州大学出版会 1992 福岡県教育委員会『福岡県の近代化遺産』西日本文化協会 1993

『「平成 17 年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現況調査」成果報告書』建築史塾

Archist·九州大学文書館編 九州大学 2007

社団法人日本建築学会『建造物の評価と保存活用ガイドライン』2007

九州産業考古学会編『福岡の近代化遺産』弦書房 2008

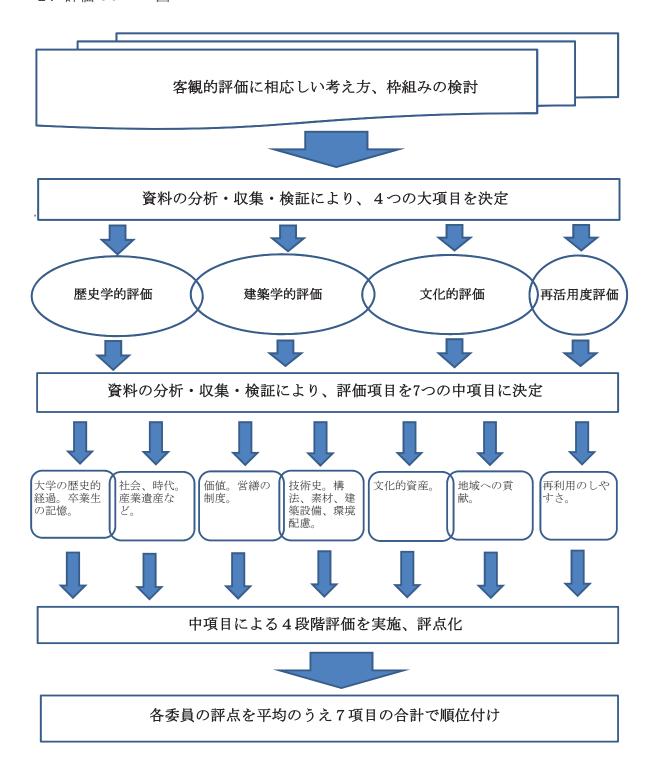
九州大学『九州大学百年史写真集』2011

国立大学法人北海道大学『歴史的建造物を有効に活用するための評価手法』2012

15

※基礎資料、客観的に活用した資料については、大学文書館所蔵

2. 評価のフロー図





Ⅲ. 評価の結果

1. 箱崎キャンパス近代建築物評点の順位

| | | | 規模(階数・地下、 | | | T | 歴史的 | 內評価 | 建築学的評価 | | |
|----|---------------------------------|-------------------------------------|---------------|------------------|------------|-----------|-----------------------------|------------|------------------------------|---------------------|--|
| 順位 | 棟名称 (建設当初の名称) | 構造 | 面積r 階数 | 面積 | 評点 (※2) | 評点の 合計 | 大学の歴史的経 過と結びついた 価値評価。 | 価。産業遺産な | 代建築、モダニ ズム建築、イン テリアデザイ | 建築の技術史的側面からの評価。構法、素 | |
| 1 | 工学部本館 | 鉄筋コンク リート造、一 部鉄骨鉄筋コ | 地下 5 B1 | (m²) | 94 | 19. 81 | 2. 83 | 2. 83 | ン、営繕の制度 的評価など。 2.83 | 環境配慮など。 2.83 | |
| | 本部第一庁舎 | かが自然肪コンクリート造 | | | | | | | | | |
| 2 | (仮実験室研究室) | 煉瓦造 | 2 | 2, 881 | 92 | 19. 47 | 2.83 | 2.66 | 2.83 | 2, 66 | |
| 3 | 正門門衛所 | 煉瓦造 | 1 | 34 | 84 | 17.82 | 2.83 | 2. 50 | 2.50 | 2.33 | |
| 4 | 保存図書館(法文学部図書館 及び書庫) | 鉄筋コンク リート造 | 4 | 3, 068 | 83 | 17. 48 | 2. 66 | 2. 50 | 2. 66 | 2. 33 | |
| 5 | 本部第三庁舎 | 煉瓦造 | 2 | 788 | 81 | 17. 15 | 2.66 | 2. 50 | 2.50 | 2.50 | |
| 6 | 旧応力研生産研本館 (法文学部本館) | 鉄筋コンク リート造、一 部鉄骨鉄筋コ ンクリート造 | 4 | 9, 570 | 80 | 16. 81 | 2.66 | 2. 50 | 2.83 | 2. 16 | |
| 7 | 応用物質化学機能教室 (応用化学教室) | 鉄筋コンク リート造 | 4 | 2, 782 | 77 | 16. 31 | 2. 50 | 2.83 | 2.66 | 2. 50 | |
| 8 | 旧文学部心理学教室 | 鉄筋コンク リート造 | 2 | 628 | 72 | 15. 32 | 2.50 | 2. 50 | 2. 33 | 2. 16 | |
| 9 | 船舶海洋工学実験室 (造船学実験室) | 煉瓦造 | 1 | 662 | 69 | 14. 65 | 2.50 | 2. 33 | 2. 33 | 2.50 | |
| 9 | 創立五十周年記念講堂 | 鉄筋コンク リート造 | 4 B1 | 6, 157 | 69 | 14. 65 | 2.50 | 2.00 | 2. 16 | 2.33 | |
| 11 | 熱帯農学研究センター (演習林本部) | 木造 | 1 | 452 | 68 | 14. 48 | 2. 16 | 2. 16 | 2.33 | 2.00 | |
| 12 | 航空工学教室 (航空学教室) | 鉄筋コンク リート造 | 6 | 1, 845 | 67 | 14. 14 | 2. 16 | 2. 33 | 2. 33 | 2. 16 | |
| 13 | 第三学生集会所(三畏閣) | 木造 | 2 | 453 | 64 | 13. 49 | 2.50 | 2.00 | 1.66 | 1.83 | |
| 14 | 松浜厚生施設(学生食堂) | 木造 | 2 | 397 | 62 | 13. 14 | 2. 16 | 1.66 | 2.00 | 1.83 | |
| 15 | 原子核実験室(理学部実験室) | 鉄筋コンク リート造 | 3 | 2, 157 | 61 | 12. 98 | 2.00 | 2.50 | 1.66 | 1.83 | |
| 16 | 道路工学実験室 (河海工学実験室) | 鉄筋コンク リート造 | 2 | 205 | 59 | 12. 49 | 1.50 | 2.00 | 2. 33 | 1.83 | |
| 17 | 超伝導システム科学研究センター(高周波電気及び電子工学実験室) | 鉄筋コンク リート造 | 2 | 578 | 58 | 12. 31 | 1.66 | 2. 16 | 2.00 | 1.66 | |
| 18 | 建築学教室 | 鉄筋コンク リート造 | 3 | 2, 858 | 55 | 11.60 | 1. 60 | 1.60 | 2.40 | 1.80 | |
| 19 | 農学部6号館 | 鉄筋コンク | 3 | 2, 078 3, 375 | 46 | 9.82 | 1.83 | 1.33 | 1.50 | 1.50 | |
| 20 | (農芸化学教室) 砂防工学実験室 | 木造 | B1 1 | 499 | 46 | 9.80 | 1.60 | 1. 20 | 1. 40 | 1.60 | |
| 21 | 記録資料館(法文学部演習室) | 鉄筋コンク リート造 | 2 | 649 | 44 | 9. 31 | 1.50 | 1.16 | 1.50 | 1. 33 | |
| 22 | 留学生センター分室 (発電所) | 鉄筋コンクリート造 | 2 | 269 | 41 | 8. 81 | 1. 33 | 1. 16 | 1. 16 | 1. 50 | |
| 23 | 農学部実験室(汽罐室) | 煉瓦造 | 1 | 202 | 38 | 8. 03 | 1.80 | 1.40 | 1.00 | 1.00 | |
| 24 | 工学部高温度化学実験室 | 鉄筋コンク リート造 | 1 | 278 | 34 | 7. 20 | 1.00 | 1.00 | 1.00 | 1.20 | |
| | 正門 | - | | | 80 | 16. 97 | 2. 66 | 2. 50 | 2. 33 | 2. 00 | |
| | 地蔵の森(工学部創立75周 年記念庭園) | - | | | 63 | 13. 31 | 2. 33 | 2.00 | 1.66 | 1.66 | |
| | 農学部庭園 | | | | 47 | 9. 97 | 1.66 | 1.33 | 1.33 | 1.33 | |

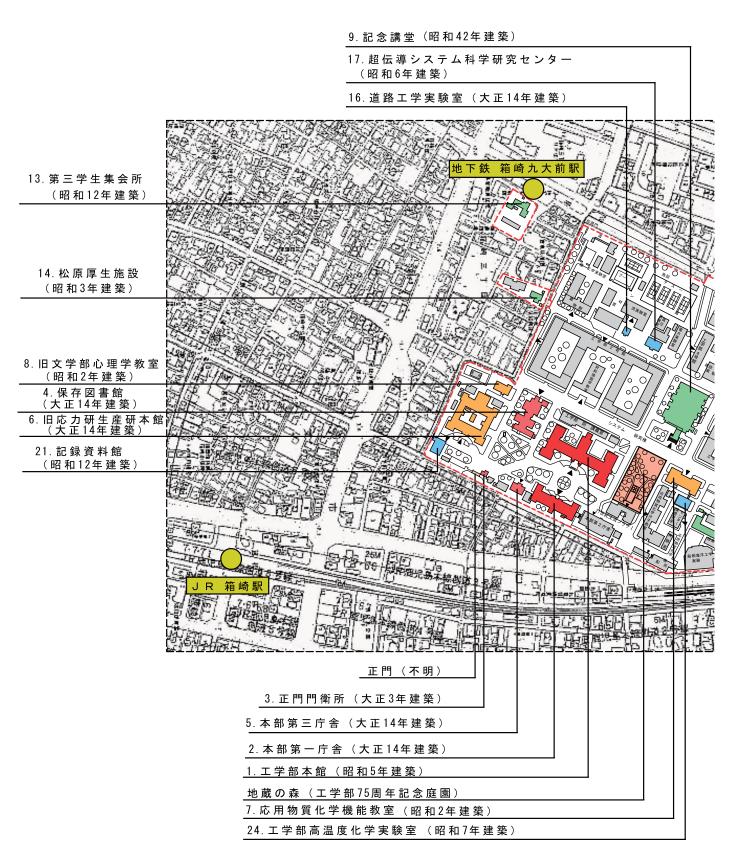
※1. 各項目の評点は、各委員が評価した S = 3、A = 2、B = 1、C = 0 とし、その平均点を評点とした。 ※2. 評点は、7項目の評点の合計に100/21を乗じた数値とした。

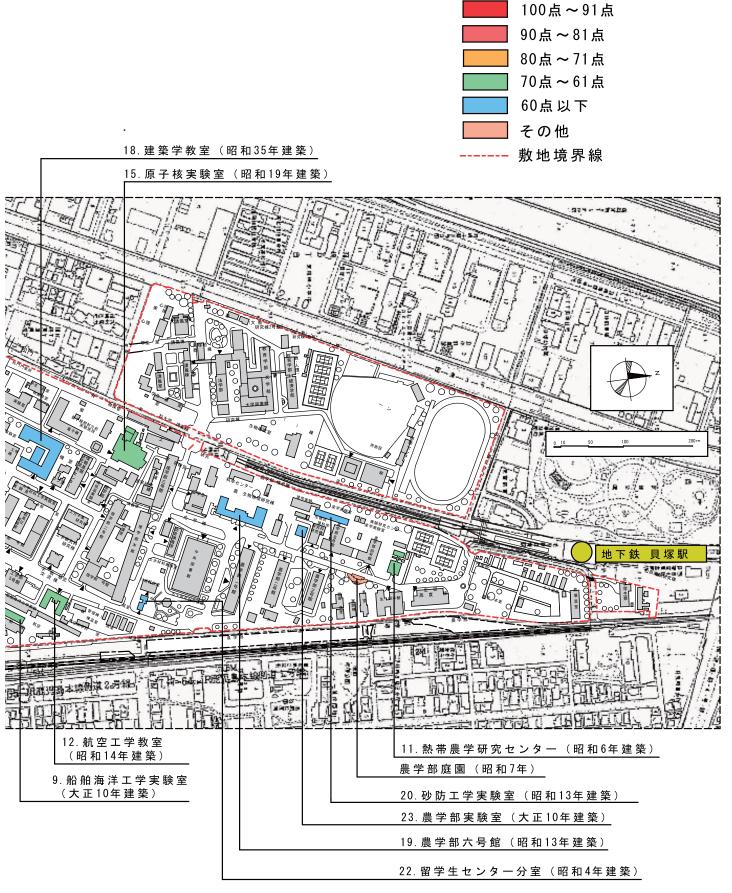
18

| | | | | _ | | |
|---------|--|----------------------|------------------------|--|-------|--|
| 社会全般に対す | 的評価 地域の文化資産、としての評価。 地域へのの貢献。地域へのの貢献。 | 敷地、建物として の再利用のしやす | 耐震性能 (Is,調查年 度) | コンクリー ト中性化深 さの平均 (mm) 資料参照 | | 再活用に関する構造的留意点 |
| 2. 83 | 2. 83 | 2.83 | 0.51, H19 | 35. 4 | 21. 3 | 鉄筋コンクリート造であるが、耐震性が不足し、構造体が劣化している ため、耐震補強改修が必要である。 |
| 2. 83 | 2. 83 | 2. 83 | _ | | | 煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。 |
| 2.66 | 2. 50 | 2. 50 | _ | | | 煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。 |
| 2.50 | 2. 33 | 2. 50 | 0.30, H19 | 72. 9 | 11. 1 | 鉄筋コンクリート造であるが、耐震性が不足し、構造体が著しく劣化し ているため、耐震補強改修が必要である。 |
| 2. 50 | 2. 33 | 2. 16 | _ | | | 煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。 |
| 2. 33 | 2. 50 | 1.83 | - | 25. 3 | 9. 5 | 鉄筋コンクリート構造物としては、老朽化が著しため、寿命に達している。 |
| 2. 33 | 1.83 | 1.66 | - | 73. 6 | 12. 4 | 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が著しく劣化しているため、耐震 補強改修が必要である。 |
| 2.00 | 1.83 | 2.00 | 0.8, H18 | 56. 3 | 24. 4 | 構造体の劣化が見られる。 |
| 1.83 | 1.66 | 1. 50 | - | | | 煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。 |
| 2. 16 | 2. 00 | 1. 50 | 0.5, H19 | 11.4 | 26. 8 | 鉄筋コンクリート造であるが、耐震性が不足しているため、耐震補強改 修が必要である。 |
| 2.00 | 1.83 | 2.00 | - | | | 耐震性、耐久性は不明であるが、外観からは、劣化は見られない。木造であるため、耐火性能はない。 |
| 2.00 | 1.83 | 1. 33 | - | 20. 1 | 21.9 | 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が劣化しているため、詳細な調査 が必要である。 |
| 1.50 | 2.00 | 2.00 | - | | | 耐震性、耐久性は不明であるが、外観からは、劣化は見られない。木造 であるため、耐火性能はない。 |
| 1.83 | 1.66 | 2.00 | = | | | 耐震性、耐久性は不明であるが、外観からは、劣化が進んでいるようで ある。木造であるため、耐火性能はない。 |
| 2. 33 | 1.66 | 1.00 | 0.41一次, H18 | 5. 4 | 31.0 | 鉄筋コンクリート造であるが、耐震性が不足し、構造体が劣化している。 特殊な施設であるため、再活用は困難である。 |
| 1. 50 | 1.50 | 1.83 | - | 86. 6 | 21.3 | 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が著しく劣化しているため、詳細 な調査が必要である。 |
| 1. 50 | 1. 50 | 1.83 | _ | 75. 1 | 14. 5 | 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が著しく劣化しているため、詳細 な調査が必要である。 |
| 1.60 | 1. 20 | 1.40 | 0.45, H19 0.79, H19 | 0.7 | 28. 1 | 鉄筋コンクリート造であるが、大半は耐震性が不足しているため、詳細 な調査が必要である。 |
| 1. 33 | 1.00 | 1. 33 | 0.69, H19 | 6.0 | 26. 2 | 耐震性能はほぼ満足の値であり、コンクリート劣化も少ない。 |
| 1. 40 | 1. 20 | 1.40 | = | | | 耐震性、耐久性は不明であるが、外観からは、劣化は見られない。内部 に大きな柱がないことから、耐震性は注意が必要である。木造であるた め、耐火性能はない。 |
| 1. 16 | 1. 16 | 1.50 | = | 21.8 | 23. 2 | 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が劣化しているため、詳細な調査 が必要である。 |
| 1. 16 | 1.00 | 1.50 | - | 13. 7 | 19.8 | 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が劣化しているため、詳細な調査 が必要である。 |
| 1. 20 | 0.80 | 0.83 | _ | | | 煉瓦造であり、耐震性が危惧される。外壁をモルタルで補修した理由は 不明であり、詳細な調査が必要である。 |
| 1. 00 | 1.00 | 1.00 | _ | 48.0 | 25. 9 | 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が著しく劣化しているため、詳細 な調査が必要である。 |
| 2. 16 | 2. 66 | 2.66 | | | | 煉瓦造であるため、大規模な地震に備えた補強は必要。 適正に管理されている樹木については、 |
| 1.66 | 2.00 | 2.00 | | | | る情報によっては、 緑地計画等を検討の うえで、保存または |
| 1. 33 | 1. 33 | 1.66 | | | | 移植の判断が必要。 |

※安全度評価については、評価する全ての建物の耐震診断のデータがないこと、老朽度・耐震性・耐火性を同じ評価項目で評価することは、現状の情報だけで判断することは適当でないことから、今回の評価には、建物の安全に関する評価を実施しないこととした。また、コンクリート強度試験調査については、箱崎キャンパスの近代建築物の評価シートの11~15及び資料編を参照していただきたい。

2. 対象建物評価結果配置図





3. まとめ

(1) 評価のまとめ

九州大学箱崎キャンパス跡地の計画的まちづくりと円滑な跡地処分に向けて、多様な学術的観点から客観的評価を実施するため、学内外の専門家により構成された九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループで近代建築物の現地調査を行い、参考文献の検証、建設当時の図面及び九州内の近代建築物の活用事例などの調査を重ね、分析・検証を実施し、評価作業を行った。

その結果、九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築群は、百年の歴史と文化が詰まった社会的、都市的資源であること、多くの建築物が有形文化財としての価値を有することを確認した。

箱崎キャンパスの南東部に位置する旧応力研生産研本館(旧法文学部本館)から応用物質科学機能教室(応用化学教室)にいたる地区は、まさに九州帝国大学として歴史と文化の揺籃と成長の場所であり、そこに評価の高い建築物の大部分が集積しており、国内でも稀な貴重な地区であると評価できる。

この地区の中でも特に評価の高い建築物が工学部本館、本部第一庁舎、 正門門衛所、保存図書館および本部第三庁舎であり、単体としてはもとよ り、群としても高く評価でき、保存再活用が望まれる。

(2)課題

箱崎キャンパスの近代建築物を仮に再活用する場合は、建築基準法に照らした用途変更等の法的手続きが必要となる。

また、安全性確保のため、老朽化防止、地震及び台風などの外力による 損傷・倒壊を防止する工事や法的に改修工事が必要な場合があり、再活用 するには、相当額の費用が必要となることも想定される。

(3) 提言

九州大学はまちづくりを行う事業者に対して、近代建築物の保存再活用を含む九州大学百年の歴史や文化を継承していける方法などを検討させていただきたい。

そのために、近代建築物を再活用した魅力的なまちづくりを提案できる 専門家、建築技術者、行政機関などと連携のうえ、近代建築物の安全性の 確認、公的な用途および文化財としての保護などを提案していただき、箱 崎キャンパス跡地のイメージ及びブランド力を向上させていただきたい。 さらに、評価の高い近代建築物に安全性等の問題が生じ、全面的保存が 困難な場合には、外観等を含むエレメント保存の検討及び除却する建築物 については土地の記憶を含めた記録保存の検討が必要である。

この度の評価に際して、九州大学には近代建築物の図面を含む学術的な文献等の記録が多数保存されていることが判明したことから、今後とも記録が散逸しないよう適切な保存と管理をお願いしたい。

今後、箱崎キャンパスの近代建築物の価値の理解と継承および再活用に あたり、この報告書を活用いただければ幸いである。

4. 箱崎キャンパス近代建築物の評価シート

棟名称(建設当初の名称): 工学部本館

| 1. | 建設年 | 1930年、昭和5年 | | | | |
|-----|------------------------------------|-----------------------------|--|--|--|--|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙、小原節三(設計技師) | | | | |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | | | | | |
| 4. | 規模 | | | | | |
| | · 階数 | 地上5階、地下1階 | | | | |
| | ・面積 | 10,324m² | | | | |
| | ・正面×側面 | 107m×60m | | | | |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 | | | | |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート造、一部鉄 骨鉄筋コンクリート造 | | | | |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 昭和63年 | | | | |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | 昭和63年 | | | | |
| 9. | 利用状況 | 学内の各学部の教育・研究施 設として使用中 | | | | |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面64枚以上有。 | | | | |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 82年 | | | | |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | 0.51,H19調査 | | | | |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | 0.8 , H19調査 | | | | |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 35.4 (資料編参照) | | | | |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 21.3 (資料編参照) | | | | |
| 16. | 16. 受賞歴、または、文献(出版社) への記載等 | | | | | |

- - ·福岡市都市景観賞受賞
 - ・近代化産業遺産群 続33の選定(経済産業省)
 - ・総覧 日本の建築第9巻/九州沖縄 (新建築社会)、福岡 の近代化遺産(弦書房)、福岡県の近代化遺産(財・西 日本文化協会)
 - ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

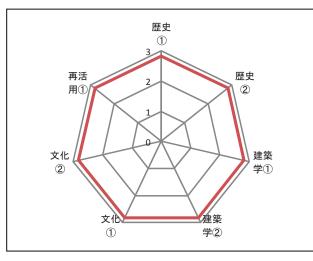
| 評価項目 | | | | | |
|--------|---|-------|--|--|--|
| 歴史的 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | 2.83 | | | |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | 2.83 | | | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | 2.83 | | | |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | 2.83 | | | |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | 2.83 | | | |
| 部無価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | 2.83 | | | |
| 再活用度評価 | 活用 (1)街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | | | |
| | 評点の計 | 19.81 | | | |

コメント

本部棟と並ぶ九州大学の代表的建築物。受験雑誌の表紙等に紹介されるなど、工学部設立のシンボルであり かつ工学部卒業生の記憶のシンボルでもある。一部大講義室に鉄骨が使用された初期鉄骨鉄筋コンクリート造 大規模建築物。また多くの学者を育てた歴史的意義の大きい威風堂々とした名建築である。四階会議室は昭和 天皇来学の玉座として設営され、壁面の絵画もさることながら、歴史的な価値も大きい。

シンボリックな意匠でタイルの割付け、タイルの形にも配慮し、技術の高さを示している。スクラッチタイ ルやライオンの雨樋フード、玄関ポーチの持ち送りに施されたコンドルやステンドグラスなど、詳細部の各所 に見どころが多い。本部と軸線を通し、キャンパス内において見事な配置がなされており、学内の景観を作り 上げるのに重要な役割を果している。

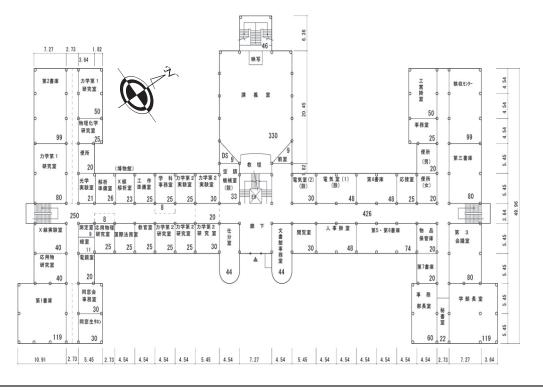
正門すぐの立地で、地域的にも貴重な歴史遺産。外観、内装、立地などの面からも利用価値が高い。単体と しても重要な物件であることは間違いないが、正門の近くで、第一庁舎、法文学部本館など他の建造物群と組み合わせることで戦前の大学キャンパス景観という他の地域には喪われた極めて重要な価値を有している。 鉄筋コンクリート造であるが、耐震性が不足し、構造体が劣化しているため、耐震補強改修が必要である。











棟名称(建設当初の名称):本部第一庁舎(仮実験室研究室)

| | | T |
|-----|------------------------------------|----------------------------|
| 1. | 建設年 | 1925年、大正14年 |
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 佐伯工務所 (現佐伯建設) |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上2階 |
| | ・面積 | 2,881 m² |
| | ・正面×側面 | 70m×30m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北西 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 煉瓦 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 昭和38年、昭和49年、 昭和57年、平成5年 |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | 平成15年 |
| 9. | 利用状況 | 本部の庁舎として使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 図面17枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 87年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 福岡市都市景観賞受賞 | 反社) への記載等 |

- 福岡市都市京観員受員 ・総覧 日本の建築第9巻/九州沖縄(新建築社)、福岡の 近代化遺産(弦書房)、福岡県の近代化遺産(財・西日 本文化協会)
- ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| | 評価項 | 目 | 評点 | | |
|---|---|--|-------|--|--|
| 歴史始 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | | | | |
| 的評価 | | 歴史的経過と結び fi。産業遺産など。 | 2.66 | | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的 評価。様式、対 ズム建築、イン 営繕の制度的評 | 2.83 | | | |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | 2.66 | | |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 た、シンボル性。 | 2.83 | | |
| 2評価 | ②地域の文化資産 としての評価。 | ど、地域景観資産地域への貢献。 | 2.83 | | |
| 再活用度 ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | | | | |
| | | 評点の計 | 19.47 | | |

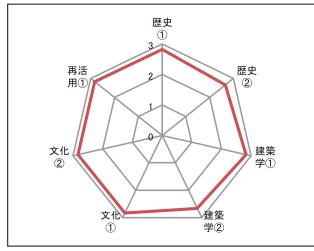
コメント

九州帝国大学工科大学設立の箱崎キャンパスの歴史を担い、煉瓦造の様式性、装飾性をよくとどめている建築。 1923 (大正12) 年12月に焼失した旧工科大学本館の煉瓦、礎石等を再利用して、旧観を復すように再建された。 装飾が施された意匠の倉田作品であり、工学部旧本館と並んで九大を代表する建物である。歴史的経過を銘板 などで記載しているところも分かり易い評価部分と言える。

プロポーションが美しい。一階と二階の窓の形態を異にして変化がある。玄関上部の半円アーチの意匠が印 象的である。所々に過剰・時代錯誤的と思える石造の意匠が見られるが、これは部材の転用によるものだろうか。 仮実験室・研究室として建てられたといえども、石材使用の技術はすばらしい。大正末期の施設と言うことを 考えると煉瓦造り最後期の物件として重要。増築・改修が多く行なわれている。正門の横で、第一庁舎、工学 部本館などと歴史的建築群を構成している。関東大震災直前の煉瓦造建築物で、床・梁に鉄筋コンクリートを 使用している。

工学部本館との位置関係からシンボルとしての要素も確立されているものと思われる。箱崎キャンパスのシ ンボル的存在であり、大学の歴史上貴重な遺産。街づくりとしてのランドマークとなりうる。正門横の立地で、 地域的にも貴重な歴史遺産。2階建てであり、補修継続利用は容易と察せられる。歴史的空間の維持の観点から 文化財としての保護も考えられる。

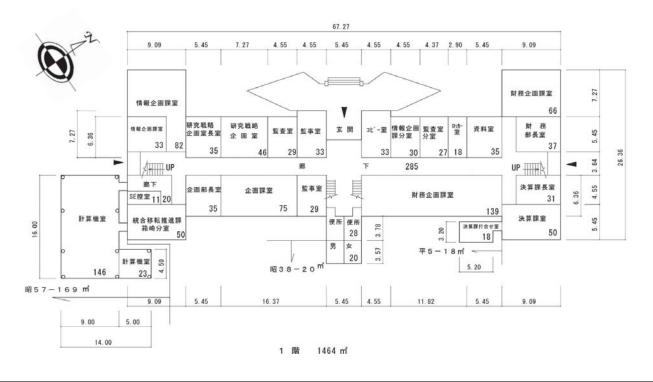
煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。











本部第一庁舎(仮実験室研究室)

棟名称(建設当初の名称): 正門門衛所

| 1. | 建設年 | 1914年、大正3年 |
|-----|------------------------------------|-------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙の可能性が高い。 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 鴻池組 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上1階 |
| | ・面積 | 34 m² |
| | ・正面×側面 | 6m×6m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南西 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 煉瓦 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 箱崎地区の警備員の待機場所 として使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 図面1枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 98年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | ・福岡の近代化遺産 (弦書房 | |

| 評価項目 | | | | | |
|--------|---|-------|--|--|--|
| 歴史 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | 2.83 | | | |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | | | | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | 2.50 | | | |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | 2.33 | | | |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | 2.66 | | | |
| 的評価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | 2.50 | | | |
| 再活用度評価 | ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | | | |
| | 評点の計 | 17.82 | | | |

コメント

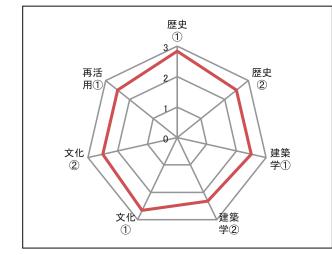
九州大学における初期の煉瓦造建築。キャンパスに現存する建築物では最古であり、正門脇という立地場所からも、小規模ながら長年にわたり地域のシンボルとして記憶に留まる建築物。地域住民にとって、正門とともに日常性のある地域景観資産である。正門とセットでとらえるべきであり、ランドマークとしての活用価値がある。正門とともに卒業生の記憶に残っている建物。小さな建築であるがデザインの質は高い。欠円アーチの連続した意匠はアールヌーボーの名残を留めているか。石材を要所に用い、明治期の形態をとどめた装飾も優れている。

元々あった位置から大正13年段階で一度曳家を行っている所も面白い。大正後期の法文学部の創設工事に伴い、正門に向かって右側に移築された。この移築に伴い、意匠的には現在の建物裏側にあたる部分の方が装飾性は高い。門衛所として大学の、額、の一つである。

正門の横で、第一庁舎、工学部本館などと歴史的建築群を構成している。小規模で改修維持利用が容易であり、 移築も可能ではないか。平屋の小規模建築物であり、曳家保存も考えられる。

28

煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。

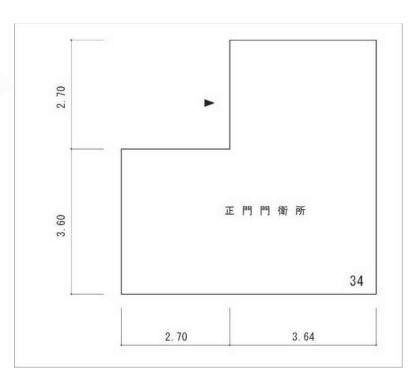












棟名称(建設当初の名称):保存図書館(法文学部図書館及び書庫)

| 1. | 建設年 | 1925年、大正14年 | | |
|---------------------------|------------------------------------|-----------------------|--|--|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙 | | |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 佐伯工務所 (現佐伯建設) | | |
| 4. | 規模 | | | |
| | ・階数 | 地上4階 | | |
| | ・面積 | 3,068m² | | |
| [| ・正面×側面 | 38m×56m | | |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北西 | | |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート | | |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 大正15年 | | |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | 昭和62年 | | |
| 9. | 利用状況 | 学生食堂・事務局庁舎等とし て使用中 | | |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面21枚有。 | | |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 87年 | | |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | 0.30 , H19調査 | | |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | 0.999, H19調査 | | |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 72.9 (資料編参照) | | |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 11.1 (資料編参照) | | |
| 16. 受賞歴、または、文献(出版社) への記載等 | | | | |

- ・総覧 日本の建築第9巻/九州沖縄(新建築社)、福岡の近代化遺産(弦書房)、福岡県の近代化遺産(財・西日本文化協会)
- ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

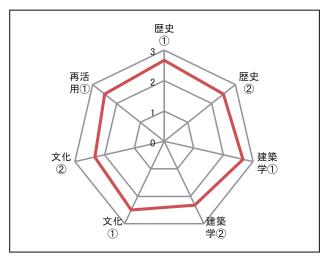
| 評価項目 | | | 評点 |
|--------|--|---------------------|-------|
| 歴史: | ①大学の歴史的経 価値評価。卒業4 | | 2.66 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴 ついた価値評価。 | | 2.50 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的 評価。様式、近 ズム建築、インラ 営繕の制度的評 | 代建築、モダニ テリアデザイン、 | 2.66 |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | 2.33 |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | | 2.50 |
| 8評価 | ②地域の文化資産としての評価。 | | 2.33 |
| 再活用度評価 | 活用度 ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 2.50 |
| | | 評点の計 | 17.48 |

コメント

大正末期創設の法文学部本館と対を成す建物。昭和47年までは中央図書館として使用され、以後は保存図書館、工学部食堂、附属図書館付設記録資料館文化史資料部門書庫に利用されており、特に文科系の卒業生にとって懐かしい建物である。関東大震災後の初期鉄筋コンクリート造建築で、箱崎キャンパスでも歴史的建築が集積する西南部にあり、九州最初の大学図書館として旧帝国大学の教養を担っていたことは重要と思われる。

半円ヴォールトを特色とする斬新なデザインで正面を特に強調しており、倉田謙設計の個性的な優れた建築。 渦巻き文様を多用した倉田謙のデザインモチーフ確立期の作品。大ぶりなアーチが印象的であり、九大を代表 する建物のひとつ。玄関ホールのアーチ構造は大胆であり、時代を代表するシンボル性を持ち、外部は建設当 時の姿がよく残っている。

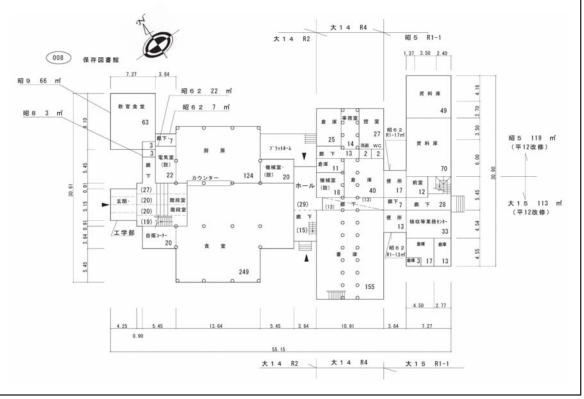
窓を多く設け、各部屋のスペースが大きく多面的な再利用ができる。他の大正〜昭和初期の建造物群と併せて戦前の大学キャンパス景観という他の地域にはない極めて重要な価値を有しており、工学部本館などと併せて最も高く評価できる。立地が周辺市街地に近く、地域景観資産として一定の価値を保持してきたと察せられる。 鉄筋コンクリート造であるが、耐震性が不足し、構造体が著しく劣化しているため、耐震補強改修が必要である。











保存図書館(法文学部図書館及び書庫)

棟名称(建設当初の名称):本部第三庁舎

| 1. 建設年 | 1925年、大正14年 |
|---------------------------------------|----------------|
| 2. 設計者または組織 | 倉田謙、小原節三(設計技師) |
| 3. 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 佐伯工務所 (現佐伯建設) |
| 4. 規模 | |
| ・階数 | 地上2階 |
| ・面積 | 788m² |
| ・正面×側面 | 20m×14m |
| 5. 方位(正面玄関の向き) | 北西 |
| 6. 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 煉瓦 |
| 7. 増築時期(記録に基づく) | 昭和48年 |
| 8. 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. 利用状況 | 本部の庁舎として使用中 |
| 10. 資料 (図面等) | 図面3枚有。 |
| 11. 経年(平成24年4月1日時点) | 87年 |
| 12. 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. 受賞歴、または、文献(出) | 版社)への記載等 |

- - ・福岡の近代化遺産(弦書房)、福岡県の近代化遺産(財・ 西日本文化協会)
 - ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| | 評価項目 | | |
|--------|---|---------------------|-------|
| 歴史的 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | | 2.66 |
| | ②社会、時代の歴史的経過と結びついた価値評価。産業遺産など。 | | 2.50 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 2.50 |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | 2.50 |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | | 2.50 |
| | | 差、地域景観資産 地域への貢献。 | 2.33 |
| 再活用度評価 | 活 用 度 などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | 2.16 |
| | | 評点の計 | 17.15 |

コメント

大正末期に建設された建築物で、装飾が施された意匠の倉田作品。本部第1庁舎と類似する役割を担う。改装 の上現在は大学の事務施設として使用されており、同じ事務施設として現役で使用されているところは評価対 象と言えよう。旧工科大学本館の煉瓦等を再利用して建造されたもので、当初は第二新館と呼ばれた。隣りの 大学本部とならんで箱崎キャンパスを代表する煉瓦造建物。

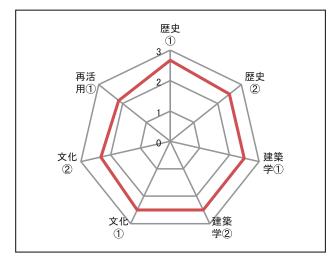
外観は入口を強調し、姿形が美しく、まとまっている。また煉瓦の目地が揃い施工技術が優れている。保存 図書館にも共通する階段室の吹き抜け空間は、倉田デザインの過程と進化を示す上では極めて重要。階段室と地下室は比較的当初のデザインが遺されており評価できる。本部と並び美しい景観・まとまりを示し、多くの 人に親しまれてきた。大学本部近くの建物であり、文部省福岡工事事務所等が使用、現在は本部庁舎として利 用されている。

他の大正〜昭和初期の建造物群と組み合わせることで戦前の大学キャンパス景観という価値を有する重要な 構成要素のひとつ。敷地面積はそう広くなく、建物内にもある程度の余裕が見られる。

関東大震災直前の煉瓦造建築物で、床・梁に鉄筋コンクリート造を使用している。費用対効果の面から再利 用の価値は高い。2階建てであり、補修継続利用は容易と察せられる。しかしながら床が鉄筋コンクリート造で あるので重量が大きい。

32

煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。

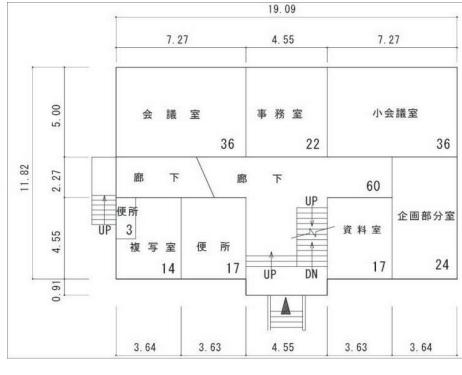












本部第三庁舎

棟名称(建設当初の名称):旧応力研生産研本館(法文学部本館)

| 1. | 建設年 | 1925年、大正14年 |
|-----|------------------------------------|---------------------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 岩崎組(現岩崎建設)、 大正 15年の背面部増設は佐伯組担 当 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上4階 |
| | ・面積 | 9,570m² |
| | ・正面×側面 | 60m×69m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート造、一部鉄 骨鉄骨コンクリート造 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 平成18年から閉鎖中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面15枚+41枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 87年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 25.3 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 9.5 (資料編参照) |
| 16. | 16. 受賞歴、または、文献(出版社) への記載等 | |

- ・総覧 日本の建築第9巻/九州沖縄 (新建築社)、福岡の 近代化遺産(弦書房)、福岡県の近代化遺産(財・西日
- ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| 評価項目 | | | 評点 |
|--------|---------------------------------------|------------------------------------|-------|
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 2.66 |
| 部評価 | ②社会、時代の歴 ついた価値評価 | 歴史的経過と結び fi。産業遺産など。 | 2.50 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的 評価。様式、ジズム建築、イン 営繕の制度的評 | 近代建築、モダニ テリアデザイン、 | 2.83 |
| 的評価 | ②建築の技術史 価。構法、素材 境配慮など。 | 的側面からの評 オ、建築設備、環 | 2.16 |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 は、シンボル性。 | 2.33 |
| ?評価 | ②地域の文化資産 としての評価。 | 産、地域景観資産 地域への貢献。 | 2.50 |
| 再活用度評価 | | てのランドマーク 直評価。 敷地、 建 川用のしやすさ。 | 1.83 |
| | | 評点の計 | 16.81 |

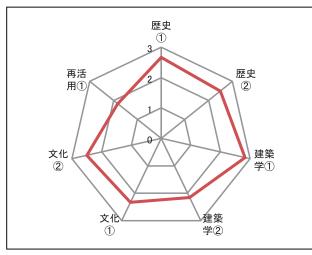
コメント

大正末期に法文学部本館としてつくられた、関東大震災後の初期鉄筋コンクリート造建築。1964(昭和39)年 の文科系貝塚地区移転まで法文経学部本館として使われた。太平洋戦争末期、大学関係の建物にはほとんど空 襲避けの迷彩が施された。同建物については進駐軍の撮影した写真(黒く光っている)が残されており、貴重 な資料となっている。かつては九州大学文科系を代表する建物であり、その社会的な位置づけは極めて大きい。 箱崎の民家にも近接しており、シンボル性は十分すぎるほどあるものと思われる。

独特の装飾と堂々とした風格のある倉田謙の代表的作品のひとつ。デザイン的には福岡日日新聞本社との類似性が確認できる。倉田式セセッションの確立期の作品であり、意匠上の見所が多い。大規模な建物であるため、 二期に分けて建造が行われた。スチーム暖房、自動エレベータの設置など技術史的な評価も高い。

正門から九州大学内を撮影した写真には、ほとんど同建物の姿が写り込んでいる。正門とセットになって九 大の玄関を形成する建物である。正門の横で第一庁舎、工学部本館などとの歴史的建築群を構成している。電 車の車窓からも見ることが出来る。ランドマークとしての評価は極めて高い。ただし、研究所時代に大きく改 装を施しており耐震性などの問題もあるため全体を再利用することは困難であり、シンボルとして一部保存も

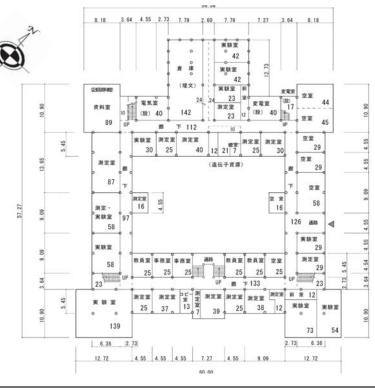
鉄筋コンクリート構造物としては、老朽化が著しいため、寿命に達している。











棟名称(建設当初の名称):応用物質化学機能教室(応用化学教室)

| 1. | 建設年 | 1927年、昭和2年 |
|---------------------------|------------------------------------|----------------|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙、小原節三(設計技師) |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 佐伯組(現佐伯建設) |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上4階 |
| | ・面積 | 2,782 m² |
| | ・正面×側面 | 49m×22m |
| 5. | 方位 (正面玄関の向き) | 北西 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 平成18年から閉鎖中 |
| 10. | 資料(図面等) | 図面24枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 85年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 73.6 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 12.4 (資料編参照) |
| 16. 受賞歴、または、文献(出版社) への記載等 | | |

- - ・近代化産業遺産群 続33の選定(経済産業省)
 - ・福岡の近代化遺産(弦書房)、福岡県の近代化遺産(財・ 西日本文化協会)
 - ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

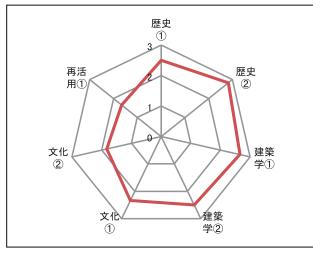
| | ,_,, | | |
|--------|---|----------------------|-------|
| 評価項目 | | | 評点 |
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | 圣過と結びついた 生の記憶。 | 2.50 |
| 的評価 | | | 2.83 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 2.66 |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | 2.50 |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 は、シンボル性。 | 2.33 |
| 部評価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | | 1.83 |
| 再活用度評価 | 活用度 皮どの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 1.66 |
| | | 評点の計 | 16.31 |

コメント

昭和初期に建設された建築物で、外観内装共に優れる倉田作品。位置関係上多くの学生がこの近くを通って いたことになり、記憶の俎上に載りやすい要素を持っている。工学部本館との類似もしくは移行期の特色がみ られる。1923 (大正12) 年の工学部本館の火災を契機に、火気を避ける意味から本館とは別棟で建築されたものである。「地蔵の森」に隣接する本建物の姿は美しく、よく写真にも撮られている。

初期の鉄筋コンクリート構造の建築物で、内部も建設当時の姿を色濃く遺しており、当時の実験の様子が極 めて分かりやすい。応用化学の発展期の遺産であり、タイル張建築の早い事例。その時代の主張が屋根・窓などの各所に見られ、通気口を効果的に配置している。軒部分に凹凸を持ったタイルを並べる特徴は工学部本館 などでも見られるが、こちらでもそれに加えて背面階段室の窓配置などにも興味深いデザイン性を確認できる。 蛇腹式の初期エレベータ施設は産業遺産としての価値を多く持っている。外観はアカデミックな雰囲気を示し、 多くの人に受け入れられた。

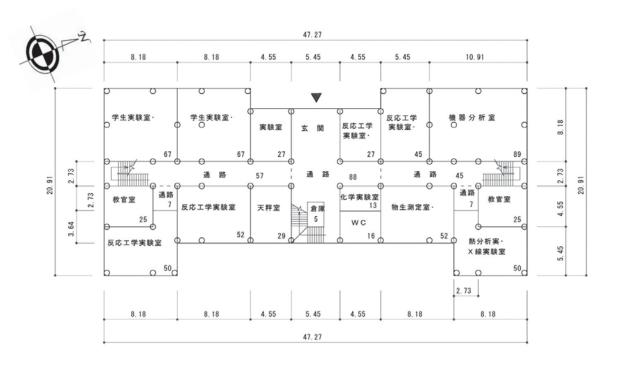
鉄筋コンクリート造であるが、構造体が著しく劣化しているため、耐震補強改修改修が必要である。











棟名称(建設当初の名称):旧文学部心理学教室

| | I |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 建設年 | 1927年、昭和2年 |
| 2. 設計者または組織 | 倉田謙 |
| 3. 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. 規模 | |
| ・階数 | 地上2階 |
| ・面積 | 628m² |
| ・正面×側面 | 24m×17m |
| 5. 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. 大規模改修の時期 (記録に基づく) | 平成2年 |
| 9. 利用状況 | 埋蔵文化財研究室等として使 用中 |
| 10. 資料(図面等) | 図面9枚有。 |
| 11. 経年(平成24年4月1日時点) | 85年 |
| 12. 耐震性能 (Is, 調査年度) | 0.89 一次, H18調査 |
| 13. 耐震経年指標(T,調査年度) | 0.8 , H18調査 |
| 14. コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 56.3 (資料編参照) |
| 15. コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 24.4 (資料編参照) |
| TO SAME TO A LOOK / ILIN | |

- 16. 受賞歴、または、文献(出版社)への記載等
 - ・総覧 日本の建築第9巻/九州沖縄 (新建築社)、福岡の 近代化遺産 (弦書房)、福岡県の近代化遺産 (財・西日 本文化協会)
 - ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| 評価項目 | | 評点 | |
|--------|-----------------------------------|------------------------------------|-------|
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | 圣過と結びついた 生の記憶。 | 2.50 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴 ついた価値評価 | 歴史的経過と結び 近。産業遺産など。 | 2.50 |
| 建築学 | | 丘代建築、モダニ テリアデザイン、 | 2.33 |
| 的評価 | | 的側面からの評 オ、建築設備、環 | 2.16 |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | | 2.00 |
| 的評価 | ②地域の文化資産としての評価。 | 差、地域景観資産 地域への貢献。 | 1.83 |
| 再活用度評価 | | てのランドマーク 直評価。 敷地、 建 川用のしやすさ。 | 2.00 |
| | | 評点の計 | 15.32 |

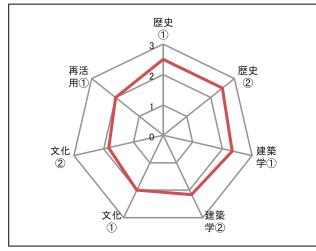
コメント

九州大学の講座の中でも特異な歴史を持ち、心理学を確立させ、更に発展に寄与した。構内に残る他の建物と比較するとデザインの系譜がやや異なるが、心理学の教授である佐久間鼎の希望によりドイツの建物のデザインを踏襲したためと言われる。日本の心理学研究で九大心理学教室が果たした役割は大きく、これは九州大学の研究レベルを建物というかたちで表したものといえる。そもそも心理学教室のみ棟を分けていることからも九州帝国大学におけるこの施設の重要性が想像できよう。

建築としては倉田謙の作品のデザイン的特徴からはずれた異色作と言える。佐久間は日本における心理学の権威であり、建物の設計にも大きく影響したと言われる。鉄筋コンクリート造の特色を生かした造りで。当時の造形感覚にとらわれない形態を生み出した。

初期の鉄筋コンクリート構造の建築物で第一庁舎、工学部本館などとともに歴史的建築群を構成している。 周囲に大規模な建物が多く配置されているため、シンボルとしての要素は少ないが、歴史的価値は十分と言える。 規模がそれほど大きくないことから、リノベーションに伴う負担も少ないものと思われる。市街地に近いこ とからそのままでも用途の幅は広がる。

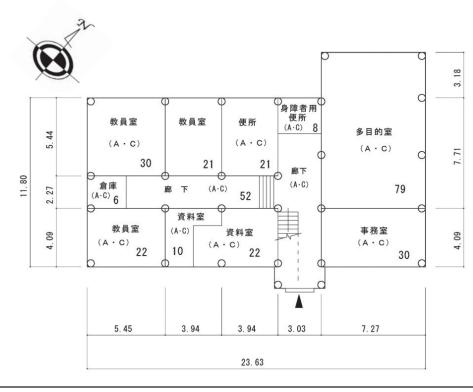
構造体の劣化が見られる。











棟名称(建設当初の名称):船舶海洋工学実験室(造船学実験室)

| 1. | 建設年 | 1921年、大正10年 |
|---|------------------------------------|-------------|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 岩崎組(現岩崎建設) |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上1階 |
| | ・面積 | 662m² |
| | ・正面×側面 | 65m×19m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北西(渡り廊下) |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 煉瓦 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 平成18年から閉鎖中 |
| 10. | 資料(図面等) | 図面3枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 91年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. 受賞歴、または、文献 (出版社) への記載等 ・福岡の近代化遺産 (弦書房) | | |

- ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

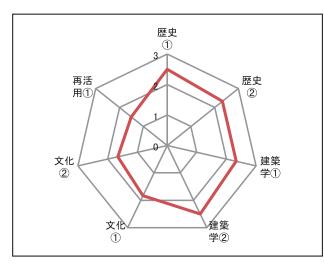
| , | | | |
|----------------|---|-----------------------|-------|
| 評価項目 | | 評点 | |
| 歴史: | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 2.50 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴 ついた価値評価 | 歴史的経過と結び 近。産業遺産など。 | 2.33 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的 評価。様式、対 ズム建築、イン 営繕の制度的訊 | 丘代建築、モダニ テリアデザイン、 | 2.33 |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | 2.50 |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 た、シンボル性。 | 1.83 |
| 的評価 | ②地域の文化資産 としての評価。 | 至、地域景観資産 地域への貢献。 | 1.66 |
| 再活用度評価 | 活用度 などの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 1.50 |
| | | 評点の計 | 14.65 |

コメント

九州大学の造船学科は、造船業の盛んな九州にある大学として、帝大では東京帝大に次いで設置された学科である。戦後の高度経済成長期まで造船業の貢献には目を見張るものがあり、単なる煉瓦造施設以上の価値が あると言わざるを得ない。その船舶工学の発展に寄与した旧実験室として、工学部の実験室の貴重な一例であり、 工学部の移転までは実験室等に利用されていた。1919 (大正8) 年の工科大学の工学部化の直後に建築され、か つては数多くあり、昭和40年代にほとんどが壊されてしまった煉瓦造実験棟を代表する建築である。

均整のとれた建物で軒部分は竪樋を隠し、外観を飾る。失われた造船学教室をイメージできる。典型的な煉瓦 造+木造トラス屋根の建築物で建設当時の姿がよく残っている。煉瓦造に石材とモルタル洗い出しを加え技術 の高さを示している。煉瓦造りの長大な施設を間延びさせないように、破風など要所に施されたデザインから 芸術性・シンボル性を有する建築物と分かる。倉田謙設計の煉瓦造建築で、旧帝国大学における工学教育の発 展の系譜を残す意味で貴重である。

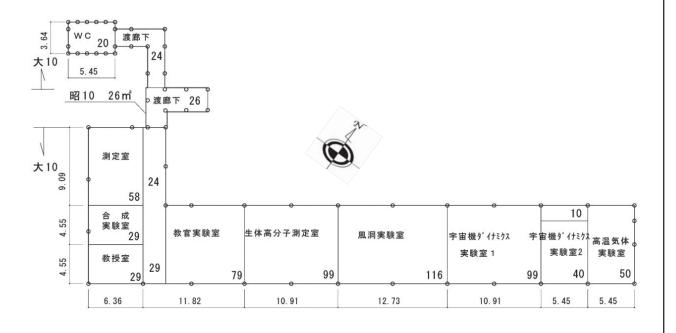
外観上も利用価値が高い。平屋のため再利用時の安全性確保はさほど大きな問題はないと察せられる。キャ ンパス内からみれば奥まったところにあるが、キャンパス外周部にあり、外周道路からは近い。 煉瓦造であり、耐震性が危惧されるため、詳細な調査が必要である。











棟名称(建設当初の名称): 創立五十周年記念講堂

| 1. | 建設年 | 1967年、昭和42年 |
|-----|------------------------------------|------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 光吉健次 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 戸田建設 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上4階、地下1階 |
| | ・面積 | 6157m² |
| | ・正面×側面 | 51m×73m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 平成6年、平成11年 |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 本学の各部局等の主催する行 事に使用中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 45年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | 0.5 , H19調査 |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | 0.997, H19調査 |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 11.4 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 26.8 (資料編参照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 | 反社)への記載等 |
| | ・総覧 日本の建築第9巻/九州沖縄(新建築社) | |

| 10. | 又貝匠、 | よたは、文献(田成江)、〇九戦寸 |
|-----|------|---------------------|
| | • 総覧 | 日本の建築第9巻/九州沖縄(新建築社) |
| | | |

| | 心兒 口个"火生木" | | |
|---|------------|-----------|----------|
| • | ·平成17年度九州大 | 学箱崎キャンパス内 | J歴史的資源の現 |
| | 況調査成果報告書 | | |

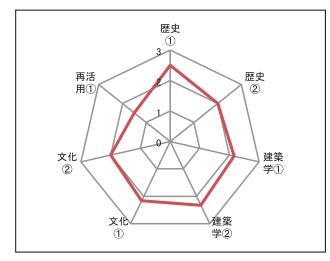
| 評価項目 | | | 評点 | |
|--------|---|----------------------|-------|--|
| 歴史的 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | | 2.50 | |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | | 2.00 | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 2.16 | |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | | |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 t、シンボル性。 | 2.16 | |
| 的評価 | ②地域の文化資産 としての評価。 | 差、地域景観資産 地域への貢献。 | 2.00 | |
| 再活用度評価 | 活用度 ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 1.50 | |
| | | 評点の計 | 14.65 | |

コメント

創立五十周年を記念して建築されたシンボリックな建築物である。卒業生の記憶にも深く留まる。竣工を見たのは1967 (昭和42) 年であり、直後に「大学紛争」の舞台となった。近年まで入学式·卒業式の会場として使用され、工学部本館と並ぶべき箱崎キャンパスを代表するシンボル的存在。創立百周年記念式典もここで挙行さ

1960年代の現代建築の特徴を有し、意匠的にも優れた建築物高度成長時代の鉄筋コンクリート構造の建築物で光吉健次の代表作。空間のダイナミックな造形性に優れ、打ち放し仕上げにさまざまな工夫がある。大スパンの梁の設計に構造学者の協力があった。学内の中心的施設であり、芸術性が高い。プレストレストコンクリートの使用など構造技術を駆使した大空間建築物でさまざまな挑戦がみられる。筥崎宮の鳥居を模したとも言わ れる正面のフォルムはモダニズム建築としての価値を十分に有する。

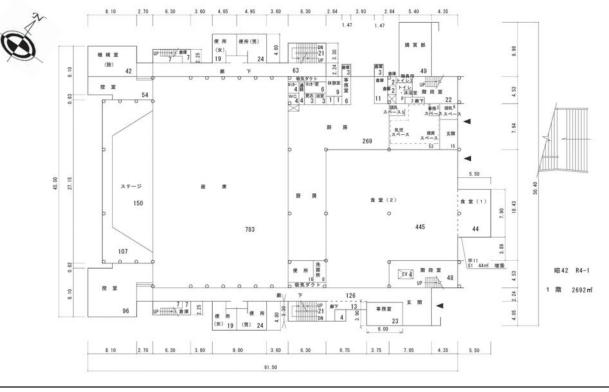
講堂という性格上、他の用途にはあまり使用しがたい。不特定多数の人が利用する施設としては耐震性が不 足しているため、耐震補強改修が必要である。











創立五十周年記念講堂

棟名称(建設当初の名称):熱帯農学研究センター(演習林本部)

| 1. | 建設年 | 1931年、昭和6年 |
|-----|------------------------------------|------------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 渡部 善一 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 清水組 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上1階 |
| | ・面積 | 452m² |
| | ・正面×側面 | 17m×33m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 木造 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 昭和12年 |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 熱帯農学研究センターの教 育・研究施設として使用中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 81年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | ・福岡の近代化遺産 (弦書房 | |

| 評価項目 | | | 評点 | |
|--------|---|------------------|-------|--|
| 歴史: | ①大学の歴史的経過と 価値評価。卒業生の | | 2.16 | |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的 ついた価値評価。産 | | 2.16 | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面 評価。様式、近代員 ズム建築、インテリ 営繕の制度的評価な | 世築、モダニ アデザイン、 | 2.33 | |
| 的評価 | ②建築の技術史的側 価。構法、素材、 境配慮など。 | | 2.00 | |
| 文化的 | ①社会全般に対する立 芸術性、社会性、シ | | 2.00 | |
| 的評価 | ②地域の文化資産、地 としての評価。地域 | | 1.83 | |
| 再活用度評価 | 活用度 などの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 2.00 | |
| | | 評点の計 | 14.48 | |

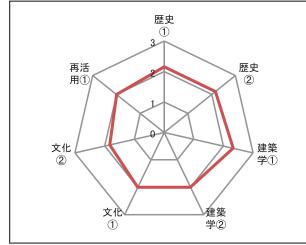
コメント

昭和初期の洋風木造の建築物で、熱帯地に向けて農学研究を発展させてきた、農学部のマスコット的存在。 九州大学演習林の歴史は、農学部自体の歴史より古く、戦前期外地に多くの演習林を持っていた九州大学の演 習林本部として建てられた経緯を持ち、朝鮮半島・台湾・樺太との関連性を考える上では象徴的存在と言える。

田和期の施設ながら木トラス工法を敢えて用いている所に演習林としての特殊性を色濃く持つ。周囲の建物と比較するとスケールの面でおとなしい感じも見受けられるが、鉄筋コンクリート建築が多い周辺での外観は特異な印象を持つ。整った正面を持ち下見板張りで外観を飾る。中廊下、左右対称の平面で端正な造りである。高い天井(現在はふさがれている)を保管する空気抜き穴には半円アーチが用いられ、玄関ポーチにも特異な意匠が施されている。芸術性・シンボル性を有する建築物で、とても愛らしいコロニアルスタイルの洋風木造建築である。

規模も小さく再活用しやすい建物であり、場合によっては移築等の措置も可能。もし再活用ができれば、ワンポイントアート的役割を果たせるだろう。

耐震性、耐久性は不明であるが、外観から劣化は見られない、木造であるため、耐火性能はない。

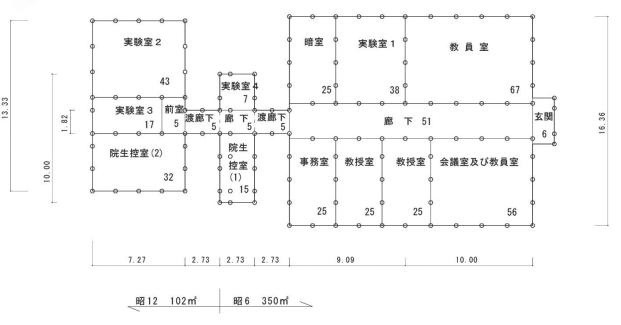












棟名称(建設当初の名称):航空工学教室(航空学教室)

| 1. | 建設年 | 1939年、昭和14年 |
|-----|------------------------------------|--------------|
| 2. | 設計者または組織 | 島岡春太郎・坪井善勝 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 辻組(現九州建設) |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上6階 |
| | ・面積 | 1,845m² |
| | ・正面×側面 | 38m × 38m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北西 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 平成18年から閉鎖中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 設備図面のみ (4枚) |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 73年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 20.1 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 21.9 (資料編参照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 | 反社)への記載等 |
| | | |

- - ・近代化産業遺産群 続33の選定(経済産業省)
 - ・福岡の近代化遺産(弦書房)、福岡県の近代化遺産(財・ 西日本文化協会)
 - ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| 評価項目 | | | 評点 |
|--------|---|----------------------|-------|
| 歴史始 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 2.16 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | | 2.33 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 2.33 |
| 的評価 | ②建築の技術史 価。構法、素材 境配慮など。 | 2.16 | |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 た、シンボル性。 | 2.00 |
| 評価 | ②地域の文化資産 としての評価。 | 差、地域景観資産 地域への貢献。 | 1.83 |
| 再活用度評価 | 活用度 などの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 1.33 |
| | | 評点の計 | 14.14 |

コメント

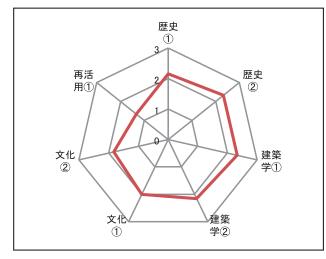
九州大学工学部の航空工学科は、東大に次ぎ我が国2番目に設置された学科であり、大戦直前に建設された時 代性のある建物。卒業生には著名人に宇宙飛行士の若田光一氏もおり、戦前戦後の航空工学を支えた施設とし ての意味合いはこれからますます高まっていくと思われる。

建設時期が重要である。極力無駄を省いた造形としてキャンパス内で群を抜いた存在。装飾を排したシンプ ルながらもシャープな意匠となっている。農学部6号館以上にインターナショナルスタイルが見事に表現されて おり庇を強調し、高い塔と水平な庇が印象に残り広がりを見せている。坪井善勝が設計に加わっており建築史 的価値も高い。

戦争末期、空襲避けに黒く塗られた迷彩が一番はっきり残っており。地域に対して戦争の記憶をとどめてお り全国的にも珍しい。防空迷彩に特殊な塗料が用いられており、それ故に現在でもペンキ跡が遺る。塔屋を持 ち目立つ外観であるからこそ、端島炭鉱(軍艦島)と同様のそのままの姿での景観保全が望まれる。その特異 な形状からランドマークとしてのインパクトはかなり大きい。航空工学と九州大学との関連性を考える上では、 極めて重要な価値を有している。

46

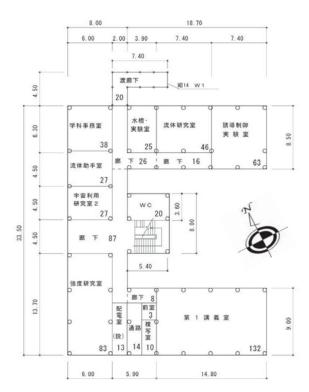
鉄筋コンクリート構造であるが、構造体が劣化しているため、詳細な調査が必要である。











航空工学教室(航空学教室)

棟名称(建設当初の名称):第三学生集会所(三畏閣)

| 1. | 建設年 | 1937年、昭和12年 |
|-----|------------------------------------|---------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 不詳 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上2階 |
| | | 453m² |
| | ・正面×側面 | 22m × 33m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 木造 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 学生の福利厚生施設として使 用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 75年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | ・福岡の近代化遺産 (弦書房 | |

・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

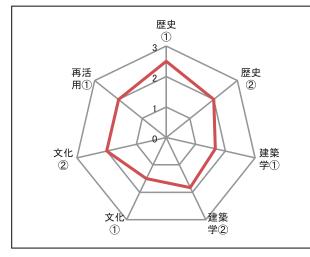
| 評価項目 | | | |
|------------------------------------|---|-------|--|
| 歴史的 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | 2.50 | |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | 2.00 | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | 1.66 | |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | 1.50 | |
| 的評価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | 2.00 | |
| 再活用度 の利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 2.00 | |
| | 評点の計 | 13.49 | |

コメント

九州大学では、「三畏閣」と呼ばれており、卒業生にもコンパ、クラブ活動で長く利用された厚生施設であり、卒業生の記憶に深く結びついた建物である。学部を越えた共通記憶を喚起させる施設としての価値は高い。昭和初期の和風を強調して造られた。伝統的構法による比較的大きな規模の木造建築物であり、広々とした和室縁側を設けゆったりとした空間である。広い座敷に3間(1.8×3メートル)に及ぶ長押を用い見事である。中庭があり、広い緑を設け再利用しやすい。柱時計など一部調度品にも産業遺産としての価値を認めることが出来る。

キャンパス外の敷地に長く存在し続けた建築物であり、学生と教師の交流の場として大切な役割を果たしてきた。

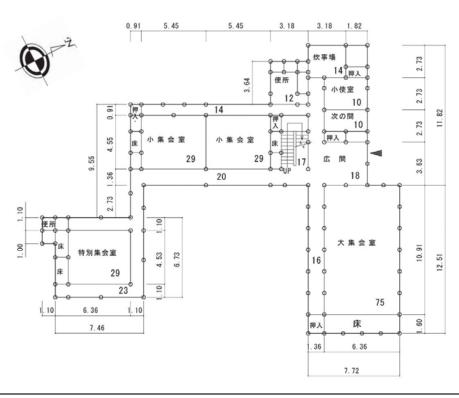
耐震性、耐久性は不明であるが、外観から劣化は見られない。木造であるため、耐火性能はない。











第三学生集会所(三畏閣)

棟名称(建設当初の名称): 松浜厚生施設(学生食堂)

| 1. | 建設年 | 1928年、昭和3年 |
|-----|------------------------------------|-------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 不詳 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上2階 |
| | ・面積 | 397 m² |
| | ・正面×側面 | 19m×18m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 木造 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 九州大学生活協同組合事務所 として使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 84年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | ・福岡の近代化遺産 (弦書房 | |

・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| | 評価項目 | | | |
|--------|---|----------------------|-------|--|
| 歴史的 | ①大学の歴史的糸 価値評価。卒業 | 圣過と結びついた 生の記憶。 | 2.16 | |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | | 1.66 | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 2.00 | |
| 的評価 | | 的側面からの評 オ、建築設備、環 | 1.83 | |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 た、シンボル性。 | 1.83 | |
| 的評価 | ②地域の文化資産 としての評価。 | 差、地域景観資産 地域への貢献。 | 1.66 | |
| 再活用度評価 | 活用度 ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 2.00 | |
| | | 評点の計 | 13.14 | |

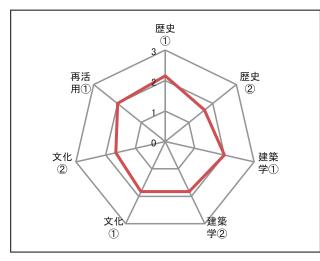
コメント

いわゆる下見板コロニアルスタイルの洋風木造建築であり、昭和初期の洋風木造建築として貴重な存在。木造建物としては古い方に属するが、当初は学生寮だった。過去数度用途を変えながらも時代の要請に応えながら現役施設として使用されてきただけの風格を持つ。教育周辺の生活産業として支えた経緯を持つところは評価の対象となる。

下見板張りをデザインとして使っており、外壁のパネル形式から表れている凹凸の持つデザイン性は十分価値があると言える。キャンパス内から見ても象徴的な存在と言える。建物は一般市道に位置しているため、一般市民の目に触れやすい。九州大学の建物群の中では地域住民によく知られた建物のひとつと言える。

キャンパスの敷地外にある木造施設であり、移築や曳家などは比較的容易。小規模で再利用もしやすいと考えられる。木造で継続利用の改修は可能と察せられる。

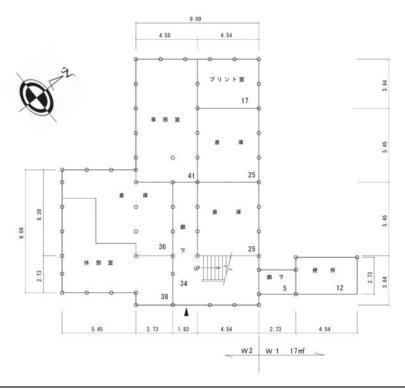
耐震性、耐久性は不明であるが、外観から劣化が進んでいるようである。木造であるため、耐火性能はない。











松浜厚生施設(学生食堂)

棟名称(建設当初の名称):原子核実験室(理学部実験室)

| 1. | 建設年 | 1944年、昭和19年 |
|-----|------------------------------------|-----------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 坪井善勝 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上3階 |
| | ・面積 | 2,157 m² |
| | ・正面×側面 | 53m×52m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南西 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 昭和34年、昭和40年、 昭和48年、昭和55年 |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 理学部の教育・研究施設とし て使用中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面22枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 68年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | 0.41 一次, H 18調査 |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | 0.800, H18調査 |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 5.4 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 31.0 (資料編参照) |
| 16 | 受営麻 またけ 立献(出出 | |

- 16. 受賞歴、または、文献(出版社) への記載等
 - ・福岡の近代化遺産(弦書房)
 - ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| 評価項目 | | | |
|--------|---|------------------------|-------|
| 歴史: | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 2.00 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴 ついた価値評価 | 歴史的経過と結び fi。産業遺産など。 | 2.50 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 1.66 |
| 的評価 | ②建築の技術史 価。構法、素材 境配慮など。 | 的側面からの評 オ、建築設備、環 | 1.83 |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 た、シンボル性。 | 2.33 |
| 的評価 | ②地域の文化資産としての評価。 | 至、地域景観資産 地域への貢献。 | 1.66 |
| 再活用度評価 | ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | 1.00 |
| | | 評点の計 | 12.98 |

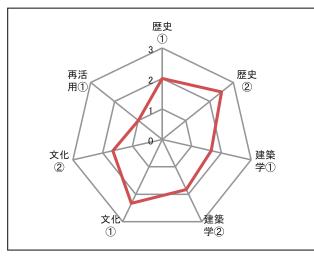
コメント

原子核の本格的な研究開始を示す、今もなお西日本唯一の核実験研究施設で、九州大学理学部における原子核実験の歴史を知る上で貴重である。バンデグラフ加速器、タンデム加速器など戦前期より我が国の原子核実験の貢献に果たした設備群を西日本でいち早く有した施設であることの価値は高い。シンプルな外見ながら要所には丸窓を用いるなど時期的な背景からは考えられないくらい意匠にも配慮されている作品である。坪井善勝の初期作品であることも評価する部分と言える。

大戦中の鉄筋コンクリート造の建築物で貴重なカーテンウォールを採用しており、採光と意匠とを両立されているところは興味深い。加速器、加圧タンクと一体となった鉄筋コンクリート構造。初期の原子核実験の様子を残す科学的モニュメントとしての価値が高く実験室に合せて外観を造っており起電機タンクが縦に3層に貫くユニークな建築。内蔵する研究設備にも高い資産価値がある。実験設備を残したまま再利用には、難しいところがある。理科系学問への関心を持たせ、または実験と社会のあり方、科学のこれからを考える上で、貴重な教育的財産である。

鉄筋コンクリート造であるが、耐震性が不足し、構造体が劣化している。特殊な施設であるため、再活用は 困難である。

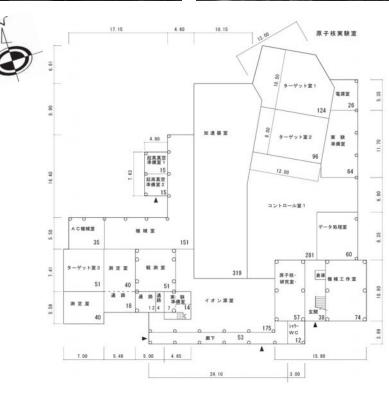
52











原子核実験室 (理学部実験室)

棟名称(建設当初の名称): 道路工学実験室(河海工学実験室)

| 1. | 建設年 | 1925年、大正14年 |
|-----|------------------------------------|---------------|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 佐伯工務所 (現佐伯建設) |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上2階 |
| | ・面積 | 205m² |
| | ・正面×側面 | 10m×12m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 平成18年から閉鎖中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面5枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 87年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 86.6 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 21.3 (資料編参照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 | |

- ・近代化産業遺産群 続33の選定(経済産業省)
- ・福岡の近代化遺産 (弦書房)、福岡県の近代化遺産 (財・西日本文化協会)
- ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

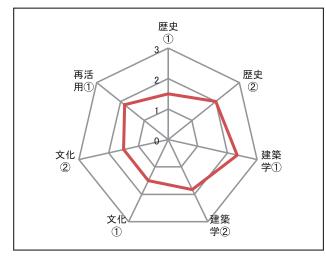
| | 評価項目 | | | |
|--------|---|-----------------------|-------|--|
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 1.50 | |
| 的評価 | | 歴史的経過と結び 面。産業遺産など。 | 2.00 | |
| 建築学 | ①建築の意匠史的 評価。様式、 ジ ズム建築、イン 営繕の制度的評 | 近代建築、モダニ テリアデザイン、 | 2.33 | |
| 的評価 | 的 評 ②建築の技術史的側面からの語 | | 1.83 | |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 は、シンボル性。 | 1.50 | |
| | ②地域の文化資産 としての評価。 | 産、地域景観資産 地域への貢献。 | 1.50 | |
| 再活用度評価 | 活用度 取送の利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 1.83 | |
| | | 評点の計 | 12.49 | |

コメント

大正末期に建設された実験室、法文学部と同じ建設年であるが意匠が異なった、倉田謙の異色作。装飾が抑えられている意匠でずいぶんとキュービックなデザインであるが、角部などには意匠が配されている。極めて初期のアールデコからモダニズム建築への移行を感じさせる貴重な建築である。清楚な外観は建物の機能そのものを表しており、一定の価値が認められる。柱頭飾りが幾何学的であり、時代を表現している。鉄筋コンクリート造で自由な形を生み出す技術力を感じる。関東大震災後の初期鉄筋コンクリート造建築。外観のすばらしさは文化的資産と言えよう。樹木に囲まれ独立しているために再利用しやすい。超伝導システム科学研究センターと隣あって建っており、回りの樹木も含めて、佇まい的に面白い。

大正期の鉄筋コンクリート造施設は大学内を除けば九州内の現存例もそう多くない。特徴的な外観から、ある程度のシンボル性は確認できる。小規模な建物であり、無理をしなければ事務施設や商業施設などへのリノベーションは容易ではないかと考えられる。規模も手ごろな大きさ。小規模であり、再活用のしやすい建築である。

鉄筋コンクリート造であるが、構造体が著しく劣化しているため、詳細な調査が必要である。











55

道路工学実験室(河海工学実験室)

棟名称(建設当初の名称):超伝導システム科学研究センター(高周波電気及び電子工学実験室)

| ٦. | 7-11 11 12. | 1001 E HTT10 E |
|-----|------------------------------------|-----------------------------|
| 1. | 建設年 | 1931年、昭和6年 |
| 2. | 設計者または組織 | 渡部善一 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 大林組 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上2階 |
| | ・面積 | 578m² |
| | ・正面×側面 | 23m×11m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | グラミン・クリエイティブ・ハウスの研究施設として使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 図面16枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 81年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 75.1 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 14.5 (資料編参照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版・近代化産業遺産群 続330 | の選定(経済産業省) |

| 建設年 1931年、昭和6年 | | | | | | |
|------------------------------------|---------------------------------|------------------------------|--------|---------------------------------------|----------------------------------|-------|
| 設計者または組織 | 渡部善一 | 評価項目 | | 目 | 評点 | |
| 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 大林組 | ①大学の歴史的経過 歴 価値評価。卒業生 史 | | | | 1.66 |
| 規模 | | | 的 | 勺 | | |
| ・階数 | 地上2階 | | 評価 | ②社会、時代の歴 | 歴史的経過と結び | 0.16 |
| ・面積 | 578m² | | | | 「。産業遺産など。 | 2.16 |
| ・正面×側面 | 23m×11m | | | | | |
| 方位(正面玄関の向き) | 南東 | | | | り側面からの価値 | |
| 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート | | 建築学 | | 丘代建築、モダニ テリアデザイン、 準価など。 | 2.00 |
| 増築時期(記録に基づく) | - | | 的 | | | |
| 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - | | 評価 | ②建築の技術史 価。構法、素材 境配慮など。 | 的側面からの評 オ、建築設備、環 | 1.66 |
| 利用状況 | グラミン・クリエイティブ・ハ ウスの研究施設として使用中 | | | 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 | | |
| 資料 (図面等) | 図面16枚有。 | | . 1. | ①社会全般に対す | する文化的資産、 | 1.50 |
| 経年(平成24年4月1日時点) | 81年 | | 文化 | 文 芸術性、社会性、シンボル性。 化 | | |
| 耐震性能(Is, 調査年度) | - | | 的評 | 勺 | | _ |
| 耐震経年指標(T,調査年度) | - | | 価 | ②地域の文化資産 | 至、地域景観資産 | 1.50 |
| コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 75.1 (資料編参照) | としての評価。地域への貢献。 | | 1.50 | | |
| コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 14.5 (資料編参照) | | 再 | | | |
| ・福岡の近代化遺産(弦書房 | の選定(経済産業省) | | 再活用度評価 | | てのランドマーク 直評価。敷地、建 J用のしやすさ。 | 1.83 |
| | | | | | 評点の計 | 12.31 |

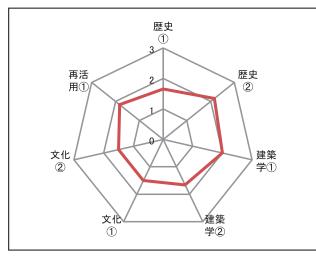
コメント

昭和初期の鉄筋コンクリート造建築で、当時は電気・電子工学研究の最先端の実験室であった。左右対称の 建造物ながら、スクラッチタイルを使用するなど当時の流行に沿った形での表現方法を使用した建物。少なく とも三種類以上のスクラッチタイルを使用しており、建物の平滑な外観を複雑な姿に変えている。同様のタイ ル貼りの応用物質化学教室、工学部本館と比べて装飾は少なくなっているが、表現主義的な作風の質の高い建 築である。水平線を強調した工法は新時代の兆しを示しており、斬新なデザインは建築文化の向上に貢献して られ、プロポーションの美しさは周囲の景観と調和している。

現在の文化活動が国際交流また地域への一定限以上の貢献を続けていることから、こちらも評価対象に加え る必要がある。規模が小さく、立地的にも再活用しやすい建物である。

56

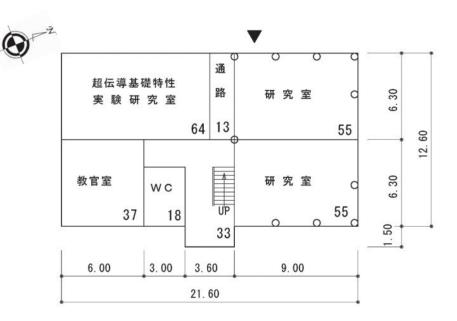
鉄筋コンクリート構造であるが、構造体が著しく劣化しているため、詳細な調査が必要である。











棟名称(建設当初の名称):建築学教室

| 1. | 建設年 | 1960年、 昭和35年 | 1970年、 昭和45年 |
|-----|------------------------------------|--------------------|-----------------|
| 2. | 設計者または組織 | 光吉健次 | |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 清水建設 | |
| 4. | 規模 | | |
| | ・階数 | 地上3階 | 地上4階 |
| | ・面積 | 2,858 m² | 2078m² |
| | ・正面×側面 | 64m×59m | • |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 | |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリー | - - |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - | - |
| 9. | 利用状況 | 工学部建築学科 施設として使用 | |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面21枚有。 | |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 52年 | 42年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | 0.45 , H19調査 | 0.79 , H19調査 |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | 0.998, H19調査 | 0.988, H19調査 |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 0.7 (資料編参照 | 3) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 28.1 (資料編参 | 照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 | 女社)への記載等 | · 李 |

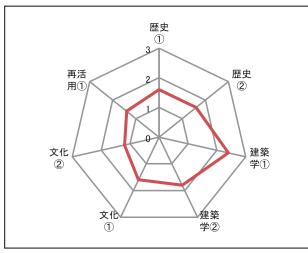
・総覧 日本の建築第9巻/九州沖縄(新建築社)

| | 評価項目 | | |
|--------|---|---|-------|
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | 経過と結びついた 生の記憶。 | 1.60 |
| 部語価 | 評 _ | | 1.60 |
| 建築学 | 評価。様式、資 | り側面からの価値 近代建築、モダニ テリアデザイン、 F価など。 | 2.40 |
| 的評価 | 的 ②建築の技術史的側面からの評 | | 1.80 |
| 文化的 | ①社会全般に対で 芸術性、社会性 | する文化的資産、 は、シンボル性。 | 1.60 |
| 評価 | ②地域の文化資産としての評価。 | 産、地域景観資産 地域への貢献。 | 1.20 |
| 再活用度評価 | ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | 1.40 |
| | | 評点の計 | 11.60 |

コメント

建築学科が設置されて最初の建造物。の建物。丹下健三に連なる系譜の光吉健次による戦後モダニズムの代表作であり、高度成長時代の現代建築の特徴を有し、打ち放しコンクリートによる構造と意匠とが一体化していることが特徴。九州大学内にある他の建物と比較しても独立した柱や自由な窓配置などモダニズムを体現したパーツをそこかしこに有する。比較的大きなスパンと開口部を持ち、玄関のサッシの割り付け、手すりなど細部意匠が特に優れている。ベランダの手すりにはプレキャストを使い、コンクリートの打放しは見事である。建築そのものを現代芸術として捉えた場合、芸術工学部の香山壽夫作品と並び称するべき価値を有する。シンボル性に関しては記念講堂に若干劣る部分もあるが、骨太の印象は、周囲の環境が変化すればすぐに顕在するものと思われる。

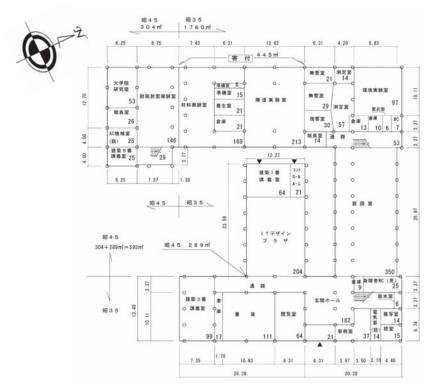
また、各地から移設された九州各地の建築資材や、OBによって移設された博多駅貴賓室のマントルピースなど、単に九州大学のみの価値にとどまらない産業遺産を数多く有し、現在は移設が若干難しいものも存在する。 鉄筋コンクリート造であるが、大半は耐震性が不足しているため、詳細な調査が必要である。











棟名称(建設当初の名称):農学部6号館(農芸化学教室)

| 1. | 建設年 | 1938年、昭和13年 |
|-----|------------------------------------|---------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 島岡春三郎、 國武周蔵(設計担当) |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 清水組 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上3階、地下1階 |
| | ・面積 | 3,375 m² |
| | ・正面×側面 | 69m×27m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 昭和30年、昭和53年 |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 農学部の教育・研究施設、学生食堂・売店として使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 図面40枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 74年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | 0.69 , H19調査 |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | 0.988, H19調査 |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 6.0(資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 26.2 (資料編参照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 | 五社)への記載等 |

- ・福岡の近代化遺産 (弦書房)、福岡県の近代化遺産 (財・西日本文化協会)
- ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

| | 評価項目 | | | |
|--------|---|---|------|--|
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | 圣過と結びついた 生の記憶。 | 1.83 | |
| 的評価 | | | 1.33 | |
| 建築学 | 評価。様式、過 ズム建築、イン | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | |
| 的評価 | 的 評 ②建築の技術史的側面からの評 | | 1.50 | |
| 文化的 | <u></u> | | 1.33 | |
| | | | 1.00 | |
| 再活用度評価 | 活用度 ①街づくりとしてのランドマークなどの利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 1.33 | |
| | | 評点の計 | 9.82 | |

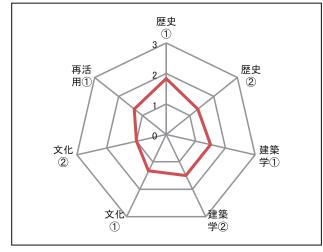
コメント

戦前につくられた数少ない鉄筋コンクリート造建築。農学部の中心的建築物であり、農学部関係者に長期間利用されており、記憶に留まるもの。1931(昭和6)年に焼失した農芸化学本館を再築したもので、旧法文学部本館同様、進駐軍が撮った写真が残されており、空襲避けに黒く塗られた外観が写る。単に農学部のみならず文科系地区の人間にも比較的親しまれている建物である。

長く伸びた庇や連続窓など、インターナショナルスタイルをいち早く取り入れた優れた建築で、地下を設けた数少ない建造物である。地下1階や正面玄関の円狐の持送りに技術の高さを感じる。角部分や背面などには丸窓が効果的に配置され、玄関にもタイルが多用されるなど遠景からは想像しがたい繊細さを持つ。長さ70メートルに近い校舎と長い庇は訪問者に強い印象を与えたであろう。鉄筋コンクリート構造物の本格採用期では大胆なフォルムを持っていたと言える。農学部門からまっすぐ正面の突き当たり部分に位置しており、中央図書館の完成まで農学部建物群の中でも一番象徴的な施設であったことは想像に難くない。すでに多目的な用途として使用されているため、今後のリノベーションにはかなりの期待が出来る。教育施設としてはある程度の耐震性能を有していると言える。

60

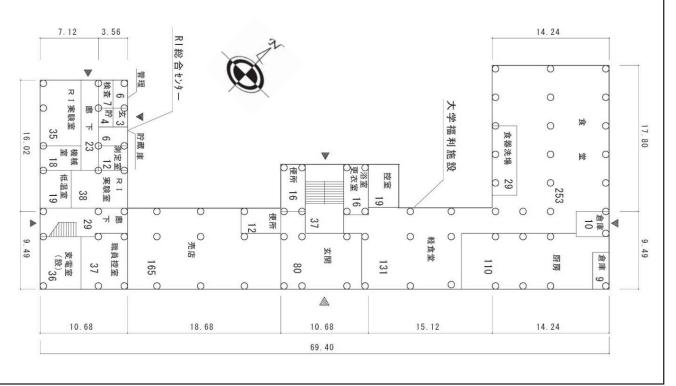
耐震性はほぼ満足の値であり、コンクリート劣化も少ない。











農学部6号館(農芸化学教室)

棟名称(建設当初の名称):砂防工学実験室

| 1. | 建設年 | 1934年、昭和9年 |
|-----|---|-----------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 不詳 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | · 階数 | 地上1階 |
| | ・面積 | 499m² |
| | ・正面×側面 | 10m×50m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 木造 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 農学部の教育・研究施設とし て使用中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 78年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | ACCURATION OF THE PROPERTY OF | ・ |

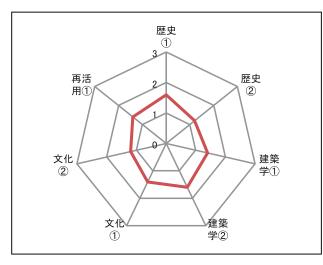
| 評価項目 | | |
|------------------------------------|---|------|
| 歴史 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | 1.60 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | 1.20 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | 1.40 |
|)的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | |
| 的評価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | 1.20 |
| 再活用度 の利用価値評価。敷地、建物としての再利用のしやすさ。 | | 1.40 |
| | 評点の計 | 9.80 |

コメント

昭和初期の農学部の木造の実験室で、内部の洋風木造小屋組みが美しい。一定間隔で三角形状のドーマーを 設けるなど、意欲的なデザインを施している一方で、装飾的要素は案外少ない。箱崎キャンパス内の建物の中 ではほぼ唯一ハーフティンバー(真壁造)による造りをしており、興味深い事例である。奥まっている位置関係や建物が建て込んでいることなどから、景観資産としての評価はどうしても低いが、今後周囲の環境が変化す ることを前提にすれば、連続ドーマーのハーフティンバー建造物は好印象を与える可能性はある。 昭和初期の比較的大きな規模の木造の建築物。木造建築で80年近く使われ今も現役であり、木造実験棟とし

ては貴重な存在である。

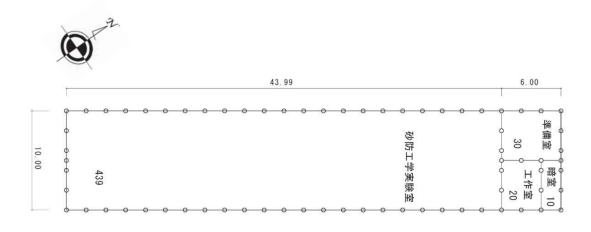
耐震性、耐久性は不明であるが、外観から劣化は見られない。内部に大きな柱がないことから、耐震性は注 意が必要である。木造であるため、耐火性能はない。











砂防工学実験室

棟名称(建設当初の名称):記録資料館(法文学部演習室)

| 1. | 建設年 | 1937年、昭和12年 |
|-----|------------------------------------|--------------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 不詳 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上2階 |
| | ・面積 | 649m² |
| | ・正面×側面 | 19m×22m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北西 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 昭和15年 |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 附属図書館付設記録資料館の 研究施設として使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 75年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 21.8 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 23.2 (資料編参照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 ・平成17年度九州大学箱崎 | ・ 反社)への記載等 キャンパス内歴史的資源の現 |

| 評価項目 | | 評点 | |
|--------|---|----|------|
| 歴史的評価 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | | 1.50 |
| | ②社会、時代の歴史的経過 ついた価値評価。産業遺 | | 1.16 |
| 建築学的評価 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 1.50 |
| | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | 1.33 |
| 文化的評価 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | | 1.16 |
| | ②地域の文化資産、地域域としての評価。地域への | | 1.16 |
| 再活用度評価 | ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | 1.50 |
| | 評点 | の計 | 9.31 |

コメント

況調査成果報告書

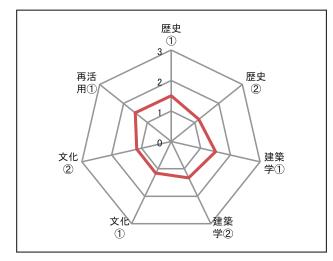
装飾を排したデザインの建築物で、昭和初期の鉄筋コンクリート造の演習室。古い建物の多い正門に近い場所にある。戦後は、文科系初の附置研究所である産業労働研究所、同研究所を改組して設置された石炭研究資料センターとなり、種々の記録を保存し、大切な役割を果たしてきた。現在は附属図書館付設記録資料館(産業経済資料部門)が入っている。産業労働研究所として長く使用され、後に石炭資料研究センターとして日本の石炭資源において社会的意義には大きなものがあったと言える。

装飾のない外観は当時としては進んだ考え方であろう。水平に通した庇が構造と意匠の一体化を表現している。階段廻りなどで効率的に木材を使用しており、親近感を与える効果はあるが、基本的には装飾がなく機能的である。庇を水平に一直線に通し、昭和10年代の姿形を示す。平面形式が単純で再利用に対応しやすい。

周辺には大正〜昭和初期の建物群が立ち並ぶ、この施設に関してはスケール感も異なり、木々に隠されておりまたデザインの系譜的にも大きく異なることなどから、複合的な景観的価値は他の大型建物に比べると若干劣る。キャンパス内の一番端部分に位置しているため、再活用には、キャンパス内の大型開発などが行われた場合でも建物転用には差し支えないと言える。

64

鉄筋コンクリート造であるが、構造体が劣化しているため、詳細な調査が必要である。

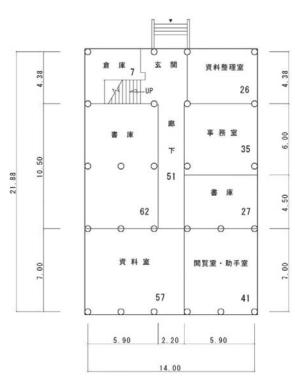












記録資料館 (法文学部演習室)

棟名称(建設当初の名称):留学生センター分室(発電所)

| 1. | 建設年 | 1929年、昭和4年 |
|-----|------------------------------------|--------------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙、川田? |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 清水組(現清水建設) |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上2階 |
| | ・面積 | 269m² |
| | ・正面×側面 | 10m×22m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 南東 |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | 昭和6年 |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 留学生センター分室として、 教育・研究施設として使用中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面7枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 83年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 13.7 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 19.8 (資料編参照) |
| 16. | ・福岡の近代化遺産 (弦書房 | |

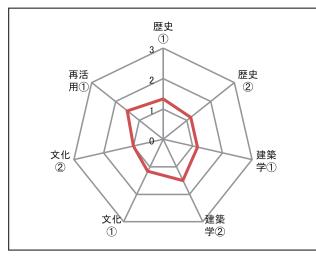
| 評価項目 | | 評点 | |
|--------|---|--------------------------------|------|
| 歴史的 | | 大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | |
| 的評価 | ②社会、時代の歴 ついた価値評価。 | | 1.16 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | | 1.16 |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | | 1.50 |
| 文化 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | | 1.16 |
| 的評価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | | 1.00 |
| 再活用度評価 | ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | | 1.50 |
| | | 評点の計 | 8.81 |

コメント

況調査成果報告書

昭和初期の鉄筋コンクリート造の建築物。工学部での実験に使う電力を供給し、実験を支えてきた。発電所から留学生センターとして再利用され、早期のリノベーションが図られた稀少な事例。改装手法も含めて今後学ぶべき所の多い施設と言える。元々発電所であったこともあり、構造には気を遣ったと見て良い。改装の上転用すること自体が珍しい。水平な庇左右対称の窓等昭和初期の形態を示す。かなりデザイン的にはモダニズムに通じるあっさりとした仕上がり。意匠は少ないが、これは発電所という機能を重視したものと思われる。規模や用途に関係なくきちんと造られている。

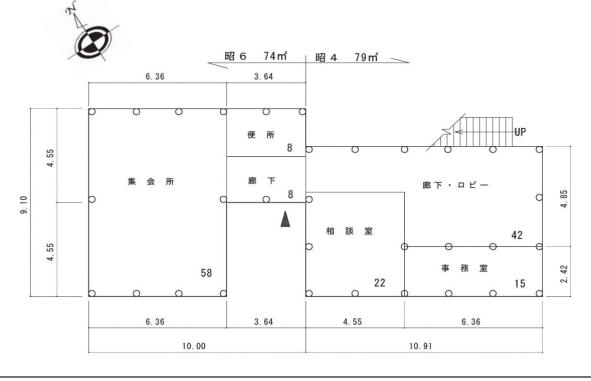
取用すること目体が多しい。水平な此左右対称の忍等品相切期の形態を示す。がなり、サイン的にはモケー人ムに通じるあっさりとした仕上がり。意匠は少ないが、これは発電所という機能を重視したものと思われる。規模や用途に関係なくきちんと造られている。 留学生達に親しまれてきた受け入れ施設として長く学生の声が絶えなかった建物。卒業後遠く離れることも多い留学生の心のよりどころとして遺していくことには一定以上の価値を有する。九州大学での留学生教育の歴史を見る上で貴重。留学生に縁深い施設という意味合いは、国際化を考える上で今後重要な意味合いを持つ。 鉄筋コンクリート造であるが、構造体が劣化しているため、詳細な調査が必要である。











留学生センター分室(発電所)

棟名称(建設当初の名称):農学部実験室(汽罐室)

| 1. | 建設年 | 1921年、大正10年 |
|-----|------------------------------------|-----------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 倉田謙 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上1階 |
| | ・面積 | 202 m² |
| | ・正面×側面 | 15m×14m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 煉瓦 |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 農学部の教育・研究施設とし て使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 91年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | ・福岡の近代化遺産 (弦書房 | |

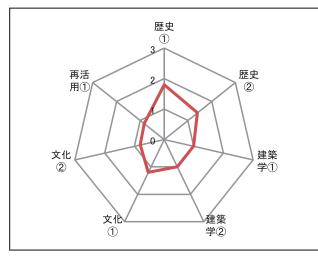
| _ | | | | |
|---|---|---|--------------------------|------|
| | | 評価項 | 目 | 評点 |
| | 歴史的評価 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 1.80 |
| | | ②社会、時代の歴 ついた価値評価 | 歴史的経過と結び 近。産業遺産など。 | 1.40 |
| | 建築学的評価 | ①建築の意匠史的 評価。様式、 ジ ズム建築、イン 営繕の制度的評 | f代建築、モダニ テリアデザイン、 | 1.00 |
| | | ②建築の技術史 価。構法、素材 境配慮など。 | | 1.00 |
| | 文化的評価 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | する文化的資産、 た、シンボル性。 | 1.20 |
| | | ②地域の文化資産 としての評価。 | を ・ 地域景観資産 地域への貢献。 | 0.80 |
| | 再活用度 のでは、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 | | 0.83 | |
| | | | 評点の計 | 8.03 |

コメント

況調査成果報告書

倉田謙設計による農学部最古の煉瓦造建築。その特徴的な点は見られずデザインの過渡的作品ではないかと思われる。学生が学び研究成果をあげた実験棟で、直接関わった学生達以外は目にすることが少ない。煉瓦造から鉄筋コンクリート造へ移行する最後の時期に位置する。組積造の外壁をモルタル塗りで補修しているなど、建設当時の姿が失われている。丸窓の配置や設備の保護を重視した胸壁の頻用は面白い特徴で典型的な煉瓦造+木造トラス屋根の建築物。

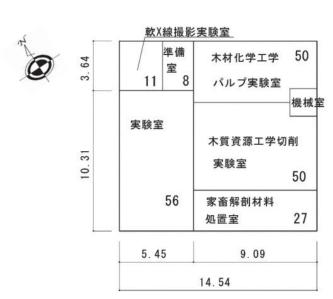
小規模であることは、逆にヒューマンスケールに適った施設であると言え、農学部の周囲の景観には似つかわしい建物である。転用もやりやすい。現地保存が望ましいが、希望があれば移築も可能であると考えられる。 煉瓦造であり、耐震性が危惧される、外壁をモルタルで補修した理由は不明であり、詳細な調査が必要である。











棟名称(建設当初の名称): 工学部高温化学実験室

| 1. | 建設年 | 1932年、昭和7年 |
|-----|--|----------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 各務一雄 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | 地上1階 |
| | ・面積 | 278m² |
| | ・正面×側面 | 21m×15m |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | 北西(渡り廊下) |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | 鉄筋コンクリート |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 平成18年から閉鎖中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 図面6枚有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 80年 |
| 12. | 耐震性能(Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 48.0 (資料編参照) |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 25.9 (資料編参照) |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 ・平成17年度九州大学箱崎 況調査成果報告書 | 豆社) への記載等 キャンパス内歴史的資源の現 |

| | 評価項 | 目 | 評点 |
|--------------|--------------------------------|------------------------------------|------|
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 1.00 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴 ついた価値評価 | 歴史的経過と結び 近。産業遺産など。 | 1.00 |
| 建築学 | | 丘代建築、モダニ テリアデザイン、 | 1.00 |
| 建築学的評価 文化的評価 | ②建築の技術史 価。構法、素材 境配慮など。 | 1.20 | |
| 化 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | 1.00 | |
| 評 | ②地域の文化資産としての評価。 | 1.00 | |
| 再活用度評価 | ①街づくりとして などの利用価値 物としての再利 | てのランドマーク 直評価。 敷地、 建 川用のしやすさ。 | 1.00 |
| | | 評点の計 | 7.20 |

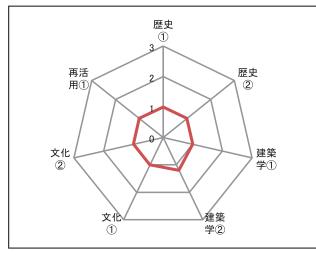
コメント

昭和初期の鉄筋コンクリート造の建築物で大学内の化学研究に大切な役割を果たした。煉瓦造から鉄筋コン クリート造に移行した時期の実験施設であり、70年以上改造されることなく使われてきたことが重要。実験室 といえども施工技術が優れている。

周囲は緑に囲まれており、樹木と調和した景観を形成している。本来庇がある位置に凹凸を付けたタイルを 配置するなど、タイルを窓や入口の庇に装飾的に用いて変化をもたらせている。応用化学教室の建物が裏に隠

されているような位置関係上、シンボリックな建物とは言い難い。こちらの評価についても応用化学教室の建物とセットとして捉えるべきだろう。応用化学教室とセットで評価すべきと考える。 初期の鉄筋コンクリート構造であるが、材料の劣化がなければ、規模が小さくある程度の耐震性を有していそうである。少しこぢんまりとした建物であるが故に、親近感を持たせる印象。平家建で比較的小面積の建物 であることなどから転用は容易と見られる。

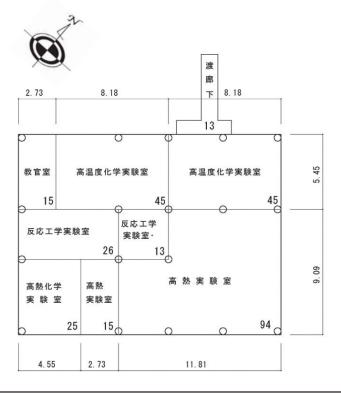
鉄筋コンクリート造であるが、構造体が著しく劣化しているため、詳細な調査が必要である。











棟名称(建設当初の名称):正門

| 1. | 建設年 | 不明ながら戦前であることは 確実 |
|-----|------------------------------------|--------------------------|
| 2. | 設計者または組織 | 不詳 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | · 階数 | - |
| | ・面積 | - |
| | ・正面×側面 | - |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | - |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 正門として使用中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 大正15法文学部増設に伴う鉄 柵新築図有。 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | - |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (mm) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 | - 反社) への記載等 |

- - ・平成17年度九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現 況調査成果報告書

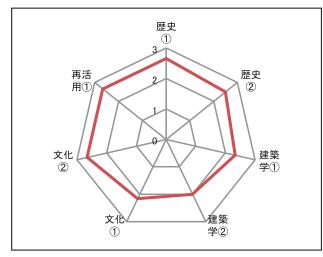
| | 評価項目 | 評点 |
|--------|---|------|
| 歴史的 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | 2.66 |
| 部評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | 2.50 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | 2.33 |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | 2.00 |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | 2.16 |
| 部価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | 2.66 |
| 再活用度評価 | ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | 2.66 |
| | | |

評点の計

16.97

コメント

小規模ながら箱崎キャンパスの象徴的な構造物。九州帝国大学、九州大学と掛けられた看板を変えながらも大学正門として一貫した用途で用いられており、大学のシンボル的存在として風格がある。卒業生の記憶にもっとも残っているものであり、現在でも卒業や入学に際して記念写真を撮る学生、同窓生は多い。石材と赤煉瓦とをうまく組合せ技術の高さを示している。煉瓦造の門柱は熊本大学や広島大学(移設)にも見られるが、九州大学の正門はこれらに比べ若干大ぶりである。床面の石材含め、今となっては稀少な材料がふんだんに使用されている。装飾などの意匠性にも優れ、地域の景観資産として地域住民に親しまれており、街づくりのランドマークとなる。移築建造物であるが、九州帝国大学創設以来の正門と推定される。大学町の形成された箱崎ではやはり「写真になる景観」と言える。キャンパスと地域を結ぶ存在としての価値を有しており、歴史的に地域に対する九大の「顔」として機能している。モニュメントとして保存利用する価値が高い。











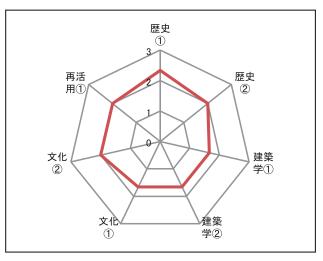
棟名称(建設当初の名称):地蔵の森(創立75周年記念庭園)

| | 74. 79. A. | |
|-----|------------------------------------|-------------|
| 1. | 建設年 | 1986年、昭和61年 |
| 2. | 設計者または組織 | 光吉健次 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 木下緑化建設 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | - |
| | ・面積 | |
| | ・正面×側面 | - |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | - |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | - |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | - |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | 平成13年 |
| 9. | 利用状況 | 庭園として使用中 |
| 10. | 資料(図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 26年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 旧事務室の礎石の一部(御景 | |

| | 評価項目 | 評点 |
|--------|---|-------|
| 歴史始 | ①大学の歴史的経過と結びついた 価値評価。卒業生の記憶。 | 2.33 |
| 的評価 | ②社会、時代の歴史的経過と結び ついた価値評価。産業遺産など。 | 2.00 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的側面からの価値 評価。様式、近代建築、モダニ ズム建築、インテリアデザイン、 営繕の制度的評価など。 | 1.66 |
| 的評価 | ②建築の技術史的側面からの評価。構法、素材、建築設備、環境配慮など。 | 1.66 |
| 文化的 | ①社会全般に対する文化的資産、 芸術性、社会性、シンボル性。 | 1.66 |
| 的評価 | ②地域の文化資産、地域景観資産 としての評価。地域への貢献。 | 2.00 |
| 再活用度評価 | ①街づくりとしてのランドマーク などの利用価値評価。敷地、建 物としての再利用のしやすさ。 | 2.00 |
| | 評点の計 | 13.31 |

コメント

古地名の「地蔵松原」の地名を受け継ぎ、工学部自体の記念事業として建設された記念庭園。光吉健次の公園 実作として向かいの創立五十周年記念講堂との調和を配慮して設計・配置が行われ、計画的に整備された公園。 「地蔵の森」の一画を形成しており、植栽含めてその時代背景を物語るエリア。箱崎キャンパスのこれまでの歴 史を見てきた聖なる空間として継承された森であり、自然の植生を重視している。建築群の中にあって、緑の 空間をつくり親しみやすい所であり、庭園そのものとして大切である。学生達のいこいの場で卒業生の記憶に 残るエリアで、現在は地域住民の散歩にも利用されている。OB・OGでは40代より若年の方々には憩いの場と して数多くの思い出を形成した場所である。中央部のモニュメントや噴水含めてシンボル性は十分あるものと 思われる。高木と低木がうまく配置されており、避難場所としての位置づけも期待でき、そのまま公園として の利用は可能である。











棟名称(建設当初の名称):農学部庭園

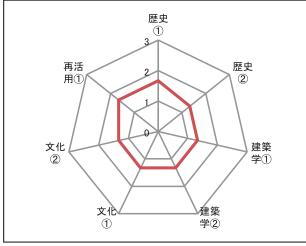
| 1. | 建設年 | 1932年、昭和6年 |
|-----|------------------------------------|------------|
| 2. | 設計者または組織 | 永見健一 |
| 3. | 施工者 (設備・基礎工事等請負会 社が異なる場合は記載) | 不詳 |
| 4. | 規模 | |
| | ・階数 | |
| | ・面積 | |
| | ・正面×側面 | |
| 5. | 方位(正面玄関の向き) | |
| 6. | 構造(木造、煉瓦、RC、鉄骨) (組合せもあり) | |
| 7. | 増築時期(記録に基づく) | |
| 8. | 大規模改修の時期 (記録に基づく) | - |
| 9. | 利用状況 | 庭園として使用中 |
| 10. | 資料 (図面等) | 不明 |
| 11. | 経年(平成24年4月1日時点) | 80年 |
| 12. | 耐震性能 (Is, 調査年度) | - |
| 13. | 耐震経年指標(T,調査年度) | - |
| 14. | コンクリート中性化深さの平均 (㎜) | 無 |
| 15. | コンクリート圧縮強度(N/mm2) | 無 |
| 16. | 受賞歴、または、文献(出版 | |

| | 評価項 | 目 | 評点 |
|--------|---|---|------|
| 歴史的 | ①大学の歴史的系 価値評価。卒業 | | 1.66 |
| 的評価 | | 歴史的経過と結び fi。産業遺産など。 | 1.33 |
| 建築学 | ①建築の意匠史的 評価。様式、 ジ ズム建築、イン 営繕の制度的評 | り側面からの価値 近代建築、モダニ テリアデザイン、 F価など。 | 1.33 |
| 的評価 | ②建築の技術史 価。構法、素材 境配慮など。 | 1.33 | |
| 文化的 | ①社会全般に対す 芸術性、社会性 | 1.33 | |
| 部価 | ②地域の文化資産 としての評価。 | 1.33 | |
| 再活用度評価 | | てのランドマーク 直評価。 敷地、 建 川用のしやすさ。 | 1.66 |
| | | 評点の計 | 9.97 |

コメント

農学部には、創立期から林学科造林学講座が設置されており、本多静六教授の指導の下、大濠公園の実施設計に携わり、造園学講座助教授を長く勤めた永見健一が設計した。永見は造園設計者としても第一級の評価をされており、関東大震災後の復興公園計画にも多く関わるなど、施設自体が他地域との繋がりをも多く持っている。

た右対称の構成を持っており、庭園の近代化として捉えることができる。造園分野での産業遺産は原形を留め難いことが多く、その意味では当該施設は教育施設である。 庭園自体をそのまま公園として利用することは十分可能。費用もメンテナンス程度しかかからず、なおかつ農学部の歴史を継承することにも繋がる。移設は比較的容易、農学部移転とともに伊都地区への、あるいは箱崎地区内へ公園等の一部としての移設も考えられる。





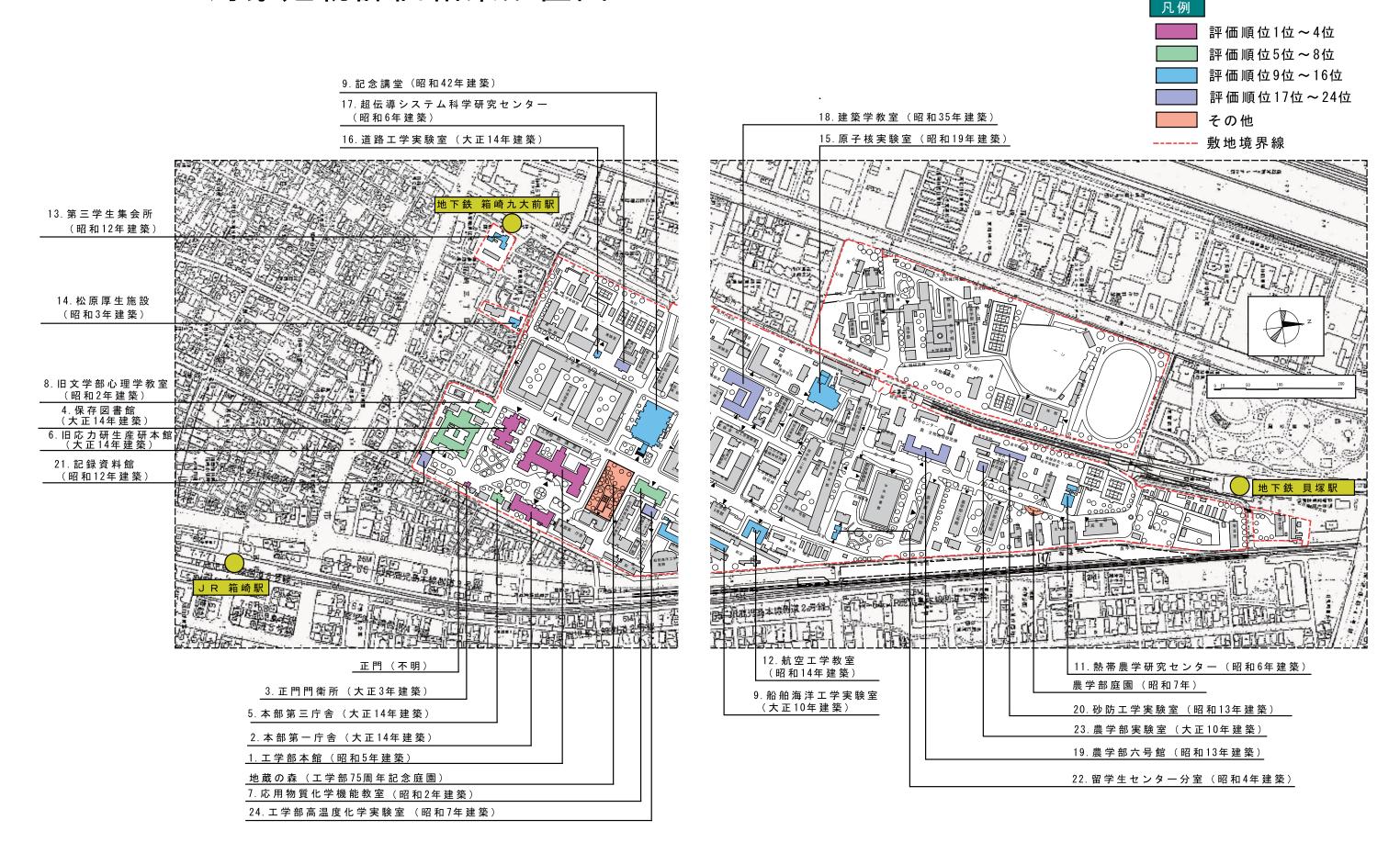






<資料編>

対象建物評価結果配置図



九州大学(箱崎)近代建築物 コンクリート強度試験調査業務 報告書(抜粋)

平成24年9月 (株)那の津寿建築研究所

九州大学(箱崎)近代建築物コンクリート強度試験調査業務

目次

- I. 調査概要
- Ⅱ. コンクリートコアを用いた各種試験方法
- Ⅲ. 調査結果概要
 - 図-I 調査対象建築物配置図
 - 表一Ⅰ 調査対象建築概要と試験結果一覧表
- Ⅳ. 各棟の試験調査
 - 九4 道路工学実験室
 - 九5 保存図書館
 - 九8 旧応力研生産研本館
 - 九9 応用物理化学機能教室
 - 九10 旧文学部心理学教室
 - 九12 留学生センター分室
 - 九13 工学部本館
 - 九14 熱伝導システム科学研究センター
 - 九17 工学部高温度化学教室
 - 九20 記録資料館
 - 九21 農学部6号館
 - 九22 航空工学教室
 - 九23 原子核実験室
 - 九25 建築学教室
 - 九26 記念講堂

I. 調查概要

I.1 調査目的

本調査は、九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の現時点での躯体コンクリートの劣化の程度を把握し、今後の建物維持保全における基礎資料とすることを目的として実施したものである。

I.2 調査対象建物概要

箱崎キャンパス内の15棟を調査対象とした。

図-I調査対象建築物配置図を頁pg3に示す。また各建物概要を表-Iに示す。

I.3 調査・試験項目及び数量

本調査では、以下の項目を把握するために、現地にて試験に供するコンクリートコアを採取した。 コンクリートコアは各棟3ヶ所、全て1階にて採取した。

調査・試験の項目は下記のとおり。

- ① コンクリートの現有強度
- ② コンクリートの中性化深さ

I.4 調查日

コンクリートコア採取は平成24年8月16日・17日の2日間に行った。 なお、採取後は、ポリマーセメントモルタルにより速やかに補修した。 また、モルタル補修ヵ所は9月7日〇〇にて塗装を施した。

I.5 試験機関

試験は INLA 登録試験所である、株式会社麻牛 建設コンサルティング事業部で実施した。

Ⅱ. コンクリートコアを用いた各種試験方法

コンクリートコアの採取は、JIS A 1107「コンクリートからのコアの採取方法及び強度試験方法」 に準じて行った。コアの採取にあたっては、鉄筋探査計(電磁波レーダー法)を用いて鉄筋位置を確認し、鉄筋を損傷しない筒所を選定したうえで実施した。

Ⅱ.1 コンクリートの中性化深さ測定

コンクリートの中性化深さ測定では、JIS A 1152「コンクリートの中性化深さの測定方法」に準じて、コア供試体採取後、側面に付着したのろ等を水洗いによって十分に除去し、乾燥させた後、1%フェノールフタレインエタノール溶液を噴霧し、コンクリート表面から赤紫色に呈色した部分までの距離(非呈色域)を、ノギスを用いてコア円周上で5等分した5箇所にて測定し、現行のJASS 5「鉄筋コンクリート工事」に示される最小かぶり厚さを元に、中性化深さを照査した。

コンクリート強度報告書(抜粋)

Ⅱ.2 コンクリートの圧縮強度試験

コンクリートの圧縮強度試験では、JIS A 1107 に準じて供試体の仕上げ(モルタル及び塗装等)を完全に除去し、かつ供試体の高さと直径の比ができるだけ 2 に近くなるように、切断機・端面研磨機を用いて整形した。なお、供試体の高さと直径の比が 1.9 よりも小さい場合は、試験で得られた圧縮強度に補正係数を乗じて直径の 2 倍の高さをもつ供試体の強度に補正した。

Ⅲ 調査結果と考察

Ⅲ. 1調査結果概要

調査結果概要一覧を表ー1に示す。

Ⅲ. 2考察

中性化は、概ね建設年の古い建築物ほど進行している傾向にある。コンクリートコアの全断面に渡って中性化している建築物も戦前の建物にいくつか見受けられる。

圧縮強度は、建設年代による法則性はみられなかった。設計基準強度の概念は昭和25年施行の建築基準法によって示されたためこれ以前の建築物のコンクリート強度はばらついている。これ以降の建物は一定の強度を保有している。

なお、本報告では対象となる建築物が設計基準強度が指定されていない時代のものであることを 考慮して、強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を下記により 13.5N/mm² とした。

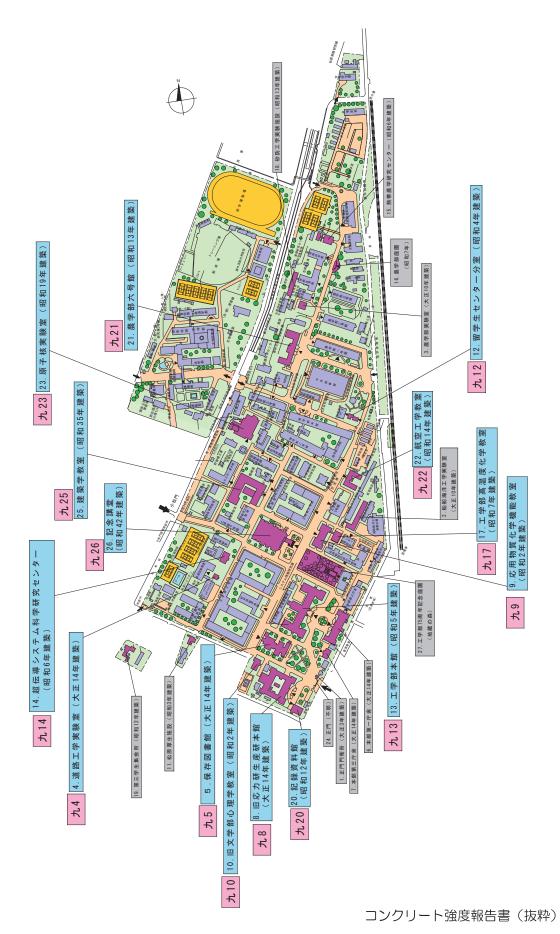
「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が 13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、これ以外に客観的に判断する材料が見当たらない。

85

コンクリート強度報告書(抜粋)

図—1:調査対象建築物配置図





表—1:調査対象建築物概要と試験結果一覧表

平成24年9月時点

| 番号 九4 | 棟 名 | 構造 | -+ | | | | クリート | シナほ | . 1017 | | | 1127 | 縮強度調 | 144 何天 |
|---------------|-----------|----------------------|--------|-----------|----|--------|-----------------|----------|--------|--------|--------|------|---------|--------|
| | 134 12 | | | 出 世計休 | 筒元 | | | | | 筒先 | | 正統改 | (N/mm2) | |
| 九4 | | 階数 | 建設年 | 供試体 No | | 中性化為 | で ナ (mm) | | | 中性化沒 | 下十(mm) | 工机自力 | 以支武學 | 平均值 |
| 九4 | | | | NO | 環境 | | | 到達 位置 | 環境 | | | 補正前 | 補正後 | |
| 九4 | | 床面積 | | | | 最大 | 平均 | | | 最大 | 平均 | | | 差 |
| | 道路工学実験室 | RC | 大正14年 | | 屋内 | 全断面 | | 貫通 | 屋内 | 全断面 | | 16.8 | 15.5 | |
| | | 2F | | 九4-C2 | 屋内 | 全断面 | | 仕上界面 | 屋内 | 全断面 | | 31.8 | 28.6 | 21.3 |
| | /a | 205 m ² | | 九4-C3 | 屋内 | 全断面 | | 仕上界面 | 屋内 | 全断面 | 中性化 | 22.4 | 19.7 | 6.69 |
| 九5 | 保存図書館 | RC | 大正14年 | | 屋内 | 122.5 | 95.8 | 躯体断面 | _ | | | 12.3 | 11.8 | |
| | | 4F | | 九5-C2 | 屋内 | 83.5 | 67.5 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 11.0 | 10.7 | 11.1 |
| | | 3,068 m ² | (築87年) | | 屋内 | 62.0 | 55.5 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 10.9 | 10.8 | 0.61 |
| 九8 | 旧応力研生産研本館 | RC | 大正14年 | | 屋内 | 65.0 | 40.3 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 10.9 | 10.9 | |
| | | 4F | | 九8-C2 | 屋内 | 30.0 | 23.2 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 8.4 | 8.4 | 9.5 |
| | | 9,570 m ² | (築87年) | | 屋内 | 18.5 | 12.5 | 躯体断面 | _ | - | _ | 9.2 | 9.2 | 1.28 |
| 九9 | 応用物理化学機能 | RC | 昭和 2年 | 九9-C1 | 屋内 | 全断面 | 中性化 | 躯体断面 | 屋内 | 全断面 | 中性化 | 14.9 | 14.3 | |
| | 教室 | 4F | | 九9-C2 | 屋内 | 56.0 | 45.8 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 11.6 | 11.3 | 12.4 |
| \rightarrow | | 2,782 m ² | (築85年) | 九9-C3 | 屋内 | 65.0 | 51.1 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 11.5 | 11.5 | 1.68 |
| 九10 旧文 | 旧文学部心理学教室 | RC | 昭和 2年 | | | 77.5 | 49.4 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 16.8 | 16.0 | |
| | | 2F | | 九10-C2 | | 全断面中性化 | 41.5 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 31.8 | 29.9 | 24.4 |
| | | 628 m² | (築85年) | 九10-C3 | 屋内 | 全断面中性化 | - | 仕上界面 | 屋内 | 全断面中性化 | _ | 29.3 | 27.2 | 7.37 |
| 九12 | 留学生センター分室 | RC | 昭和 4年 | 九12-C1 | 屋内 | 9.5 | 2.4 | 躯体断面 | _ | | _ | 32.6 | 30.0 | |
| | | 2F | | 九12-C2 | 屋内 | 31.0 | 18.5 | 躯体断面 | _ | | _ | 19.1 | 18.5 | 19.8 |
| | | 269 m² | (築83年) | 九12-C3 | 屋内 | 45.0 | 20.2 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 11.6 | 10.9 | 9.62 |
| 九13 | 工学部本館 | RC | 昭和 5年 | 九13-C1 | 屋内 | 51.0 | 30.7 | 仕上界面 | 屋内 | 28.5 | 15.1 | 23.8 | 23.1 | |
| | | 5F/B1 | | 九13-C2 | 屋内 | 全断面中性化 | 63.7 | 仕上界面 | 屋内 | 全断面中性化 | 42.3 | 23.0 | 21.9 | 21.3 |
| | | 1,324 m ² | (築82年) | 九13-C3 | 屋内 | 26.5 | 11.8 | 仕上界面 | 屋内 | 52.0 | 43.2 | 19.4 | 18.8 | 2.22 |
| 九14 | 超伝導システム科学 | RC | 昭和 6年 | 九14-C1 | 屋内 | 97.0 | 86.4 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 14.7 | 14.4 | |
| | 研究センター | 2F | | 九14-C2 | 屋内 | 120.0 | 108.7 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 14.5 | 14.1 | 14.5 |
| | | 578 m² | (築81年) | 九14-C3 | 屋内 | 78.5 | 30.3 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 15.4 | 14.9 | 0.40 |
| 九17 | 工学部高温度化学 | RC | 昭和 7年 | 九17-C1 | 屋内 | 68.0 | 64.4 | 仕上界面 | 屋内 | 45.5 | 39.6 | 21.9 | 21.0 | |
| | 教室 | 1F | | 九17-C2 | 屋内 | 84.0 | 52.7 | 躯体断面 | _ | _ | - | 23.4 | 21.8 | 25.9 |
| | | 278 m² | (築80年) | 九17-C3 | 屋内 | 34.5 | 27.1 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 36.2 | 34.8 | 7.75 |
| 九20 | 記録資料館 | RC | 昭和12年 | 九20-C1 | 屋内 | 23.0 | 9.1 | 仕上界面 | _ | _ | _ | 25.2 | 24.2 | |
| | | 2F | | 九20-C2 | 屋内 | 55.0 | 43.7 | 躯体断面 | 屋内 | 47.0 | 38.4 | 21.6 | 21.0 | 23.2 |
| | | 649 m² | (築75年) | 九20-C3 | 屋内 | 49.0 | 12.6 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 25.9 | 24.3 | 1.88 |
| 九21 | 農学部六号館 | RC | 昭和13年 | 九21-C1 | 屋内 | 19.0 | 8.1 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 33.3 | 31.0 | |
| | | 3F/B1 | | 九21-C2 | 屋内 | 12.0 | 8.0 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 18.7 | 18.1 | 26.2 |
| | | 3,375 m ² | (築74年) | | | 7.0 | 2.1 | 躯体断面 | - | _ | _ | 31.1 | 29.5 | 7.05 |
| 九22 | 航空工学教室 | RC | 昭和14年 | 九22-C1 | 屋内 | 45.0 | 39.9 | 仕上界面 | 屋内 | 41.0 | 24.7 | 25.7 | 24.7 | |
| | | 6F | | 九22-C2 | 屋内 | 38.5 | 14.5 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 17.3 | 17.0 | 21.9 |
| | | 1,845 m ² | (築73年) | 九22-C3 | 屋内 | 11.5 | 5.9 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 25.6 | 24.1 | 4.28 |
| 九23 | 原子核実験室 | RC | 昭和19年 | 九23-C1 | 屋内 | 7.5 | 3.4 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 27.0 | 27.0 | |
| | | 3F | | 九23-C2 | 屋内 | 13.0 | 5.9 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 44.4 | 42.6 | 31.0 |
| | | 2,157 m ² | (築68年) | 九23-C3 | 屋内 | 17.0 | 7.0 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 23.8 | 23.3 | 10.20 |
| 九25 | 建築学教室 | RC | 昭和35年 | 九25-C1 | 屋内 | 5.5 | 1.4 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 22.6 | 22.1 | |
| | | 3F | | 九25-C2 | 屋内 | 3.5 | 0.8 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 18.3 | 17.8 | 28.1 |
| | | 2,858 m ² | (築52年) | 九25-C3 | 屋内 | 0.5 | 0.0 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 45.2 | 44.3 | 14.2 |
| 九26 | 記念講堂 | RC | 昭和42年 | 九26-C1 | 屋内 | 5.0 | 1.7 | 躯体断面 | _ | _ | - | 26.7 | 25.6 | |
| | | 4F/B1 | | 九26-C2 | 屋内 | 7.0 | 3.4 | 躯体断面 | _ | _ | _ | 31.2 | 30.9 | 26.8 |
| | | 6,157m ² | (築45年) | 九26-C3 | 屋内 | 39.0 | 29.2 | 貫通 | 屋内 | 45.0 | 40.0 | 25.6 | 23.8 | 3.69 |

【九4 道路工学実験室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料1,2**に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタル、プラスターに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全6箇所の最大中性化深さは、現行のJASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 21.3 N/mm² (標準偏差 6.69 N/mm²)

コンクリートの中性化深さ測定 圧縮強度試験 棟名 道路工学実験室 筒 元 圧縮強度(N/mm²) 中性化深さ(mm) 中性化深さ(mm) 密度 到達 建設年 部材 最大 平均 最大 環境 (kg/m^3) 補正後 補正前 仕上仕様 全断面中性化 全断面中性化 九4-C1 貫通 2,280 16.8 15.5 モルタル+プラスター+塗装 仕上 辟 2,310 31.8 28.6 T 14 九4-C2 屋内 界面 21.3 全断而由性// 九4-C3 2,240 22.4 19.7

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

※ 「コンクリートの中性化深さ」における**赤色数値**は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値-平均値)^2の和}{(データ数-1)}}$$

<考察>

中性化が鉄筋の位置を越えて全断面にわたっているため、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、当建築物は周囲を高木に覆われ、蔦が絡まって外壁を保護して強度を保っていると考えられる。 目立ったひび割れや露筋などの劣化は認められなかった。

注(1) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が 13.5N/mm² を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を 13.5N/mm² とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

【九5 保存図書館】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料1**,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタル、プラスターに吹付タイル」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全3箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達し ていた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 11.1 N/mm² (標準偏差 0.61 N/mm²)

| | 表一3.1 コングリートコアを用いた各種試験結果 | | | | | | | | | | | | | | |
|------|--------------------------|----|---------------|----------------|-------------------------|----------|---------|-----|------|--------|------------|----------------------|-------------|------|--|
| 棟名 | | 保有 | 平図書館 | コンケリートの中性化深さ測定 | | | | | | | | 圧縮強度試験 | | | |
| | | | | | 筒 元 | | | 筒 先 | | | | 压缩 | 圧縮強度(N/mm²) | | |
| | | | /II. 3.b /.l. | | 中性化剂 | 深さ(mm) | プロキ | | 中性化剂 | 架さ(mm) | 見掛け 密度 | /工作/法/支(14/ 111111 / | | | |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均値 | |
| | | | ш. | | 仕上 | 仕様 | 122,122 | | 仕上 | 仕様 | . 0, , | THILLING | 1111111 | 標準偏差 | |
| | | 壁 | 壁 九5-C1 | 屋内 | 122.5 | | Mark | | _ | _ | 2,190 | 12.3 | 11.8 | | |
| | | | | | モルタル+プ [°] ラスタ | 7-+吹付タイル | 断面 | | _ | _ | 2,100 | | | | |
| Т 14 | 1階 | 壁 | 九5-C2 | 屋内 | 83.5 | | Mari - | _ | _ | _ | 2,230 | 11.0 | 10.7 | | |
| | | | | | モルタル+プ [°] ラスタ | 7+吹付タイル | 四田 | | _ | _ | | | | 11.1 | |
| | | 壁 | 九5-C3 | 屋内 | 62.0 | 55.5 | | _ | _ | _ | 2,260 | 10.9 | 10.8 | | |
| | | | 型 /13-03 | | モルタル+プ [°] ラスタ | 7-+吹付タイル | 断面 | | _ | | 2,200 | 10.5 | 10.0 | 0.61 | |

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

※ 「コンクリートの中性化深さ」における**赤色数値**は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は低いと言える。(¹)

ただし、外壁等にひび割れや剥落などの目立った劣化は確認できなかった。

注(1) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が 13.5N/mm² を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を 13.5N/mm² とした。

【九8 旧応力研生産研本館】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料1**,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタル、プラスターに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全3箇所のうち、2箇所の最大中性化深さは、現行のJASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 9.50 N/mm² (標準偏差 1.28 N/mm²)

| | | | 表- | -3.1 | コンク | リート | コア | を用り | で各種 | [試験 新 | 果 | | | | |
|-------|-------|-------|-----------|-------|-----------------------|----------|-------|------|--------|--------------|-------------|--------------------|-------------|------------------|--|
| 棟名 | IE | 日応力研 | T生産研本館 | | コンクリートの中性化深さ測定 | | | | | | | 圧縮強度試験 | | | |
| | | | | 筒 元 | | | 筒 先 | | | | 日刊小 | F # 34 F (3 T / 2) | | / ²) | |
| | | 44.44 | | 中性化剂 | 深さ(mm) | ないよ | | 中性化剂 | 架さ(mm) | 見掛け 密度 | 圧縮強度(N/mm²) | | | | |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均値 | |
| | | | ш 🦪 | | 仕上 | 仕様 | | | 仕上 | 仕様 | (8, / | 1111 77 1011 | 11111111111 | 標準偏差 | |
| | | 壁 | 九8-C1 | 屋内 | 65.0 | 40.3 | | | _ | _ | 2,350 | 10.9 10. | 10.9 | | |
| | | | 760 01 | | モルタル+プ [°] ラ | スター+塗装 | 断面 | | - | | 2,000 | | 10.5 | | |
| T 14 | 1階 | 壁 | 九8-C2 | 屋内 | 30.0 | 23.2 | 47-11 | _ | _ | _ | 2,260 | 8.4 | 8.4 | | |
| ' ' ' | 11.11 | 4 | 740 02 | /王1-7 | モルタル+プ [°] ラ | スター+塗装 | 断面 | | - | _ | 2,200 | 0.1 | 0.1 | 9.5 | |
| | | 壁 | 九8-C3 | 屋内 | 18.5 | 12.5 | 47-17 | | _ | _ | 2,350 | 9.4 | 9.2 | | |
| 4 4 | | 345 | 壁 ルるーし3 | | - 1 H 1 0- | 41/AC 44 | 無面 | | | | 2,550 | 4,550 9.4 | | 4 00 | |

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

※「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は一部のもので現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度も低いと言える。(¹)

本建築物の外壁は左官仕上げで、数ヶ所剥落がみられた。

注(1) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修: 国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

【九9 応用物理化学機能教室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料**1,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタル、プラスターに吹付タイル」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全4箇所の最大中性化深さは、現行のJASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 12.4 N/mm² (標準偏差 1.68 N/mm²)

| | | | ā | 長一3. | 1 コン | クリート | ・コア | <u>を用し</u> | ハた各種語 | 试験結果 | Ĺ | | | |
|-----|-----------|-----|-----------|----------------|-------------------------|----------|-------|------------|--------|-------------|----------------------|-------------|---------|------|
| 棟名 | 応 | 用物質 | 化学機能教室 | コンクリートの中性化深さ測定 | | | | | | | 圧縮強度試験 | | | |
| | | | | | 筒 元 | | | 筒 先 | | | | г. | 常投 库/N⊺ | /2\ |
| | 11,45,11, | | 44.54.44 | | 中性化深 | ださ(mm) | たい土 | | 中性化深 | だ(mm) | 見掛け 密度 | 圧縮強度(N/mm²) | | |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m ³) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | | ш 7 | | 仕上作 | 士様 | | | 仕上作 | 士様 | (118/ 111 / | 州北州 | 加亚区 | 標準偏差 | |
| | | 壁 | 九9-C1 | 屋内 | 全断面中性化 | _ | 仕上 | 屋内 | 全断面中性化 | _ | 2,320 | 14.9 | 14.3 | |
| | | # | | | モルタル+プ [°] ラスタ | +吹付タイル | 層間 | 層間 | _ | | 2,320 | | | |
| 5.0 | 1階 | 量 壁 | 九9-C2 | 屋内 | 56.0 | 45.8 | 躯体 | | _ | _ | 2,340 | 11.6 | 11.3 | |
| S 2 | 工匠 | | 769-62 | 座內 | モルタル+プ [°] ラスタ | ー+吹付タイル | 断面 | | _ | | 2,340 | 11.6 | | 12.4 |
| | | 日本 | * +0 00 | 屋内 | 65.0 | 51.1 | 躯体 | _ | _ | _ | 9.270 | 11 5 | 11.5 | |
| | | 壁 | 九9-C3 | 座門 | エルタル+フ°ラフタ | +15を付なるル | 断面 | _ | | | 2,370 | 11.5 | | 1 60 |

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

※ 「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化は鉄筋の位置を越えて全断面にわたっている、あるいは、平均値が現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は低いと言える。(1)

なお、本建築物の外装は全面タイル張りであるが剥離などの劣化は認められなかった。

注(1) 2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

【九10 旧文学部心理学教室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び添付資料1,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルに塗装」、「モルタル、プラスターに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全4箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: **24.4 N/mm² (標準偏差 7.37 N/mm²)**

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | | | 12 | ζ υ. | 1 | ' / | C / 14 4 | 70つ1里でる人 | 1215 | | | |
|-----|-----|------|-----------|-------|----------------------------|--------|----------|-----------|-------------|------------|------------|--------|
| 棟名 | IE | 日文学部 | 『心理学教室 | | コンクリー | 小の中性化 | 深さ測だ | 定 | | 圧縮弛 | 鱼度試験 | |
| | | | | | 筒 元 | | | 筒 先 | | Г. | 縮強度(N | /2\ |
| | | | 44.44 | | 中性化深さ(mm | 70本 | | 中性化深さ(mm) | ■ 見掛け 密度 |)土市 | 帕短及(IV) | / mm) |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | | | | | 仕上仕様 | | | 仕上仕様 | | 1111111111 | Im III. IX | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九10-C1 | 屋内 | 77.5 49 | 9.4 躯体 | _ | | 2,290 | 16.8 | 16.0 | |
| | | 4 | 7410 01 | /王17 | モルタル+塗装 | 断面 | | _ | 2,230 | 10.0 | 10.0 | |
| S 2 | 1階 | 壁 | 九10-C2 | 屋内 | 全断面中性化 4 | 1.5 躯体 | _ | | 2,260 | 31.8 | 29.9 | |
| | TME | # | 7010 02 | 王1.1 | モルタル+塗装 | 断面 | | _ | 2,200 | 31.0 | 25.5 | 24.4 |
| | | 壁 | 九10-C3 | 屋内 | 全断面中性化 - | 仕上 | 屋内 | 全断面中性化 一 | 2,220 | 29.3 | 27.2 | |
| | | 4. | 7010 03 | /±1/1 | モルタル+プ [°] ラスター+塗 | 装界面 | Æ 1 | | 2,220 | 49.5 | 21.2 | 7.37 |

※ 「コンクリートの中性化深さ」における**赤色数値**は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の \pi}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化は鉄筋の位置を越えて全断面にわたっている、あるいは、平均値が現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、大きな劣化は目視では確認されなかった。

注(1) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修: 国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

【九12 留学生センター分室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料1**,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルに塗装」、「モルタル」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全3箇所のうち、2箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 19.8 N/mm² (標準偏差 9.62 N/mm²)

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| S 4 I階 壁 九12-C1 屋内 9.5 2.4 躯体 断面 - - - - 2,380 32.6 30.0 S 4 I階 壁 九12-C2 屋内 31.0 18.5 躯体 | _ | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|---|-----|--------|------|---------|------|------|---------|-------|-----|------|--------|-------------|------|-----------------|------|
| 建設年 階 供試体 番号 中性化深さ(mm) 最大 到達 位置 中性化深さ(mm) 最大 見掛け 密度 (kg/m³) 圧縮強度(N/mm²) 日本 日本 | | 棟名 | 日 | 習学生も | アンター分室 | | | コンクリートの | 中性化 | 深さ測 | 定 | | | 圧縮引 | 鱼度試験 | |
| ### 200 | | | | | | | 筒 元 | | | 僧 | i 先 | | | Г. | 索按 庄/ Ντ | /2) |
| 建設年 階 部材 番号 環境 最大 平均 位置 環境 最大 平均値標準偏差 仕上仕様 仕上仕様 位置 環境 最大 平均値標準偏差 住上仕様 大12-C1 屋内 9.5 2.4 躯体 | | | | | 44.44 | | 中性化剂 | 架さ(mm) | カルキ | | 中性化剂 | 架さ(mm) | |)土市 | 帕畑及(IN/ | mm) |
| 佐上仕様 佐上仕様 佐上仕様 株準偏差 株準偏差 株 株 株 株 株 株 株 株 株 | 菱 | 建設年 | 階 | 部材 | | 環境 | 最大 | 平均 | | 環境 | 最大 | 平均 | | 補正前 | 埔正谷 | |
| S 4 I階 壁 九12-C1 座内 モルタル+塗装 断面 - - 2,380 32.0 30.0 I階 壁 九12-C2 屋内 31.0 18.5 躯体 - - - - 2,240 19.1 18.5 日本のカー・塗装 野面 - - - - - - - 2,300 11.6 10.9 | | | | | B ? | | 仕上 | 仕様 | 11111 | | 仕上 | .仕様 | (118/ 111 / | 州北則 | 州北阪 | 標準偏差 |
| S 4 | | | | 昆玄 | ± 19_C1 | 昆内 | 9.5 | 2.4 | 躯体 | | _ | _ | 2 380 | 22.6 | 30.0 | |
| S 4 Tright 全球 断面 - 2,240 19.1 18.5 19.8 19.8 接 | | | | Ħ | 7L12-C1 | 座[1] | モルタル | +塗装 | 断面 | | _ | _ | 2,300 | 32.0 | 30.0 | |
| せんタル・塗装 断面 - 19.8 壁 九12-C3 屋内 45.0 20.2 躯体 2.300 11.6 10.9 | | S 1 | a 1766 | 日立 | ±10 C0 | T T | 31.0 | 18.5 | 躯体 | | _ | _ | 9 940 | 10.1 | 10 E | |
| | | 54 | TI促 | 聖 | 7L12-C2 | 座內 | モルタル | +塗装 | 断面 | _ | - | | 2,240 | 19.1 | 16.5 | 19.8 |
| - 「「「「」」 「「」 「「」 「「」 「」 「」 | | | | 日本 | ±10 00 | E.4. | 45.0 | 20.2 | 躯体 | | _ | _ | 0.200 | 11.0 | 10.0 | |
| 1 | | | | 壁 | Л12—C3 | 座内 | | | 断面 | _ | - | _ | 2,300 | 11.6 | 10.9 | 9.62 |

※ 「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していないことから、中性化は鉄筋位置まで進行しておらず、鉄筋の発錆の可能性は低いと考えられる。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、本建築物は周囲を樹木で覆われ、外壁は厚塗の塗膜材で仕上げられていることから躯体が保護 されて良好な結果が得られたものと思われる。

注(1) 「2001年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

【九13 工学部本館】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料**1,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタル、プラスターに塗装」、「モルタルに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全6箇所のうち、<u>4箇所の最大中性化深さは、現行のJASS 5 に示される最小かぶり厚さ</u>の基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 21.3 N/mm² (標準偏差 2.22 N/mm²)

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | | | 1 | ζ – υ. | 1 4/2/ | • 4 / | G / 11 | / ハニコー | アマウステロノ | | | | |
|-----|-----|----|--------------|--------|--------------------|-------|--------|--------|---------|----------------------|-----------|----------|--------------------|
| 棟名 | | 工学 | 半部本館 | | コンクリートの | の中性化 | 上深さ測 | 定 | | | 圧縮弛 | 鱼度試験 | |
| | | | | | 筒 元 | | | 筒 先 | | B #1)7 | 压纸 | 縮強度(N | /mm ²) |
| | | | /II. 3.b./L. | | 中性化深さ(mm) | たい± | | 中性化深 | (mm) | 見掛け 密度 |)/ | 阳四、发(11) | / IIIIII <i>)</i> |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 平均 | 到達位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m ³) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | | | ш | | 仕上仕様 | | | 仕上位 | 士様 | (0, / | 7H1 JL HI | 州北区 | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九13-C1 | 屋内 | 51.0 30.7 | 仕上 | 屋内 | 28.5 | 15.1 | 2,360 | 23.8 | 23.1 | |
| | | A | 7013 C1 | /±1.1 | モルタル+プラスター+塗装 | 界面 | /±.r 1 | _ | | 2,500 | 25.0 | 25.1 | |
| S 5 | 1階 | 壁 | 九13-C2 | 屋内 | 全断面中性化 63.7 | 仕上 | 屋内 | 全断面中性化 | 42.3 | 2,360 | 23.0 | 21.9 | |
| 3.0 | 工戶日 | Ħ | 7013 C2 | Ær: | モルタル+プラスター+塗装 | 界面 | Ær1 | _ | | 2,300 | 23.0 | 21.5 | 21.3 |
| | | 壁 | 九13-C3 | 屋内 | 26.5 11.8 | | 屋内 | 52.0 | 43.2 | 2,350 | 19.4 | 18.8 | |
| | | Ħ | 7610-03 | ÆY1 | モルタル+塗装 | 界面 | ÆP1 | | | 2,300 | 19.4 | 10.0 | 2.22 |

※ 「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の \pi}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化は鉄筋の位置を越えて全断面にわたっている、あるいは、平均値が現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、本建築物は全面タイルであるが強度に影響を与えるような劣化は認められなかった。

注(1) 「2001年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修: 国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

【九14 超伝導システム科学研究センター】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料1**,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタル、プラスターに吹付タイル」、「モルタルに吹付タイル」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全3箇所の最大中性化深さは、現行のJASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 14.5 N/mm² (標準偏差 0.40 N/mm²)

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | | | | 24 | U. I | . * / | | | | | マベンヘハロン | | | | |
|---|-----|-----|------|--------------------|------|------------------------|----------|----------|------|------|---------|------------|---------|-------------|-------|
| | 棟名 | 超伝導 | システム | 科学研究センター | | | コンクリートの「 | 中性化剂 | ださ測定 | | | | 圧縮引 | 鱼度試験 | |
| | | | | | | 筒 元 | | | 曾 | i 先 | | | E | ₩±34 ±±/3 τ | / 2\ |
| | | | | -1.4 <i>-</i> -11. | | 中性化剂 | 架さ(mm) | カルキ | | 中性化剂 | 架さ(mm) | 見掛け 密度 | J土: 前 | 縮強度(N | /mm) |
| 建 | 設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | | | | ш 🗸 | | 仕上 | 仕様 | | | 仕上 | 仕様 | (8, , | 7冊 北. 刊 | 州北汉 | 標準偏差 |
| | | | 柱 | 九14-C1 | 屋内 | 97.0 | 86.4 | | _ | _ | _ | 2,280 | 14.7 | 14.4 | |
| | | | 11. | 7014 01 | Ær 1 | モルタル+プ [°] ラス | ター+吹付タイル | 断面 | | - | | 2,200 | 17.1 | 17.7 | |
| | S 6 | 1階 | 壁 | 九14-C2 | 屋内 | 120.0 | 108.7 | 躯体 | _ | _ | _ | 2,310 | 14.5 | 14.1 | |
| ` | 3 0 | 114 | H. | 7014 02 | Ær: | モルタル+プ [°] ラス | ター+吹付タイル | 断面 | | _ | _ | 2,310 | 14.0 | 14.1 | 14.5 |
| | | | 柱 | 九14-C3 | 屋内 | 78.5 | 30.3 | | | _ | _ | 2,280 | 15.4 | 14.9 | |
| | | | Ϯ土 | 7614-03 | 座四 | モルタル+児 | 欠付タイル | 断面 | | - | _ | 2,200 | 10.4 | 14.9 | 0.40 |

※ 「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

本建築物は周囲を樹木に覆われ、外壁は全面タイルに保護されているため一定の強度を保持している と思われる。ただし、タイルの剥落の恐れのあるヶ所が3ヶ所認められた。その他曲面部分のタイルに も浮きが多くみられたのが懸念される。

注(1) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

【九17 工学部高温度化学実験室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料**1,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全4箇所の最大中性化深さは、現行のJASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 25.9 N/mm² (標準偏差 7.75 N/mm²)

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | | | | J. I | | | | C / 13 · | 7 U I | 世 14/4000/14 | 1715 | | | |
|-----|-----|------|-----------|-------|------|---------|----------|----------|-------|--------------|------------|------|-----------|-------|
| 棟名 | 工学 | 半部高温 | 且度化学実験室 | | | コンクリートの | 中性化 | 深さ測 | 定 | | | 圧縮弛 | 鱼度試験 | |
| | | | | | 筒 元 | | | 信 | | ポン/) | 見掛け | 圧約 | 縮強度(N | /mm²) |
| | | | 44.44 | | 中性化 | 深さ(mm) | たいま | | 中性化剂 | 未ら(mm) | 密度 | | | |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | | | | | 仕上 | 仕様 | | | 仕上 | 仕様 | | 1111 | 111111111 | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九17-C1 | 屋内 | 68.0 | 64.4 | 仕上 | 屋内 | 45.5 | 39.6 | 2,300 | 21.9 | 21.0 | |
| | | | 7411 01 | /王1 7 | モルタル | +塗装 | 界面 | /王1 3 | _ | - | 2,000 | 21.0 | 21.0 | |
| S 7 | 1階 | 壁 | 九17-C2 | 屋内 | 84.0 | 52.7 | 躯体 | _ | _ | _ | 2,310 | 23.4 | 21.8 | |
| | 110 | | 7011 02 | /王1 3 | モルタル | +塗装 | 断面 | | _ | - | 2,010 | 20.1 | 21.0 | 25.9 |
| | | 壁 | 九17-C3 | 屋内 | 34.5 | 27.1 | 躯体 | _ | - | _ | 2,380 | 36.2 | 34.8 | |
| | | 土 | 7011 00 | /土/1 | モルタル | +塗装 | 断面 | | _ | - | 2,300 | 30.2 | 34.0 | 7.75 |

※ 「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は一部のもので現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、本建築物の外装は全面タイル張りであるが剥落等の劣化は認められなかった。

注(1) 「2001年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修: 国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

【九20 記録資料館】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料1**,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルに塗装」、「モルタルに吹付タイル」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全4箇所のうち、<u>3箇所の最大中性化深さは、現行のJASS 5 に示される最小かぶり厚さ</u>の基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 23.2 N/mm² (標準偏差 1.88 N/mm²)

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| 棟名 | | 記録 | 資料館 | | | コンクリートの | 中性化 | 深さ測 | 定 | | | 圧縮強 | 鱼度試験 | |
|------|------|----|---------|-------|-------|---------|-----|-----|-----------------|----------|------------|------------|---|--------------------|
| | | | | | 筒 元 | | | f | 奇 先 | mt 1 /) | 見掛け | 圧緩 | 縮強度(N | /mm ²) |
| 1 1 | | | 供試体 | | 中性化液 | 架さ(mm) | 到達 | | 中性化剂 | ださ(mm) | 密度 | , | 111111111111111111111111111111111111111 | |
| 建設年 | 階 | 部材 | 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均值 |
| | | | ш у | | 仕上 | 仕様 | | | 仕上 [,] | 仕様 | . 0, , | 1111111111 | 間止区 | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九20-C1 | 屋内 | 23.0 | 9.1 | 躯体 | _ | _ | _ | 2,360 | 25.2 | 24.2 | |
| | | | 7020 01 | /E1 3 | モルタル | +塗装 | 断面 | | | - | 2,000 | 20.2 | 21.2 | |
| S 12 | 1階 | 壁 | 九20-C2 | 屋内 | 55.0 | 43.7 | 仕上 | 屋内 | 47.0 | 38.4 | 2,320 | 21.6 | 21.0 | |
| 3 12 | TIPE | 45 | 7020 02 | 庄ri | モルタル+ | 欠付タイル | 界面 | 座r1 | | - | 2,320 | 21.0 | 21.0 | 23.2 |
| | | 壁 | 九20-C3 | 屋内 | 49.0 | 12.6 | 躯体 | | _ | _ | 9 220 | 25.9 | 24.3 | |
| | | 堂 | 7620-C3 | 座内 | モルタル | +塗装 | 断面 | | | - | 2,330 | ∠5.9 | 24.3 | 1.88 |

※ 「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は一部のもので現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、建築物本体に大きな劣化は認められなかったが、庇軒天にひび割れが少なからず見られた。

注(¹) 「2001年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修: 国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

【九21 農学部六号館】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び添付資料1,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルにリシン」、「モルタルプラスターに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全3箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していなかった。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: <u>26.2 N/mm² (標準偏差 7.05 N/mm²)</u>

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | | | | | | | | | · · · | | | |
|------|------|----|-----------|--------|-----------------|-------|-------|-----------|---------------|-------------|--------------|--------------------|
| 棟名 | | 農学 | 部六号館 | | コンクリートの | の中性化 | / 深さ測 | 定 | | 圧縮引 | 鱼度試験 | |
| | | | | | 筒 元 | | 僧 | 5 先 | E #107 | 压 | 縮強度(N | /mm ²) |
| | | | m → b n . | | 中性化深さ(mm) | | | 中性化深さ(mm) | 見掛け 密度 |)/ | 阳J出/文(IN) | , 111111) |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 平均 | 電度 (kg/m³) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | | | | | 仕上仕様 | | | 仕上仕様 | | 11117771111 | 111111111111 | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九21-C1 | 屋内 | 19.0 8.1 | 躯体 | _ | | 2,340 | 33.3 | 31.0 | |
| | | | 7021 01 | / | モルタル+リシン | 断面 | | _ | 2,010 | 00.0 | 01.0 | |
| S 13 | 1階 | 壁 | 九21-C2 | 屋内 | 12.0 8.0 | | _ | | 2,200 | 18.7 | 18.1 | |
| 5 15 | TIPE | 42 | 7021 02 | /±.r 1 | モルタル+リシン | 断面 | | | 2,200 | 10.7 | 10.1 | 26.2 |
| | | 壁 | 九21-C3 | 屋内 | 7.0 2.1 | 躯体 | | | 2,340 | 31.1 | 29.5 | |
| | | ≖ | 7621-C3 | 座門 | モルタル+プラスター+塗装 | 断面 | | _ | 2,340 | 31.1 | 29.5 | 7.05 |

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の \pi}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していないことから、中性化は鉄筋位置まで進行しておらず、鉄筋の発錆の可能性は低いと考えられる。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、本建築物には大きなひび割れ等の劣化は認められないものの、外装モルタルリシン面・庇軒天 に細幅のひび割れが比較的多く見られた。

注(1) 「2001年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土 交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が 13.5N/mm² を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を 13.5N/mm² とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

【九22 航空工学教室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料1**,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタル、プラスターに塗装」、「モルタルに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全4箇所のうち、3箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 21.9 N/mm² (標準偏差 4.28 N/mm²)

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | 棟名 | | 航空 | 工学教室 | | | コンクリートの | 中性化 | 深さ測気 | 宦 | | | 圧縮引 | 鱼度試験 | |
|---|------|-----|----|-------------|-------|-----------------------|---------|-------|-------|------|--------|----------------------|------|--------|------------------|
| L | | | | | | 筒 元 | 1 | | 僧 | | | | IT: | 縮強度(N | / ²) |
| ſ | | | | /II-3-b / I | | 中性化剂 | 架さ(mm) | オルキ | | 中性化剂 | 架さ(mm) | 見掛け 密度 |)土; | 帕妞及(N) | mm) |
| | 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m ³) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| L | | | | H ? | | 仕上 | .仕様 | | | 仕上 | 仕様 | (118/ 111 / | 無止則 | 州止妆 | 標準偏差 |
| ſ | | | 壁 | 九22-C1 | 屋内 | 45.0 | 39.9 | | 屋内 | 41.0 | 24.7 | 2,360 | 25.7 | 24.7 | |
| | | | 42 | 7022 01 | Ær 1 | モルタル+プ [°] ラ | スター+塗装 | 界面 | /±1.1 | _ | _ | 2,500 | 40.1 | 27.1 | |
| ı | S 14 | 1階 | 壁 | 九22-C2 | 屋内 | 38.5 | 14.5 | 躯体 | | _ | _ | 2,320 | 17.3 | 17.0 | |
| ı | 5 14 | 工戶白 | 垩 | 7622-02 |)至[1] | モルタル | +塗装 | 断面 | | _ | _ | 2,320 | 17.3 | 17.0 | 21.9 |
| | | | 壁 | 九22-C3 | 屋内 | 11.5 | 5.9 | 躯体 | | _ | _ | 2,340 | 25.6 | 24.1 | |
| | | | 坐 | 7622-03 | 座門 | モルタル | +塗装 | 断面 | _ | - | _ | 2,340 | 25.6 | 24.1 | 4.28 |

※ 「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は一部のもので現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、本建築物の外壁はタールと他塗装とが斑な表情になって一見劣化が激しいように思えるものの、 大きなひび割れや爆裂は認められなかった。

注(¹) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修: 国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

【九23 原子核実験室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試 験結果を表-3.1及び添付資料1,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルに塗装」、「モルタル」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全3箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達し ていなかった。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 31.0 N/mm² (標準偏差 10.2 N/mm²)

表-3.1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | | | 24 | ე. 1 | 47791 | | C / 13 · | AC D JET MOV | ハロント | | | |
|------|------|-----|---|-------|-----------------|----------|----------|--------------|------------|-----------|-------------|--------------------|
| 棟名 | | 原子 | 核実験室 | | コンクリートの | 中性化 | /深さ測 | 定 | | 圧縮引 | 鱼度試験 | |
| | Щ | | | | 筒 元 | | 僧 | | 見掛け | 圧 | 縮強度(N | /mm ²) |
| 1 | | | 供試体 | | 中性化深さ(mm) | 到達 | | 中性化深さ(mm) | 密度 | | | |
| 建設年 | 階 | 部材 | 番号 | 環境 | 最大 平均 | 位置 | 環境 | 最大 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均值 |
| 1 | | | | | 仕上仕様 | | | 仕上仕様 | | 111121213 | 111,333 [5] | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九23-C1 | 屋内 | 7.5 3.4 | 躯体 断面 | _ | | 2,320 | 27.0 | 27.0 | |
| 1 | | | | | モルタル+塗装 | 的田 | | _ | | | | |
| S 19 | 1階 | 壁 | 九23-C2 | 屋内 | 13.0 5.9 | | _ | _ - | 2,330 | 44.4 | 42.6 | |
| | -111 | | , | / | モルタル+塗装 | 断面 | | _ | 1 2,000 | 11.1 | 12.0 | 31.0 |
| | | 壁 | 九23-C3 | 屋内 | 17.0 7.0 | | _ | - - | 2,300 | 23.8 | 23.3 | |
| | | -#- | 7020 00 | 一生1.1 | モルタル | 断面 | | _ | 2,500 | 20.0 | 20.0 | 10.20 |

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は、現行の IASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していないことから、中 性化は鉄筋位置まで進行しておらず、鉄筋の発錆の可能性は低いと考えられる。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、本建築物は施設の性格から壁厚が厚く造られ強度が確保されているものと思われる。ただし、 室内の梁・スラブ下にクリープ現象によるひび割れが少なからず見られる。

注(1) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修: 国土交通省住宅局建築指導課、発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が 13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対 象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボー ダーライン値を 13.5N/mm²とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

【九25 建築学教室】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試 験結果を表-3.1及び**添付資料1,2**に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルに塗装」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全3箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達し ていなかった。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 28.1 N/mm² (標準偏差 14.2 N/mm²)

| | | | 表- | -3.1 | コンクリー | トコア | を用い | ハた各種 | 重試験 | 結果 | | | |
|------|----|----|-------------|------|------------------------|----------|------|------|--------|------------|------|-------------|--------------------|
| 棟名 | | 建築 | 美学教室 | | コンクリートの | の中性化 | (深さ測 | 定 | | | 圧縮強 | 強度試験 | |
| | | | 1 | | 筒 元 | | 僧 | | | 見掛け | 圧約 | 宿強度(N | /mm ²) |
| 1 | | | 41.45.44 | | 中性化深さ(mm) | 到達 | | 中性化剂 | 栄さ(mm) | 密度 | ,, | 110-15-0-17 | , |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大平均 | 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | (kg/m^3) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | | | | | 仕上仕様 | | | 仕上 | 仕様 | | | | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九25-C1 | 屋内 | 5.5 1.4 モルタル+塗装 | 躯体 断面 | _ | | | 2,220 | 22.6 | 22.1 | |
| S 35 | 1階 | 壁 | 九25-C2 | 屋内 | 3.5 0.8 モルタル+塗装 | 躯体 断面 | _ | | _ | 2,240 | 18.3 | 17.8 | 28.1 |
| | | 壁 | 九25-C3 | 屋内 | 0.5 0.0 | 躯体 断面 | - | _ | _ | 2,310 | 45.2 | 44.3 | 14.0 |

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の和}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していないことから、中 性化は鉄筋位置まで進行しておらず、鉄筋の発錆の可能性は低いと考えられる。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

なお、本建築物は戦後の施設であり、戦前の施設に比べて良好な状態にあり、事実1階構造体におい ての劣化は確認できない。ただし、庇・バルコニーの軒天には多くのひび割れが見られる。

注(1) 「2001 年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説、監修: 国土交通省住宅局建築指導課、発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が 13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対 象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボー ダーライン値を 13.5N/mm²とした。

【九26 記念講堂】

<コンクリートコアを用いた各種試験結果>

採取箇所において確認できた仕上げ種類は以下の通りであった。コンクリートコアを用いた各種試験結果を表-3.1及び**添付資料**1,2に示し、以下、項目毎に記述する。

【屋内】:「モルタルに塗装」、「モルタルに吹付タイル」、「打放し」

(1) コンクリートの中性化深さ測定

調査箇所全 4 箇所のうち、2 箇所の最大中性化深さは、現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していた。

(2) コンクリートの圧縮強度試験

圧縮強度の平均値と標準偏差を以下に示す。

1階: 26.8 N/mm² (標準偏差 3.69 N/mm²)

表-3 1 コンクリートコアを用いた各種試験結果

| | | | 111 | -3. I | ユンク | <u>ر</u> | · / - | <u>a Wi</u> | 7 1/C1 11 1 | 里武腴 | <u> </u> | | | |
|------|--------|------|-----------|-------|--------------------|----------|-------------------|-------------|------------------------|--------|---------------|------|-------|--------------------|
| 棟名 | | 記 | 念講堂 | | コ) | ノクリートの |)中性化 | 深さ測 | 定 | | | 圧縮引 | 鱼度試験 | |
| | Щ | | | | 筒 元 中性化深 | +(| | 管 | | 架さ(mm) | 見掛け | 圧症 | 縮強度(N | /mm ²) |
| 建設年 | 階 | 部材 | 供試体 番号 | 環境 | 最大 | 平均 | 到達 位置 | 環境 | 最大 | 平均 | 密度 (kg/m³) | 補正前 | 補正後 | 平均値 |
| | Ш | | 田力 | | 仕上仕 | | 山山區 | | 仕上 | 仕様 | (NS/ III / | 佣止削 | 棚上仮 | 標準偏差 |
| | | 壁 | 九26-C1 | 屋内 | 5.0 モルタル+吹ィ | 1.7 | 躯体 断面 | _ | _ | _ | 2,280 | 26.7 | 25.6 | |
| 0.40 | a mule | n-te | 1.00.00 | | 7.0 | 3.4 | 躯体 | | _ | _ | 0.050 | 01.0 | 00.0 | |
| S 42 | 1階 | 壁 | 九26-C2 | 屋内 | モルタル+3 | | 断面 | _ | - | _ | 2,250 | 31.2 | 30.9 | 26.8 |
| | | 壁 | 九26-C3 | 屋内 | 39.0 | 29.2 | 貫通 | 屋内 | 45.0 | | 2,200 | 25.6 | 23.8 | |
| | | | | | 打放 | し | | | 打力 | 汝し | ĺ | | | 3.69 |

※「コンクリートの中性化深さ」における赤色数値は、「JASS 5」に示される最小かぶり厚さ「30mm以上」に達しているものを示す。

標準偏差はバラツキを表す指標で、数値が大きいほどバラツキが大きいと評価されます。 標準偏差は以下の式で求めます。

標準偏差 =
$$\sqrt{\frac{(測定値 - 平均値)^2 の \pi}{(データ数 - 1)}}$$

<考察>

中性化の平均値は一部のもので現行の JASS 5 に示される最小かぶり厚さの基準値に達していることから、中性化は鉄筋位置を越えて進行しており、鉄筋の発錆が懸念される。

また、圧縮強度は一定の強さは確保されていると言える。(1)

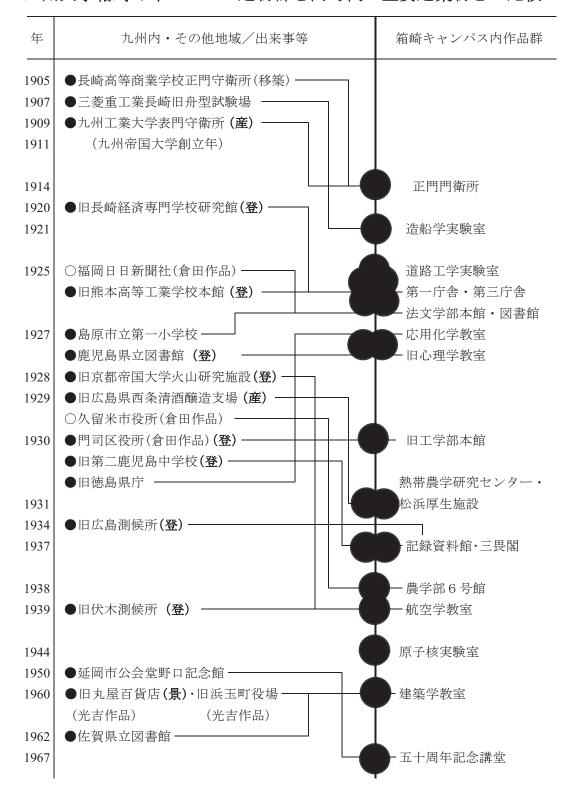
なお、本建築物は本調査対象の中で最も新しい施設であり、壁厚が厚いことでも良好な状態にあると 考えられる。ただし、コンクリート打放しで塗膜の撥水効果がすでに無いと考えられ、ひび割れや露 筋ヶ所が少なからず見られる。

注(1) 「2001年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準 同解説,監修:国土交通省住宅局建築指導課,発行:財団法人日本建築防災協会」によれば、「平均値が13.5N/mm²を下回る場合については、以下の対応が必要である。基本的に本診断基準の適用対象外になることに留意する。」と記載されており、本報告では強度が低いか否かと考えるボーダーライン値を13.5N/mm²とした。

コンクリート強度報告書(抜粋)

102

九州大学箱崎キャンパスの建物群と同時代の主要建築物との比較



●…現存 ○…撤去 ・次頁からの注記のない写真は市原所有・撮影によるもの。

(登) …国有形登録文化財 (産) …経産省近代化産業遺産 (景) …市景観賞



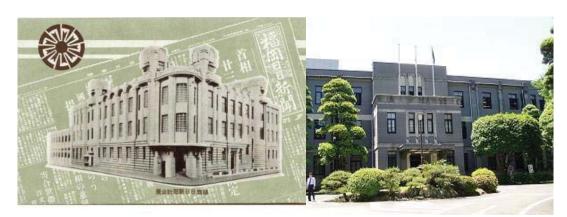
長崎高等商業学校正門守衛所

三菱重工業長崎旧舟型試験場



九州工業大学表門守衛所

長崎経済専門学校研究館



旧福岡日日新聞社(絵葉書より)

旧熊本高等工業学校本館



島原市立第一小学校

旧鹿児島県立図書館



旧京都帝国大学火山研究施設

旧広島県西条清酒醸造支場



旧久留米市役所(倉田作品·(c)久留米市)



旧門司市役所(倉田作品)



旧徳島県庁

第二鹿児島中学校



旧広島測候所

旧伏木測候所



延岡市公会堂野口記念館

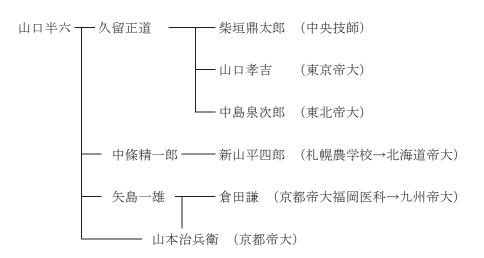
佐賀県立図書館



旧浜玉町役場(c)全日本行脚研究所

旧丸屋百貨店

2. 文部省営繕組織の系譜について (会計局建築掛 → 大臣官房建築課)



営繕組織としての文部省管内での建築掛の設立は明治 23 年にさかのぼる。元々は明治 16 年に山口半六への設計委託が行われ、建築掛設置としての素地が形成された。それまでの教育建築は例えば工部大学校→帝国大学では、指導教官による設計が行われ、他の地域ではそれぞれの営繕課・営繕掛が設計を担当、小さな自治体では大工に請負をしていた。

明治24年に文部大臣官房会計課建築掛と組織変更し、翌25年には久留が山口の後を継ぎ建築係長となる。建築掛は明治33年に建築課となるが、この頃には帝国図書館や京都帝国大学福岡医科大学、各地での実業専門学校の新営が相次ぎ、業務の拡大に伴って人員も増えていったことによるものである。

明治 40 年に東京·京都帝国大学に営繕課と建築部がそれぞれ設置される。これ以外の新営工事では文部省中央の営繕組織が担当し、各技師がローテーションを組むような形で各地に赴任し、建物の設計・監督を行っていた。明治 45 年に東北·九州各帝国大学に建築課が設置されると、それぞれの建築課が中心となり建築活動が行われ、教育施設の新営事業も一段落付くことによって、中央政府による建築活動は大正後期までいったん停滞することになる。

九州(福岡県)における九州帝国大学建築課の存在について……

九州における建築活動は、大正後期に至るまで福岡県をはじめとした官庁営繕組織による活動と関東・関西の民間建築事務所による作品が多く建てられていた。県庁においては、内務部営繕課の他、大正14年には警察部建築課が設立する。長沢建築設計事務所(1926)や松田設計事務所(1931)が登場するまで官公庁による設計活動が中心となっていた。九州帝国大学建築課はこのような状況の中で九州各地から設計業務の依頼が出され、参考に掲げた倉田作品が実際に多く建てられている。

倉田謙について……

明治14年8月19日東京市生まれ、明治39年に東京帝国大学卒業。卒業設計は「消防署」であり、ロマネスク様式を用いた建築をそこでは使用している。

まず京都市商品陳列所の建築主任を経て、明治 41 年 4 月からは東京高等工業学校建築科 講師となり構造・設計製図を担当している。

技師としての九州帝国大学への赴任は建築課設置と同時の明治 44 年 11 月 20 日 (明治 45 年 3 月 31 日説も有り)である。当時工科大学の新営工事が続いている状況で、これを前任者の矢島一雄から引き継ぐ形で関わり、大正 3 年までに工事を完工している。

九州帝国大学の在任期間では、大学内の各種建築の新営に携わったほか、福岡市の建築顧問や愛媛県松山市の大宝寺の修理工事監督、福岡県庁の増築工事の顧問や熊本県の六殿神社修理の工事監督にも携わっている。

1929年に九州帝国大学を辞した後、1930~1932年には高知国分寺金堂の解体修理工事に 文部省の監督技師として関わっている。後に東京に戻り独立、建築事務所を開設し、1940 年1月9日逝去。

参考文献

宮本雅明『日本の大学キャンパス成立史』、1989 年、九州大学出版会 「工科大学建築学科卒業生」『建築雑誌』、1906 年、日本建築学会

倉田謙「故正員岡田信一郎君略歴」『建築雑誌』、1932 年、日本建築学会 土田充義「九州大学工学部創立期の建築」『日本建築学会九州支部研究報告』、1968 年 高堂徳治「私の受けた建築教育」『建築雑誌』1975 年 12 月号、日本建築学会

宮本雅明・石田潤一郎・谷直樹「明治後期・大正前期における文部省営繕の構成:文部省営繕組織について・その1」『日本建築学会学術講演梗概集(計画系)』、1977年 石田潤一郎・谷直樹・宮本雅明「明治後期・大正前期における文部省営繕技師の活動:文

日田国一郎・谷直樹・呂本雅明「明信後期・人正前期における文部有呂橋校師の信期: 文部省営繕組織について・その 2」、『日本建築学会学術講演梗概集(計画系)』、1977 年 土田充義「九州の近代建築を建てた人々」『建築雑誌』1980 年 2 月号、日本建築学会 宮本雅明「明治期における文部省営繕組織の構成と改革 高等教育施設の史的研究(1)」

『日本建築学会計画系論文集』292 号、1981 年

土田充義「九州の近代-建築家不在の土壌-」『建築雑誌』1981 年 8 月号、日本建築学会 水野信太郎「和紙問屋の屋敷構え」『生涯学習研究と実践:北海道浅井学園大学生涯学習研 究所研究紀要』8 号、2005 年

三浦要一「国分寺金堂の昭和修理」『日本建築学会近畿支部研究報告集(計画系)』、2006 年

九州大学事務局人事課「倉田謙履歴書」

(参考1) 倉田謙設計作品群一覧(未確定の作品を含む) ●…現存確認 ○…解体確認

- ●九州大学工学部造船学教室実験室(1921·岩崎組)
- ●九州大学農学部附属汽罐室(1921·橋本商会)
- ●九州大学農学部附属農場施設群(1923)
- ○熊本市役所(1924·佐伯工務所)
- ●九州大学工学部道路工学実験室(1925·佐伯工務所)
- ●九州大学旧法文学部本館(1925・岩崎組)
- ●九州大学本部(1925·佐伯工務所)
- ●九州大学事務局第三庁舎(1925)
- ●九州大学工学部食堂(1925·佐伯工務所)
- ○福岡日日新聞社(1925)
- ○九州大学医学部第一外科教室(1926・岩崎組)
- ●九州大学(旧制福岡高等学校)西新外国人教師宿舎第3号棟(1927)
- ●九州大学アドミッションセンター (1927)
- ●九州大学農学部農芸化学実験室(1927)
- ●九州大学工学部応用化学教室(1927·佐伯組)

--- (ここまで九州帝国大学在任期間) ---

- ○久留米市役所(1929・大林組)
- ●門司区役所(1930・大林組)
- ●九州大学旧工学部本館(1930・清水組)
- ●九州大学医学部基礎研究 A 棟 (1931·大林組)

(参考2) 光吉健次設計作品群一覧 (~1968年までの分)

- ○福岡西警察署(福岡市荒江/1957年3月・日建産業/RC2F) 久我興産ビル(福岡市天神/1957年8月・牧野工務店/RC5F) 中村医院(福岡市鳥飼/1957年10月・隅永組/W2F) 杉乃井ホテル(大分県別府市/1958年5月・大林組/RC3F)
- ●九州大学建築学教室(福岡市箱崎/1960年3月・清水建設・竹中工務店/RC3F)
- ●浜玉町役場(佐賀県唐津市浜玉町/1960年3月・清水建設/RC3F) 香月邸(福岡市古小鳥/1959年6月・池田工務店/RC2F)
- ●丸屋ビル第1期(鹿児島市呉服町/1960年11月・清水建設/RC3F)
- ○七山小学校(佐賀県唐津市七山/1962年9月・清水建設/RC1F)
- ●若戸大橋料金所(北九州市戸畑区/1962年10月・大林組/SRC1F) 県立嘉穂高等学校図書館(福岡県飯塚市/1962年12月・鹿島建設/RC2F) 川内聖母幼稚園(鹿児島県薩摩川内市/1964年6月・RC1F) 光吉自邸(福岡市東区名島/1963年4月・清水建設/RC2F) 鹿子前ビジターセンター(長崎県佐世保市/1965年11月・松本組/RC1F)
- ○野の花学園(福岡市西区今宿/1966年4月・高林組/CB1F) 永岡ビル(福岡市博多区土居町/1965年10月・高松組/RC3F)
- ○川内カトリック教会 (鹿児島県薩摩川内市/1966年12月・銭高組/RC1F)
- ●丸屋ビル第2期(鹿児島市呉服町/1960年11月・清水建設/RC3F)
- ●九州大学創立 50 周年記念講堂(福岡市東区箱崎/ 1967 年 11 月/戸田建設/ RC4F)
- ●清風荘(鳥取県米子市/藤田組/RC8F) 福岡市水道局(福岡市博多区/龍建設/RC1F) 八女公民館(福岡県八女市/銭高組/RC3F) 浜玉中学校(佐賀県唐津市浜玉町/大成建設/RC3F)
- ●安楽寺久遠堂(宮崎県都城市山之口町富吉/工務店/RC2F) 『建築』昭和43年4月号より、一部追加

「福岡市都市景観賞」

【事務局第一庁舎】



1999年、福岡市が主催している第13回福岡市都市景観賞に、九州大学箱崎キャンパスにある「事務局第一庁舎」が選ばれました。

福岡市都市景観賞は、ゆとりとうるおいのあるまちをつくるため、また、福岡らしい個性と顔と魅力を持ったまちを育てるために、地域に根ざした市民主体のまちづくりを目指す取り組みの一つとして1987年に創設されているものです。

【工学部本館】



2008年、福岡市が主催している第22回福岡市都市景観賞に、九州大学箱崎キャンパスにある「旧工学部本館」が選ばれました。

『「近代化産業遺産群 続33」の選定 (平成21年2月6日:経済産業省)』

平成19年度とりまとめた全国575カ所の近代化産業遺産を内容とする 「近代化産業遺産群33」に引き続き「近代化遺産群 続33」として全国5 40カ所の近代化産業遺産が経済産業省から認定された。

「近代化産業遺産」とは、我が国産業の近代化を支えた建造物、機械等につ いて、公募方式により、「産業遺産活用委員会(座長は西村幸夫 東京大学教 授・工学博士) | の審議を経て認定されているもの。

近代化産業遺産が地域の関係者の皆様に活用されることにより、地域活性化 につながることを目的として認定されている。

◆構成遺産リスト(抜粋)

| 所 | 在地 | 名称 | | | 文化財指 定・登録 | 公開状況 |
|------|-------|-----------------|---------------------------------|-----------|--------------|----------------------------------|
| 都道府県 | 市区町村 | | (不動産) | (動産) | 状況 | 公用从优 |
| 福岡県 | 福岡市東区 | 九州大学工学 部関連遺産 | 旧工学部本館 | | _ | 外観は公開 (内部は現 役校舎とし て使用中) |
| | | | 旧工学部応 用物質化学 機能教室 | _ | 1 | 外観は公開 (閉鎖中に つき内部は 立入禁止) |
| | | | 旧工学部超 伝導システ ム科学研究 センター | _ | | 外観は公開 (内部は現 役校舎とし て使用中) |
| | | | 旧道路工学実験室 | _ | 1 | 外観は公開 (閉鎖中に つき内部は 立入禁止) |
| | | | 旧工学部航空工学教室 | <u></u> = | <u></u> | 外観は公開 (閉鎖中に つき内部は 立入禁止) |

112

建物の活用事例パターンについて

活用事例を述べる前に、遺す・壊すという二択以外の選択方法が種々あることを確認する。 建物の潰し方について

土地の高度利用や景観保全の目的から、保存には様々な手法を採られることがある。

- ①. 全部保存……建物の価値を伝える上では基本的な手法。建物の用途と景観を後世に 伝えるためにもっとも適した方法である。
- ②. 一部保存……土地の高度利用を図りつつ、建物の景観的な価値を伝えるために、恥 部を保存する方法を採ることがある。

. . .

- ③. ファサード保存……建物の正面部分のみを保存する方法。施工方法によっては部材 が全く異なるなど、似ても似つかない建物になることもあり、注意が必要。
- **④. エレメント保存**……建物の象徴的な部材のみを遺す方法。一部内装の保存などでし ばしば用いられることがある。
- ⑤. 復元……建物の価値が全く失われた後で、全く新しい部材で同じような建物を再現 することがある。

・建物の保存と保存場所について

建物はその場所との関連性によって地域住民とともに価値を醸成する。公共建築はその 建物に関わり利用する人間が比較的多いため、社会風潮的に保存されやすい傾向にある。

- I. 現地保存……建物は作られた地理的背景に基づいて建てられているため、基本的に は現地保存が望ましい。
- Ⅱ.移築保存……諸事情によって建物の現地保存が難しい場合、移設による保存方法が 採られることがある。博物館明治村が典型的例。解体・部材としての活用が容易な木造建 築を中心に用いられやすい。鉄筋コンクリート造構造物の場合は曳家保存によって建物の 保存を行うことが出来る(長距離移動が難しい)。
- Ⅲ. 解体保存……現地保存が難しく、なおかつ移設場所が決まらない場合、建物の部材 のみを一定の保管場所に遺し、将来の再建に備えることがある。

建物の転用について

- a. 現用途による使用……建物はその用途にもっとも適した作り方を求められるため、 教育施設は出来るだけ教育用途の施設で用いることが望ましい。
- b. 一部転用……建物自体の敷地面積が広くとられているなど、同一用途での使用が難 しい場合、複合的な用途で用いられることがある。
- **c. 全面転用…**所有者の変更などで用途を変えざるを得ず、なおかつ建物の建築学的 価値を保全していくために用途を当初とは異なるものに変えながらも保存されることがあ る。国登録文化財になった都市施設を中心にこの手法を用いることが多い。
- **d.モニュメント**……建物が使用に耐えなくなったが、地域の象徴として保存される例。 軍艦島(三菱端島炭鉱施設群)や志免鉱業所竪坑櫓(国指定重要文化財)は典型的例。

⑤- (I-a.) みずほ銀行京都中央支店 (第一銀行京都支店・1906-2003 年)



元々は辰野葛西事務所が設計し た銀行建築で、解体撤去の後現在 の用途に応じほぼそのままの形で 再現された。遠目から見れば往時 の姿とそれほどの変わりがない。

⑤- (I-c.) お茶の水スクエア (旧主婦の友社)



お茶の水にあった出版社建築を 一度解体し、低層部分で主婦の友 社時代のファサードを再現。背面 に磯崎新設計による高層棟を設け ている。

④-I-b. 三菱東京UFJ銀行京都支店(三菱銀行京都支店・1925年)



鉄筋コンクリート造で御影石が 貼られた重厚な建築であったが、 土地の高度利用が図られた結果一 部角地の部材が保存された。

④-Ⅱ-d. 堂島アバンザ(旧毎日新聞社本社・1922年)



毎日新聞社跡地の再開発事業と して複合施設が建てられた。モニュメントとして旧施設の玄関ポー チ部分が遺されている。



③- I - a. 京都中京郵便局(同左/重要景観建造物・国登録有形文化財・1902年)



京都三条通に現存する明治期の兼 題建築群を構成する重要な建物のひ とつ。日本で最初の本格的ファサー ド保存による実例であり、再現度も 非常に高い。

②-Ⅱ-c. 熊本学園大学産業資料館 (旧熊本紡績電気室/国登録有形文化財・1896年)



明治中期の紡績工場施設が解体 撤去された際、一部施設を熊本学 園大学が引き取り、壁面を分割輸 送して大学内資料館として活用。

①-II-c. 佐賀大学菊楠シュライバー館(旧制佐賀高等学校外国人宿舎・1925 年)



元々は佐賀大学に近接した位置 に建てられていた。移築の上、地 域学歴史文化研究センターとして 大学敷地内で活用されている。

②-I-b. 日本工業倶楽部会館(同左・国登録有形文化財・1920年)



東京駅丸の内口の象徴的施設のひとつ。写真にあるように南側部分の保存を図りながら、高層化を行い、高層棟は三菱UFJ信託銀行として活用されている。

②-I-c. カラオケレンガ館 (旧日本毛織加古川工場6番倉庫・1898年)



日本毛織の工場原綿倉庫を商業 施設に転用。再開発施設に隣接し、 各階ごとにテナントが入居してい る。

②- I - b. 大阪証券取引所市場館 (同左・1935年)



現施設の高層化が進められ、背面 に高層棟を建設。東京中央郵便局の ような正面玄関の象徴的な列柱部分 を中心に保存されている。

②- I - c . d . 門司赤煉瓦プレイス

(帝国麦酒門司工場/国登録有形文化財・経産省近代化産業遺産・1913年)



煉瓦造の工場事務所・醸造施設の 一部を展示施設、商業テナントとし て転用、一部高層棟に関しては地域 再開発エリアのモニュメントとして 保存されている。

①-I-c. フロインドリーブ

(旧神戸ユニオン教会/国登録有形文化財・2001年 BELCA賞・1929年)



教会建築が阪神淡路大震災を機に 解体撤去の危機となったが、地域の 会社に買い取られベーカリー店の販 売所兼カフェとして活用されている。

①-I-c. 日立市武道館 (旧日立鉱山共楽館/国登録有形文化財・1917年)



元々は日立鉱山の施設として建 てられた。日立市により受け継が れ、武道場として使用される。近 年耐震改修が行われ、東日本大震 災にも耐えた。

①- I - c. 田中絹代ぶんか館(旧下関逓信省電話別館/市指定有形文化財・1923年)



逓信省建築の中でも近年もっと も激しい保存運動が行われた結果、 下関市が郷土の有名人の顕彰施設 として改修。公開されている。

①-II-c. ブルーブルー小倉 (旧小倉警察署庁舎/国登録有形文化財・1890年)



明治時代の警察署庁舎を昭和初期に曳家の上医院へ転用。2004年にはアパレルショップが建物を買い取った上で商業施設に転用、改装を行った。

②-I-c. **倉敷アイビースクエア** (旧倉敷紡績工場施設/経産省近代化産業遺産・1889年)



煉瓦造の工場施設を 1973 年に ホテルに転用したリノベーション の先駆的事例。日本建築学会賞を 受賞している。周辺は美観地区に 定められ、施設を中心に良好な景 観が保全されており、観光客も多 い。

①- I - b. **津山郷土博物館**(旧津山市役所/国登録有形文化財・1933 年)



岡山県北部の中心都市である津山市の市庁舎とて建てられ、現在は博物館に転用されている。九州大学工学部本館や門司市役所との類似性が一目で確認できるが、設計者である磯兼権蔵と倉田謙との関わりは不明。

①-I-c. **関門海峡らいぶ館など**(三井物産門司支店→JR九州北九州本社・1936年)



戦後国鉄の所有となり、長く鉄 道都市の象徴的施設であった。1 ・2階部分をギャラリー・展示施 設としてリノベーションし一般公 開されている。しかし耐震の問題 から現在多くのフロアは未利用と なっている。

①-I-b. 料亭あをぎり(林田春次郎邸/国登録有形文化財・大正期-昭和初期)



福岡県田川市長の邸宅を子孫が旅館業を経て料亭として再活用。敷地面積は往時より縮小しているが、田川市石炭歴史博物館に近い立地もあり、盛況である。

①- I - c. **姫路モノリス** (姫路郵便局電話分室・1930年)



いわゆる様式建築に属さない近代 の建物が近年結婚式場として転用さ れるケースが増えつつあるが、その 典型的な事例であると言える。

①- I - c. 新風館

(京都中央電話局/市登録有形文化財・2004 年グッドデザイン賞・BELCA 賞・1931 年)



逓信省建築でタイルを多用したロの字構成の建物。NTTファシリティーズとリチャード・ロジャースパートナーシップ・ジャパンとの共同設計により、大規模なリノベーションが図られ、テナント商業施設として復活した。

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ(第1回)議事要旨

日 時: 平成24年4月27日(金)10:30~12:30

場 所:九州大学事務局第四会議室

出席者:省略

◎議事に先立ち、WG長を常岡委員と定め、各委員から挨拶があった。 また、オブザーバーとして九州大学新キャンパス計画推進室の坂井教授の出席について、 常岡WG長から諮られ、出席を了承した。

I. 議 事

1. 今後のWGの進め方等について

常岡WG長、関係委員から、資料について概要の報告があった後、大要「○」のような意 見交換が行われ、WG長が「●」のとおりとりまとめた。

- ○大学として、箱崎キャンパスの建物の評価がなされていない状況である。
- ○評価の視点は色々あるが、WGとしての判断材料を作成する必要がある。
- ○WGは必要があれば第5回以降も開催する必要があるのではないか。
- →必要があれば開催するが、次回以降のWGで必要の有無については判断したい。
- ○埋蔵文化財の保存方法として記録保存する方策がある。建物の記録保存は考えられない のか。
- →箱崎キャンパスの現状の建物の記録保存は必要であろう。
- ○耐震補強が必要な歴史的建物もあると考えられるが、耐震診断を無視して歴史的重要な 建物を評価する必要があるのではないか。
- →評価の視点については、今後検討することとなる。
- ○学問の府としての近代建築物の評価を実施する必要があるのではないか。
 - →学問の府としてWGが客観的評価を実施したい。
- ○旧工学部の建物の一部について内装・インテリア等についても調査が必要ではないか。 →内部の調査の必要があれば意見を事務局まで連絡していただきたい。
- ○産業遺産的観点からも調査が必要ではないか。
- →次回のWGで、現地調査の必要があれば調査する。
- ○重要な記念碑や樹木等も評価の参考としてはどうか。
- →次回以降のWGで、現地調査の必要があれば検討する。
- ○耐震診断等の必要な基礎資料はどのように準備していくのか。
- →現存している資料は、事務局で準備する。
- ●私たちの役割は近代建築物の評価であるが、その評価が現実の計画にどうつながるかが 重要である。その仕組みも考えてほしい。
- ●歴史的観点・文化的視点から建物の評価を実施する。
- ●学問の府としてWGが建物の客観的評価を実施する。
- ●「平成17年度九州大学キャンパス内歴史的資源の現状調査」を出発点として客観的評価をWGが実施する。
- ●次回のWGでは、箱崎のキャンパスの現地建物調査及びWG開催を予定しているが、調査対象建物等の決定はWG長に一任する。

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ(第2回)議事要旨

日 時:平成24年5月17日(木)10:00~14:00

場 所:九州大学事務局第五会議室

出席者:省略

◎箱崎キャンパスの近代建築物現地調査の後、議事に先立ち、常岡WG長から、前回の記録について確認いただき、意見等あれば事務局あて連絡願いたい旨の発言があった。

I. 議事

1. 評価手法等について

常岡WG長から、資料についての説明があった後、今回、現地調査した建物の内、評価の対象とする建物及びその評価の考え方について本WGで協議したい旨諮られ、これを了承した。

ついで、大要「○」のような意見交換が行われ、WG長が「●」のとおりとりまとめた。

- ○本 WG は専門的立場から客観的データを取りまとめることを目的とするとされているが、 そのためには客観的資料が必要である。
- ○近代建築物の学内情報はどこにあるのか。
- →大学文書館にある本学の図面等の資料は病院地区を含めて活用していただきたい。
- ○耐震診断・老朽度・危険度の調査を行っていない建物の取扱はどうするのか。
- →必要性を考慮して絞り込みのうえ、検討したい。
- ○類似する建築物を並べて評価するため、福岡市内の同様の建築年・設計者等の記載され た資料が比較資料として必要ではないか。
- →事務局で参考資料を作成する。
- ○産業遺産の展示活用について現在どのような状況か。
- →旧工学部にあった産業遺産の一部は博物館で一時保存等している。
- ○箱崎キャンパスの建築物の設計者等をとりまとめた資料が必要ではないか。
- →事前に資料が検討できるよう次回委員会の前まで作成し、メールで各委員に配布したい。
- ○評価項目一覧、評価基準(たたき案)を作成できないか。
- →材料をそろえて検討する必要がある。
- ○評価対象建物を箱崎キャンパスマップに表示した資料を準備していただきたい。
- →事務局で作成のうえ、メールで各委員に配布したい。
- ○評価値を3~5段階としてはどうか。
- →当面は4段階評価として検討する。
- (1) 評価の対象とする建物
- ●原子核実験室、第三学生集会所、松浜厚生施設、熱帯農学研究センター、砂防工学実験 室、農学部六号館、留学生センター(分室)、航空工学教室、船舶海洋工学実験室、高温 度学生実験室、応用物質化学機能教室、建築学教室、超伝導システム科学研究センター、

122

道路工学実験室、旧心理学教室、記錄資料館、旧応力研生産研本館、保存図書館、創立五十周年記念講堂、本部第一庁舎、本部第三庁舎、工学部本館、正門門衛所、正門、農学部庭園

(2) 評価項目等の資料

- ●WG長・提案の評価項目一覧(案)の変更し活用する。
- →2.「建築史的評価」を追加
- →3.「危険度評価」のところ「安全性評価」に変更する。
- →5.「地域貢献度評価」を削除

ただし、地域の歴史・文化資産、地域景観資産としての評価や地域住民への貢献は、 文化的評価の項目に加える。

以上のとおりの評価項目一覧(案)を事務局で作成し次回WG前までに各委員へ配布する。

- ●箱崎キャンパスの評価対象建築物全体図を準備する。
- ●評価基準を「歴史的建造物を有効活用するための評価手法」の例を参考に4段階で作成する。
- ●客観的な評価をするために、評価項目についての客観的資料をできる限り収集する。たとえば類似する建築物を並べて評価するため、福岡市内の同様の建築年・設計者等の記載された資料が比較資料を準備するなど。

123

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ(第3回)議事要旨

日 時:平成24年6月15日(金)13:00~15:40

場 所:九州大学本部第一会議室

出席者:省略

◎箱崎キャンパスの近代建築物現地調査に先立ち、オブザーバーとして九州大学大学文書 館百年史編集室の市原テクニカルスタッフの出席について、常岡WG長から諮られ、今 後の出席を了承した。

◎箱崎キャンパスの近代建築物現地調査の後、議事に先立ち、常岡WG長から、前回の記録について確認いただき、意見等あれば事務局あて連絡願いたい旨の発言があった。

I. 議事

1. 評価手法等について

常岡WG長から、資料2について再修正の意見があり、内容は朱書きのとおりである旨の説明があった。

土田委員から、資料3の項目設定の趣旨について説明があった。

常岡WG長から、資料8、12、13について説明があった。

市原委員から資料5、14について説明があった。

坂井委員から資料11について説明があった。

岡野統合移転推進課長から、資料4、6、7、8、9、10、15、16、17、18、19について説明があった。

ついで、常岡WG長から、資料2の大項目ごとに意見を求められ、次のとおり意見があった。

- (1) 歴史的評価について
 - →箱崎キャンパスが建設される歴史的背景を踏まえて評価すべきではないか。
 - →企業などの寄付により、箱崎キャンパスの建物の一部が建設された。
 - →旧法文学部の土地・建物は官費で購入・建設された。
- (2) 建築学的評価について
 - →造船学・航空学の建物は、全国に類似例の少ない建物であるところが評価のポイントではないか。
 - →関東大震災後に建設されたコンクリート造の建物は随所にアールを用いているところが、評価のポイントではないか。
 - →関東大震災以降の建物は、レンガ造りから、耐震性を考慮したコンクリート造りへ の移行してところも考慮すべきではないか。
 - →評価対象の建物は、自然の風を取り入れる知恵がほどこされているところが、ポイントではないか。
 - →大学の学問分野的評価、社会的評価も考慮する必要があるのではないか。

- (3) 文化的評価について
 - →地域の拠点としての意味がある建物が含まれているのではないか。
 - →九州帝国大学としてのシンボル性がある建物が多い。
 - →航空工学教室は、戦前、戦中、戦後と歴史に翻弄されている。
- (4) 再活用度評価について
 - →資料12の近代化産業遺産群は、観光目的な要素も含まれている。 なお、選定されたのち、取り壊された建物はないと思われる。
 - →資料13の福岡市都市景観賞は、福岡市へ申請した者が箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの統合移転後も残したい建物を推薦している。

最後に、常岡WG長が次のとおり、取りまとめた。

- ●各WG委員は、建物ごとに中項目で評価し、コメントを必要に応じてを記載する。
- ●次回WGで、各委員から提出された評価・コメントについて意見交換し、各委員の評価等に修正の必要があれば修正する。
- ●工学部 7 5 周年記念庭園(地蔵の森)の歴史的背景を考慮し、評価の対象に加える。 また、資料 7 の実験棟(農学部)については、倉田謙氏が設計者であることが判明した ため、評価建物に加える。
- ●評価シート(案)を次のとおり変更する。

なお、評価をする段階で評価シートの評価項目の修正が必要となった場合はメールで協 議する。

- →2.「建築学的評価」の中項目の上の欄に「営繕制度的評価」を追加 下の欄の「環境」のところを「建築設備」に変更
- →5.「安全度評価」を削除し、
- 4. 「再活用度評価」の中項目の下の欄に「安全度評価。」「老朽度評価。」を追加
- →評価は中項目ごとにS、A、B、Cで評価する。 また、公的な評価(福岡市都市景観賞等)があるものは、相当する評価軸において、 S評価となるが一般的である。
- ●事務局で資料3の「箱崎地区近代建築物一覧(案)」に本学に現在蓄積されている老朽度 評価、耐震性評価などのデータを追加記載する。
- ●事務局で資料4「箱崎地区全体配置図」に資料16「駅からの利便性が特に高いエリア について」を重ねて記載する。
- ●事務局で、建物ごとの写真、必要なデータ等を記載した評価シートを作成する。
- ●第4回目のWGで成果物のまとめまでは出来ないため、第5回WGを開催し最終案を作成する。
- ・次回のWGは平成24年7月26日(木)10:00~

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ(第4回)議事要旨

日 時:平成24年7月26日(木)10:00~12:00

場 所:九州大学本部第五会議室

出席者:省略 欠席者:省略

◎議事に先立ち、常岡WG長から、前回の記録について確認いただき、意見等あれば事務局あて 連絡願いたい旨の発言があった。

I. 議事

1. 評価のまとめの検討について

常岡WG長から資料1~4についての説明があった。

また、資料1は、各委員から提出された評価であるが、今回のWGの意見交換を踏まえて 各委員で評価の修正があれば修正願いたい。修正した結果は、平成24年8月8日(水)ま でに事務局あてメールで提出願いたい。また、委員の間で評価にバラツキがある評価集計は、 もう一度見直しを依頼したい。

岡野統合移転推進課長から九州大学箱崎キャンパス跡地利用将来ビジョン検討委員会第3回 委員会資料に基づき、説明があった。

ついで、常岡WG長から箱崎キャンパス近代建築物の評価集計シートについて意見を求められ、次のとおり意見交換した。

修正済の評価が各委員の評価として、活用してはどうか。

→修正済の評価が各委員の評価として最終報告等に活用する。

使用中の建物、閉鎖中の建物では、評価がかわるのではないか。

→建物のメンテナスの状況が異なるため、再活用する場合に差が出るであろう。

旧応力研生産研本館は、鉄筋・コンクリート等の耐久性がないため、再活用は建物全体の活用に無理があるのではないか。

→低層階の利用のみ、外観だけを再活用する方策もあると考えられる。

また、ラウンドマーク的な評価は高いと考えられる。

建物の規模が小さいものは再活用しやすいのではないか。大規模の建物と同列で評価してよいのか。

→ラウンドマーク的建物は規模にかかわらず存在するため、客観的に評価すべきである。 正門門衛所は、箱崎で一番古い建築物であるが、解体して移築いているのではないか。

→レンガ造りであるため、解体しての移築の可能性は低い。

関東大震災(大正12年)後、レンガ造りの新規の建築物は珍しいと考えられる。

→震災前から建設計画があったため、建設をされたとも考えられるため、今後評価のうえで必要があれば経緯を再調査すべきである。

本部第一庁舎、第三庁舎を例にすると歴史的評価は同じでよいのか。

→歴史的評価は同じであるが、ラウンドマークとしての評価は異なると考えられる。

創立五十周年記念講堂の現状のままでの再活用は、難しいのではないか。

→再活用する場合は、航空機騒音のための、防音工事等が必要と考えられるが、現状の ままでの再活用はあると思われる。

引き続き、常岡WG長から、評価報告書のまとめの方向性について、目次(案)、歴史的建造物評価レーダーチャート(案)に基づき説明があり、次のとおり意見交換した。

文化財的・歴史的建造物を残して土地を売却すると評価額がさがる(マイナス評価)のが 一般的であるが問題ではないのか。

→文化財的・歴史的建造物があることで、逆に土地の価値が上がるような再開発を目指 すべきである。

箱崎キャンパスの境界のレンガ塀等についても評価が必要ではないか。

→庭園、記念碑などと同様に評価すべきであろう。

箱崎キャンパス平面図に評価の高い建物をプロットすべきではないか。

→評点の高い順に建物の順位とつけた平面図を作成したい。

最後に常岡WG長が次のとおりとりまとめた。

- ●評点の算出は、各委員の評価をS=4、A=3、B=2、C=1 とし、中項目の項目ごとに各委員の平均点とする。
- ●各委員の評価は、絶対評価とする。
- ●各委員の平均点を合計し、評点の高い順で建築物の順位をつける。
- ●ウエイト付けによる順位付けは、参考資料として作成する。
- ●建物の順位付けに、正門、農学部庭園、工学部創立75周年記念庭園(地蔵の森)は、 含めない。
- ●再活用度評価の老朽度等の評点は、WG長、蜷川委員、事務局等で協議し評点する。
- ●各委員の評価が終了したのち、常岡WG長、市原先生、事務局で報告書の原案を作成する。
- ●最終成果報告書(案)については、次回委員会の前に事前配布し、意見を事前にいただき最終WGで決定させる。
- ●歴史的建造物評価レーダーチャート(案)の項目については、①②ではなく、わかりや すい表現(案)を常岡WG長、事務局で作成する。

※原子核実験室の建物台帳の修正について市原オブザーバーから次のとおり説明があった。 →3. 設計者または組織のところ、

原子核実験室の建物台帳の理学部実験室(原子核実験室)図面に押印している課長印は、豊田茂久蔵のもので、島岡春三郎ではない(島岡は図面作成年に逝去)。豊田は会計課長を兼任していた事務職であるため、こちらの設計には当時の建築課長の関与が無く、文部省技師である坪井善勝であると断定してよい。

そのため、「島岡春太郎」「坪井善勝」のところ「島岡春太郎」を削除し、「坪井善勝」としていただきたい。

・次回のWGは、平成24年9月開催予定とし、後日の日程調整を行う。

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ(第5回)議事要旨

日 時:平成24年10月9日(火)9:00~11:10

場 所:九州大学本部第五会議室

出席者:省略 欠席者:省略

◎議事に先立ち、常岡WG長から、前回の記録について確認いただき、意見等あれば事務局あて 連絡願いたい旨の発言があった。

I. 議事

1. 老朽度、耐震性、耐火性などによる安全度評価の検討結果について 岡野統合移転推進課長から資料1に基づき説明があった。

ついで、常岡WG長から意見を求められ、次のような意見があった。

- ・老朽度等による安全度評価は、同じ評価軸として成立しない。
- ・老朽度等の評価軸の異なる評価結果を無理に数値化しては、評価にならない。

最後に常岡WG長から、数値による評価は老朽度、耐震性、耐火性などによる安全度評価の項目を除外した7項目で箱崎キャンパスの近代建築物を評価し、老朽度等による安全度評価については、客観的データを参考資料として記載することとし、その旨を九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の評価報告書(以下「報告書」という)に記載することで了解いただきたい旨諮られ、これを承認した。

2. 九州大学箱崎キャンパスおける近代建築物の評価報告書(案)について 常岡WG長から、資料2に基づき説明の後、次のような意見交換をした。 コンクリート強度試験結果の事実は、報告書のどの部分に記載されているのか。

→コンクリート強度試験結果は、コンクリート中性化、圧縮強度試験結果のみ資料編に記載している。

資料編に九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ議事要旨 を加えるべきではないか。

→資料編に追加する。

建築物毎に評価を数値上明確に差別化すべきではないか。

また、C=1点を配分すると基礎点があるように見えるのでC=0点にすべきではないか。

→各委員の評価をS=3、A=2、B=1、C=0とし、建物ごとに評価の際に21点満点を100点に換算し、満点をわかりやすくした順位付けとする。

特に評価の高い建築物を絞り込むべきではないか。

→対象建物評価配置図に色分けして記載している。

また、同配置図の色分け、記載方法等を見直し、特に評価の高い建築物を明確に記載するなど、評価の意図が読み取りやすくする。

128

歴史的評価等のテーマ毎の差別化が見えにくいのではないか。

→建物ごとの評価シートのコメント欄に補足説明を記載している。

まとめに評価の高い保存図書館が記載されていないのではないか。

→報告書の修正の際に検討していきたい。

ついで、常岡WG長から、報告書の内容について意見を求められ、次のような意見があった。

- 「はじめに」「目的」をそれぞれ別々に記載すべきではないか。
- ・目次の構成を見直すべきではないか。
- ・「まとめ」を「評価のまとめ」「総括」として分割記載すべきではないか。
- ・評価基準・評価方法の記載を充実させて、報告書の信頼度を上げるべきはないか。
- ・箱崎キャンパス近代建築物評点の順位に再活用に必要な情報を記載すべきではないか。
- ・はじめ・まとめ等に記載のある「継承」の表現をわかりやすくする必要があるのではないか。
- ・表現が統一されていないものがあるため、全体的に見直していただきたい。
- ・箱崎キャンパスの樹木等について、コメント等を記載すべきではないか。
- ●報告書の修正等については、追記・修正等のうえ、再作成する。

3. その他

常岡WG長から、今回のWGで終りとする予定であったが、報告書について第6回WGを 開催のうえ審議した旨提案があり、開催を了承した。

129

・次回のWGは、平成24年11月14日16時00分から開催予定。

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ(第6回)議事要旨

日 時:平成24年11月14日(水)16:00~18:10

場 所:九州大学本部第五会議室

出席者:省略 欠席者:省略

◎議事に先立ち、常岡WG長から、第4回の記録についてすでにメールで周知済であるが、修正 分を再確認願いたい旨の発言があり、再記録を確認した。

また、前回の記録について確認いただき、意見等あれば事務局あて連絡願いたい旨の発言があった。

I. 議事

- 1. 九州大学箱崎キャンパスおける近代建築物の評価報告書(修正案)について 常岡WG長から、資料1に基づき説明の後、次のような意見交換をした。 <はじめに>
 - ・日露戦争以降・・・の部分の表現は、違和感があるが問題はないのか。 →表現に問題はないので現状のままとしたい。
 - ・九州の地理的条件・・・の表現を改めていただきたい。 →産業的な重要性・・・に改めることで検討したい。
 - ・福岡工科大学の名称はただしいのか。→誤っているため、工科大学に改めたい。
 - ・工学部本館の煉瓦材を・・・・事務棟煉瓦・・・を修正できないか。→煉瓦材は、他の建築物の材料の使用もあるため「など」を追記する。
 - また、「事務棟」を「大学本部」に修正する。
 - ・大通り・・・がわかりにくので修正願いたい。
 - →キャンパスの西側に・・・で検討し修正したい。
 - ・旧制高等学校、高等学校の表現を統一していただきたい。 →統一する
 - ・プランの変更に伴って・・・・はプラン変更ではないので修正していただきたい。 →法文学部の建設に伴い・・・に修正する。
 - ・「はじめに」(全文) を現状認識として、新たに書き足す必要があるのではないか。 →目的の部分の書き直しを含めて新たに作成したい。
 - ・「はじめに」を「歴史的背景」に表題を改めて、2ページ目の九州帝国大学建築課から、 倉田謙に至る部分を簡潔に表現すべきではないか。
 - →表題「歴史的背景」を改め、簡素化することで検討したい。
 - ・以上のような・・・の最後の部分を全面的に書き改めるべきではないか。
 - →「歴史的背景」として書き改める方向で検討したい。

〈目的〉

・継承がどのようになされているか、・・・の文書を改めるべきではないか。 →継承がどうなされるか、に改める方向で検討したい。

- ・「必要があると考えられていた。」を、「必要がある。」と改めてはどうか。 →書き改めたい。
- ・歴史的、文化的のところ建築学的を入れるべきではないか。 また、何度も同じ表現があるため、大切な資産と2回目を改めるべきではないか。 →ご意見と方向で検討したい。

<近代建築物等の評価対象>

- ・評価に値する・・・の表現を次ページにつながる表現とすべきではないか。 →評価対象建築物としたい。
- ・評価対象建築物を書類から30棟へ絞り込み、現地調査前への流れを付け加えるべきではないか。
- →文書を付け加え修正することとしたい。

<評価対象建築物等>

- ・旧応力研生産研本館(法文学部本館)は、鉄骨鉄筋コンクリート造である。
- ・工学部本館は、一部鉄骨鉄筋コンクリート造である。
- →関係する表現を改める。

<対象建物評価配置図等>

- ・方位、スケールを入れてはどうか。
- 色使いも改める必要があるのではないか。
- キャンパスの出入口も分かりやすく表現できないか。
- →スケールは入れる方向、キャンパスの出入口も表現しなおし、色使いも改めたい。
- ・80点以上、60点、60点未満の色分けした図面を作成すべきではないか。 →参考資料として作成したい。
- ・工学部75周年記念庭園を地蔵の森に改めてわかりやすくすべきではないか。 →地蔵の森に表現を改めたい。

<評価方法>

- ・評価基準をなぜ定めたのか、評価項目の選定として最初記載すべきではないか。 →評価項目の選定として、追記する方向で検討したい。
- ・評価の視点は表現が混乱するので評価にあたっての参照情報としてはどうか。 また、再活用の視点のその他・・・の表現を改めてはどうか。
- →ご意見のとおり改める方向で検討したい。
- ・再活用の視点の老朽度等の表現を削除してはどうか。
- →削除する。
- ・評価のまとめにある「なお~」を評価方法に記載すべきではないか。 →記載場所を改める。
- ・評価基準・評価方法の①②を入れ換えてはどうか。
- →入れ換えて整理する。
- ・評価フロー図を書き改める必要があるのではないか。
- →中項目の決定など加えて表現を改めて再作成する。
- ・参考文献を基本資料と資料作成用の参考文献に分ける必要があるのではないか。 →年代順に並べて変えて、職員録を最後に表現する。

<箱崎キャンパス近代建築物評点の順位>

・再活用に関する留意点は構造的なものであるので表現を改めるべきではないか。→再活用に関する留意点を再活用に関する構造的留意点に改める。

<評価のまとめ>

- ・さまざまな学術的観点をたような観点に改めるべきではないか。 →改める方向で検討したい。
- ・委員の視点により・・・を削除すべきではないか。→削除する。
- ・評価を得た。を改めるべきではないか。→評価をできる。に改める。
- ・個別に貴重な建築物を追記するべきではないか。
- →旧文学部心理学教室、原子核教室の設備、船舶海洋工学実験室、第三学生集会所、航空 工学教室を記載する方向で検討したい。

<課題と提言>

- ・箱崎キャンパスの近代建築物は・・・・の段落と、箱崎キャンパスの近代建築物を再活用 するにあたって・・・を入れ換えてはどうか。
- →入れ換えることとする。
- ・部分保存の前に「外壁保存を含む」を追記していただいきたい。→追記することで検討したい。
- ・このことから・・・の部分を箱崎キャンパス内の建物と図面などの現存、近代建築物の保存の条件、大学の役割、社会的まちづくり、箱崎キャンパスの土地の記憶などのキーワードを加えて、書き直すべきではないか。
- →キーワードを記載し修正することで検討したい。
- ⇒これらの意見交換の後、常岡WG長、事務局で修正・加筆することについて諮られ、これを了承した。

3. その他

常岡WG長から、今回のWGで終りとする予定であったが、報告書について第7回WGを 開催のうえ審議した旨提案があり、開催を了承した。

・次回のWGは、平成24年12月4日17時00分から開催予定。

(以 上)

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ(第7回)議事要旨(案)

日 時: 平成24年12月4日(火)17:00~19:00

場 所:九州大学本部第五会議室

出席者:省略

◎議事に先立ち、常岡WG長から、

前回の記録について確認いただき、意見等あれば事務局あて連絡願いたい旨の発言があった。

I. 議事

1. 九州大学箱崎キャンパスおける近代建築物の評価報告書(修正案)について 事務局から、資料1に基づき説明の後、常岡WG長から意見を求め、次のように修正する こととした。

<はじめに>

- ・近代建築物の客観的評価を行うこととなった。
- →近代建築物の客観的評価を行った。
- 報告書の作成に取りかかり、
- →削除
- <評価対象建築物等>
- ・旧応力研生産研本館の「鉄骨鉄筋コンクリート造」
- →「鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造」
- <歴史的背景>

熱帯農学研究センターは木造平屋建で特徴的な外観を持っている。

- →熱帯農学研究センターは洋風も木造平屋建で演習林本部として造られた。
- ・当時の建築課長である倉田謙の手によって・・・
- →当時の建築課長である建築家倉田謙の手によって・・・
- ・戦後期間に入り・・・戦後のキャンパス形成に大きく貢献した。
- →常岡WG長と事務局で文章を簡潔に修正すること。
- <評価項目の選定>
- ・参考資料が前面に表現されているため、全面的に文章を作成し直すこと。
- →常岡WG長と事務局で文章を再作成することで、これを了承した。
- <参考文献>

参考文献 (評価資料の作成用)、参考資料 (基本資料)

→基礎資料、客観的評価に活用した資料

<評価のフロー図>

- ・資料の分析・収集・検証による項目の絞り込みの実施
- →客観的に評価に相応しい考え方、枠組みの検討
- <評価のまとめ>

常岡WG長から、評価のまとめ、提言と課題を別々に取りまとめる予定であったが、分かりにくくなるため、まとめとして表現を変更した旨の説明があり、特に意見なくこれを了承した。

ついで、次のとおり修正することとした。

- 近代化建築物
 - →近代建築物
- ・国内でも稀であり貴重な場所であると評価できる。
- →国内でも希な貴重な地区であると評価できる。
- ・箱崎キャンパスの近代建築物を仮に再活用する場合は、安全性や法適合性の問題がある。 一般的に近代建築物を再活用するには、建築基準法に照らした・・・
- →箱崎キャンパスの近代建築物を仮に再活用する場合は、建築基準法に照らした・・
- 外壁等を含む・・・
- →外観等を含む
- 提言の文章が長すぎるのでを見直すこと。

たは創建期の写真のページを作成のうえ加える。

- →常岡WG長と事務局で文章を再作成することで、これを了承した。
- ※委員から朱書きの訂正があった部分については、意見どおり訂正する。 また、「3.評価対象建築物等」「4.歴的背景」「資料編」に見る側の立場に立って外観ま

3. その他

常岡WG長から、今回のWGで終りとし、報告書についての修正は一任願いたい旨の意見があり、これを了承した。

(以 上)

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ の設置について

> 平成24年 4月25日 事務局長裁定

(名 称)

第1 本会は、「九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループ」(以下『W G』という)と称する。

(目 的)

第2 本WGは、九州大学の移転に伴う九州大学箱崎キャンパス跡地の計画的なまちづくりと円滑な跡地処分に向け、九州大学箱崎キャンパス内に点在する近代建築物について、学識者を中心とした構成員からなるWGで調査及び評価を行い、専門的立場から客観データを取りまとめることを目的とする。

(設置期限)

第3 WGの設置期限は、平成25年3月末までとする。

(組織及び委員)

- 第4条 委員会は、別表に掲げる委員をもって組織する。
- 2 委員の任期は平成25年3月末までとする。

(WG長)

- 第5 WGには、WG長を置く。
- 2 WG長は、委員の互選により選任する。
- 3 WG長は、会務を総理し、WGを代表する。
- 4 WG長に事故あるとき、または、やむを得ず会議に出席できない場合は、WG長が指名した委員がその職務を代行する。

(WGの開催)

- 第6 WGはWG長が召集し、WG長が会議の進行にあたる。
- 2 WG長が必要と認めたときは、WG以外の者の出席を求め、その説明または意見を聴くことができる。

(事務)

第7 WGに関する事務は、事務局各課の協力を得て、企画部統合移転推進課において処理する。

(雑 則)

第8 この裁定に定めるもののほか、WGの運営に関し必要な事項はWG長が定める。

附則

この要綱は、平成24年4月25日から施行する。

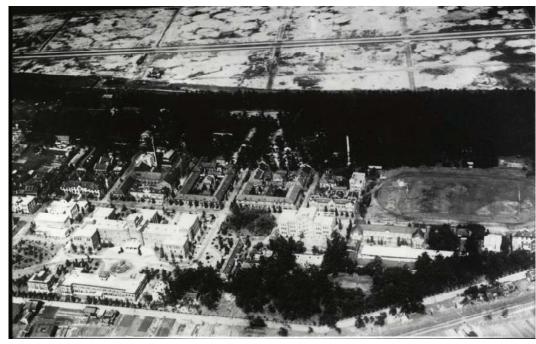
九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査 ワーキンググループ名簿

<u>委員</u> (順不同)

| No. | 氏 | 名 | 所属・役職 |
|-----|----|----|------------------------------------|
| 1 | 常岡 | 稔 | TM環境・建築研究所・代表 |
| 2 | 折田 | 悦郎 | 九州大学・教授(日本近代大学史) |
| 3 | 佐藤 | 優 | 九州大学・教授(コンテンツ・クリエーティブデザイン) |
| 4 | 髙田 | 仁 | 九州大学・准教授(産業マネジメント) |
| 5 | 蜷川 | 利彦 | 九州大学・教授(建築構造) |
| 6 | 土田 | 充義 | NPO法人文化財保存工学研究室・理事長 (鹿児島大学名誉教授) |

オブザーバー (順不同)

| No. | 氏 名 | 所 属 • 役 職 | | |
|-----|-------|----------------------|--|--|
| 1 | 坂井 猛 | 九州大学・教授 | | |
| 2 | 市原 猛志 | 九州産業大学景観研究センター・博士研究員 | | |



1936(昭和11)年の工学部地区

上記写真左には、評価対象の近代建築物である法文学部図書館、工学部本館、仮実験室研究室 (本部第一庁舎)が、上方には埋立地を走る現在の国道3号線が見えている。また写真右には、建 物の増築により、今ではほどんど消滅してしまった工学部グラウンドの姿が見える。



1936(昭和11)年の農学部地区

上記写真左側に工学部グラウンドと松林、上方に埋立地とその中を走る国道3号線、下方には鹿児島本線が見える。また、評価対象の近代建築物である汽罐室(農学部実験室)、演習林本部(農学熱帯研究センター)は、写真中央付近上、写真右には、熱帯農学研究センター(演習林本部)、農学部6号館の場所は空き地のとなっている姿が見える。

※九州大学大学史料室ニュースより写真引用

九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の評価報告書

平成24年12月発行

編集:九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査 ワーキンググループ

発行:九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査 ワーキンググループ

〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話(092)802-2441

印刷:株式会社ミドリ印刷

〒812-0857 福岡市博多区西月隈1丁目2番11号 電話(092)441-6747